

# 三島町歴史文化基本構想



平成 23 年 3 月  
福島県三島町



## 序 文

三島町は平成２３年度から始まる第四次振興計画を策定し、我が町の特産である会津桐を活かした「桐源郷」（住みたい、住み続けたいふるさと）をイメージした町づくりを進めていきます。

その中で、振興計画に先行する形で、平成２０年度から３ケ年間、文化庁より文化財総合的把握モデル事業の受託を受け「三島町歴史文化基本構想」の策定にあたってまいりました。この事業は各市町村が「地域の文化財をその周辺環境も含め総合的に保存・活用していくための基本構想」を策定することにより、全国２０ヶ所に選定された役割は非常に大きいと認識しています。全国の中山間地域は一様に高齢化が進み、集落そのものの維持が困難な状況といえます。我が町においても、国指定重要無形民俗文化財「三島のサイノカミ」をはじめ、県指定の「三島の年中行事」など、我が町で生活する人々の暮らしの中に成り立つ幾多の文化財を支える地域の仕組みが成り立たなくなってきました。本事業によりこの本質的な課題解決に向けた全国の中山間地域のモデルとなれることを願うところです。

その方策として「生活文化観光」を提案しました。この地域の人々が暮らしの中で受け継いできた年中行事、生業、ものづくりや地域づくりなど様々な三島の文化に触れ、年間を通して地域に交流者を呼び込むものです。地域の文化を守りながら交流を通して地域振興を進め、確実に次世代へ継承し、集落の存続を目指していきます。

本町は昭和４９年に提唱したふるさと運動以来、一貫して農村と都市との交流を推進し、そこから地域の文化の掘り起こしを行い生活工芸運動、有機農業運動、地区プライド運動、健康づくり運動を立ち上げました。それらを踏まえて第三次振興計画で「エコミュージアム構想」を掲げ、町あげての交流の土台作りを進めました。この「三島町歴史文化基本構想」を第四次振興計画に反映して更なる拡充を図っていきます。

本事業を進めるにあたり、福島県立博物館長赤坂憲雄氏を委員長として委員の皆様にご多大なるご協力を賜り、本構想の策定を進めることが出来たことを厚く御礼申し上げます。

平成２３年３月

三島町長 齋 藤 茂 樹





## 歴史文化基本構想の策定にあたって

三島町は国の重要無形文化財の「サイノカミ」をはじめとし、「虫送り」や「虫供養」、「雛流し」など数多くの民俗行事が、今なお肅々と生活の中で営まれている。また、ここに暮し、生活してきた生業から生まれた石祠・石仏や寺社、そして自然や景観が今なお生活の一部として溶け込んでいる。このような小さな町でこれほどの民俗文化が残っていることは珍しいことである。

例えば、三島町には会津のものづくりの発祥とも言うべき荒屋敷遺跡がある。その遺物は縄文晩期の木製品や漆製品、繊維製品であり、編み組の原点が20年前に発掘された。これと今三島町で行っている生活工芸運動をつなげることで、歴史に裏打ちされた豊かな技を持つ現代の工芸品といった物語が見えてくる。三島町の新しい発信の形が見えてくるのではないだろうか。そんな新しい物語を地域の若者が掘り起こし、紐解いていくことがこの構想の核となると確信しています。

この構想は関連する文化財を活用することにより、保存・継承していくことを念頭に置き、地域コミュニティが存続し、都市と農村の交流が永続してゆくことが最終的な成果と思う。そこで失ってほしくないことは、日本人の心の世界を三島町で再現しつつ、この地域で活動する次の世代を育てながら推進していくことを切に願うところです。

構想を策定するにあたり、委員の皆さんと相当な議論をしました。文化財を今後どう残していくか、この生活文化を次世代へどう継承していくかという議論そのものに非常に大きな意味があると感じます。ご協力に感謝申し上げます。

平成23年3月

三島町歴史文化基本構想等策定委員会  
委員長 赤 坂 憲 雄



# 目 次

## 序 文

### 歴史文化基本構想の策定にあたって

<b>第1章 三島町歴史文化基本構想の目的</b>	<b>1</b>
第1節 三島町歴史文化基本構想の策定の経緯	1
第2節 構想等の策定方法	2
第3節 三島町歴史文化基本構想の策定方針	4
第4節 構想の位置付け	5
<b>第2章 文化戦略</b>	<b>7</b>
第1節 歴史と文化を活かした「物語」のある地域づくり	7
第2節 物語のイメージ	8
第3節 物語を活用した地域づくり	10
<b>第3章 三島町の文化財</b>	<b>11</b>
第1節 三島町が伝えてきた文化財・守るべき文化財	11
第2節 文化財を保存・継承・活用する意義	11
第3節 文化財に関する調査状況	12
第4節 今後の文化財調査に関する基本方針	12
第5節 調査資料の保存方法	14
<b>第4章 関連文化財群と文化財保存活用区域の設定</b>	<b>17</b>
第1節 関連文化財群としての保存・継承・活用	17
第2節 保存活用区域の設定	19
<b>第5章 三島町全体の概況</b>	<b>21</b>
第1節 三島町の歴史概要	21
第2節 「サイの神」を中心とした年中行事	26
第3節 信仰	31
第4節 河岸段丘と豪雪地帯	39
第5節 町内の遺跡と荒屋敷遺跡	45
第6節 三島の旧街道と文化財	55
第7節 三島町の生業と交易	59
第8節 只見川電源開発	65
<b>第6章 三島町の集落に関する物語</b>	<b>71</b>
第1節 宮下地区	71

第2節	桑原地区	7 3
第3節	大登地区	7 5
第4節	川井地区	7 7
第5節	桧原地区	7 9
第6節	滝谷地区	8 1
第7節	大谷地区	8 3
第8節	浅岐地区	8 5
第9節	間方地区	8 7
第10節	西方地区	9 0
第11節	大石田地区	9 3
第12節	名入地区	9 5
第13節	小山地区	9 8
第14節	高清水地区	1 0 0
第15節	滝原地区	1 0 2
第16節	早戸地区	1 0 4

## 第7章 大きな物語 107

第1節	テーマ1 荒屋敷遺跡から続く編み組・漆文化	1 0 8
第2節	テーマ2 道の物語（みしま野仏巡礼）	1 0 9
第3節	テーマ3 サイの神など彩り豊かな祈りのある暮らし	1 1 1

## 第8章 文化財の保存・継承・活用の方針 113

第1節	文化財保存・継承・活用の担い手	1 1 3
第2節	文化財を核とした学習と伝承の場づくりの方策	1 1 5
第3節	文化財と周辺環境の保全方策	1 1 7
第4節	文化財を核とした情報発信の仕組みづくり	1 1 9
第5節	文化財を核とした交流観光の仕組みづくり	1 2 1

# 第1章 三島町歴史文化基本構想の目的

## 第1節 三島町歴史文化基本構想の策定の経緯

本構想は、三島町の文化財をその周辺環境も含めて総合的に保存・継承・活用していくための「歴史と文化を活かした地域づくり」の理念と方策を示したものである。地域の歴史と文化を活かしながら、集落・地域・コミュニティの誇りと絆の維持・再生を図り、人々の暮らしの中で文化財を保存・継承していくことが本構想の目的である。

文化庁では、平成19年10月の文化審議会文化財分科会企画調査会において指定した文化財などをその周辺環境も含めて一体的に保存・活用していくことが望ましいとし、文化財の総合的な把握が必要であるとの提言がなされた。その方策として「歴史文化基本構想」及び「歴史文化保存活用計画」（以下「歴史文化基本構想等」と言う。）を市区町村で策定することが望ましいとし、以下の基本項目で構成される。

### 歴史文化基本構想の基本項目

#### ①総論

地域の多様な文化財を保存・継承・活用するための基本方針

#### ②関連文化財群

有形・無形、指定・未指定を問わず、地域に存在する様々な文化財を歴史的、地域的な関連性等に基づいて、一定のまとまりとして設定

#### ③文化保存活用区域

関連文化財群や個々の文化財を核とし、それらと一体となって価値をなす周辺の環境を含めて、文化的な空間を創出するための計画区域を設定

#### ④文化財を保護するための体制整備の方針

地域社会との連携を基本とし、NPO 法人・企業等との連携、地域の文化財を保護するための人材育成、民俗文化財の伝承者や支持層の育成、文化財の保存のために必要な原材料や用具の確保方策、等を検討

#### ⑤策定の留意点

地域住民等の積極的な参加／他の計画等との整合性／定期的な評価と見直し／  
「保存・活用計画書」の策定

一方、三島町では昭和49年より自然と人情をコンセプトにした農村と都市との交流事業である「ふるさと運動」を展開し、暮らしの中で保存・継承されてきた年中行事や、生活の道具や民具といったものづくりなど、地域の文化資源を活かした地域づくりを進めてきた。また、平成13年度から第3次三島町振興計画において、それらの地域の資源を展示物と見立てて地域全体を博物館として交流人口の増加を目指す「三島町エコ・ミュージアム構想」を展開してきた。しかし、それらの政策を講じても地域の人口減少は留まることなく、文化財の保存・継承はもとより、すべての前提となる地域そのものの存続が危ぶまれている。その成果や課題を基に、民俗を中心とした新しい地域づくりの展開を広めていくことが求められていた。

そのため、歴史文化を改めて見直しながら町の地域活性化を図っていくとともに、全国の過疎中山間地域の活性化モデルとして歴史文化基本構想を策定すべく、文化庁の「文化財総合的把握モデル事業」に応募した。その結果、三島町を含む全国20件が選定され、平成20年度より3年間、国が提言する「歴史文化基本構想」の策定に乗り出した。

## 第2節 構想等の策定方法

本構想を策定するにあたり、「三島町歴史文化基本構想等策定委員会」を設置し、その下部組織として「文化財調査部会」「文化財保存・活用検討委員会」を置き、これらを運営するための役場各課連携のためのプロジェクトチームを設置し、運営を行った。

### ◎委員名簿（敬称略）

#### 策定委員会

委員長	赤坂憲雄（民俗学）	福島県立博物館長
委員	嵯峨創平（エコミュージアム）	NPO環境文化のための対話研究所
	懸田弘訓（民俗学）	福島県文化財保護審議委員
	阿部眞一郎（都市計画）	株式会社ライフデザイン研究所
	林隆史（情報通信）	会津大学理工学部教授
	玉川一郎（文化財行政）	福島県教育委員会文化財課長・H20
	片平隆博（文化財行政）	福島県教育委員会文化財課長・H21～22
	塚原啓史（地域振興行政）	会津地方振興局企画商工部長
	猪俣慶藏（まちづくり行政）	会津若松建設事務所企画調査課長・H20～21
	鈴木勝徳（まちづくり行政）	会津若松建設事務所企画調査課長・H22
	飯田恭子（民俗学）	ドイツカッセル大学研究員H20
	小柴吉男（民俗学・考古学）	三島町文化財専門委員
	角田伊一（民俗学）	三島町文化財専門委員
	遠藤由美子（出版）	奥会津書房
	北館長一（教育行政）	三島町教育長・H21～22
	五十嵐政人（地域振興）	産業建設課長・H20～21、総括参事H22
	鈴木隆（地域振興、防災）	総務課長・H20～21
	渡部繁信（福祉、健康づくり）	町民課長・H20～21、総務課長H22
	目黒政寿（福祉、健康づくり）	町民課長・H22
	小堀庄太郎（農林、観光、まちづくり）	産業建設課長・H22
	矢澤源成（教育、生涯学習）	生涯学習課長・H20～21
	秦和幸（教育、生涯学習）	生涯学習課長・H22

#### 文化財調査部会（◎は策定委員兼務）

部会長◎	矢澤源成（教育、生涯学習）	生涯学習課長・H20～21
部会長◎	秦和幸（教育、生涯学習）	生涯学習課長・H22
委員◎	懸田弘訓（民俗学）	福島県文化財保護審議委員
◎	小柴吉男（民俗学・考古学）	三島町文化財専門委員・H20～22.9
◎	角田伊一（民俗学）	三島町文化財専門委員
	佐々木長生（民俗学）	福島県立博物館学芸員・H20～21
	森幸彦（考古学）	福島県立博物館学芸員
	荒木隆（文化財行政）	福島県教育委員会文化財課・H20
	紺野修（文化財行政）	福島県教育委員会文化財課・H21～22
	小柴七治（地質学）	三島町文化財専門委員

五十嵐 稔 (考古学)  
小 松 順太郎 (考古学)  
岸 本 誠 司 (民俗学)

三島町文化財専門委員  
三島町文化財専門委員  
東北芸術工科大学東北文化研究センター専任講師

#### 文化財保存・活用検討部会

部会長◎ 五十嵐 政 人 (地域振興)	産業建設課長・H 2 0～2 1、総括参事 H 2 2
委 員◎ 嵯 峨 創 平 (エコミュージアム)	N P O環境文化のための対話研究所
◎ 阿 部 眞一郎 (都市計画)	株式会社ライフデザイン研究所
◎ 林 隆 史 (情報通信)	会津大学理工学部教授
◎ 飯 田 恭 子 (民俗学)	ドイツカッセル大学研究員 H 2 0
◎ 遠 藤 由美子 (出版)	奥会津書房
久 田 浩 司 (聞き書き)	N P O共生の森ネットワーク・H 2 0
馬 場 弘 至 (地域振興)	福島県企画調整部地域振興課・H 2 0～2 1
高 野 剛 (地域振興)	福島県企画調整部地域振興課・H 2 2
國 分 健 児 (地域振興)	福島県会津地方振興局地域連携室・H 2 0～2 1
齋 藤 誠 (地域振興)	福島県会津地方振興局地域連携室・H 2 2
曳 地 利 光 (まちづくり行政)	福島県会津若松建設事務所企画調査課・H 2 0
唐 橋 薫 (まちづくり行政)	福島県会津若松建設事務所企画調査課・H21～22
児 玉 孝 雄 (まちづくり行政)	福島県宮下土木事務所業務課長
五十嵐 七 重 (語り部)	語り部サークルちゃんちゃんこ
五十嵐 乃里枝 (住民)	エコ・ミュージアムプロジェクト委員
佐久間 宗 一 (住民)	宮下地区区長・H 2 0
栗 城 辰 寿 (住民)	宮下地区区長・H 2 1、地区代表 H 2 2
佐 藤 幸 志 (住民)	西方地区区長・H 2 0
山 垣 光 英 (住民)	西方地区区長・H 2 1～2 2
目 黒 卓 男 (住民)	早戸地区区長・H 2 0
角 田 一 郎 (住民)	早戸地区区長・H 2 1、地区代表 H 2 2
佐 藤 賢 一 (住民)	三島町商工会青年部部長・H 2 0

#### 文化財総合的把握モデル事業プロジェクトチーム

リーダー 矢澤源成 (H20～21)、秦和幸 (H22)

メンバー 五十嵐政人、二瓶大樹、諏訪典子、星保弘、佐久間淳、大竹重一郎、栗城拓郎、  
菅家藤一、五十嵐純子、秦一夫 (H20)、二瓶聡子 (H21～22)、諏訪義徳 (H21～22)  
北館亮、(H20～22) 五十嵐優 (H22)、

事務局 秦和幸 (H20～21)、小柴謙、板橋淳也、北館亮 (H22)、五十嵐義展、  
轡田倉満 (H20～21)、諏訪義徳 (H20)、山内恵 (H21～22)、湯田剛 (H21～22)



### 第3節 三島町歴史文化基本構想の策定方針

本構想を策定するにあたり、構想策定における基本方針を初年度において議論し、方向性を決定したうえで構想の策定を開始した。以下がそのテーマと項目である。

#### 【テーマ】

**地域とそこに暮らす人々を主人公とした歴史・文化の保存・継承・活用をめぐる  
「三島スタイル」の構築**

#### 1. 三島町の地域資源を活かした文化戦略を創る。

まちづくりの骨格である5つの運動（ふるさと運動、生活工芸運動、地区プライド運動、有機農業運動、健康づくり運動）の成果を踏まえて、これまで掘り起こしてきた地域資源を活かして、文化を核とした一貫した取り組みができる地域戦略を創る。

#### 2. 文化財とそれを継承してきた地域社会を包括的に守り育てていくことを目指す。そのための保存・継承・活用の構想とする。

年中行事などが受け継がれてきたのは地域と人々の暮らしがあったからであり、地域社会の抱える課題を洗い出し、地域存続の包括的な対応策を探りながら、新たな文化財の保存・継承・活用の構想を創る。

#### 3. 地域とそこに暮らす住民を主人公とし、交流者を巻き込んだ歴史・文化の保存・継承・活用のための仕組みを創る。特に若者と女性のまなざしを大切にしながら、複眼的に組み立てる。

町民と交流者とが一体となって地域社会を創ることは、ふるさと運動が目指してきたものであり、今後の山村振興の大きな課題ともいえる。その課題を解決するために地域のアイデンティティとなりうる歴史・文化を保存・継承・活用し、情報発信していくための仕組みづくりを進める。特に若者や女性のまなざしを大切にしながら、複眼的な視点からの保存・継承・活用の計画を作成する。

※交流者…三島町の暮らしや文化などに興味関心を持ち、この地域の人々とともに自分の生き方や暮らし方を考える人や団体

#### 4. 地域の維持・再生を目指して、産業振興・環境保全・生涯学習につながる仕組みとする。

先人達が守り、受け継いできた文化を核としながら、地域住民が主体的に地域の維持や再生に関わる活動をし、文化を活かした産業振興・環境保全・生涯学習などにつながるための実効性のある構想とする。



## 第4節 構想の位置付け

本構想を策定していく上で、文化を活かしたまちづくりや地域振興をどのように位置付けしていくかを明らかにする。

### (1)「ふるさと運動」の継承

昭和49年に全国に先駆けて「ふるさと運動」を提唱し、観光に注目した特別町民制度や「自分たちの町は自分たちの手でつくる」「理想のふるさとづくり」といった町づくり思想の確立を目指している。この運動によりつながった方たちと理想のふるさとを追究した中から「生活工芸運動」「有機農業運動」「地区プライド運動」「健康づくり運動」が生まれた。

「地区プライド運動」とは、地区の景観や年中行事について、地区で誰もが大切にしている、あるいは誇りにしているものを地区プライドとして指定し、それを守ることで地域内のつながりや地域への誇りを取り戻そうとする運動である。この運動の継続により年中行事が目目され、小正月行事の多くは県指定重要無形民俗文化財に指定され、中でもサイノカミは国指定の重要無形民俗文化財「三島のサイノカミ」として平成20年に指定された。

また、「生活工芸運動」は、暮らしの中の生活に関わる衣類から道具類まで、自然素材を用いて作る雪国の冬のものづくり文化に着目し、生活の中にある工芸を大切に残し、伝えていく運動であり、平成15年に国の伝統的工芸品に指定を受けた奥会津編み組細工へとつながった。

本構想においてもこのようなふるさと運動の基本理念を継承し、地域の中に暮らす人達の力や思い、いわゆる地域の内発力を大事にしながら、様々な地域資源を活かして地域づくりや交流をつくっていくことを目指す構想とする。

### (2)「エコ・ミュージアム構想」の発展形

本構想の理念は、第三次三島町振興計画（平成13年度～22年度）シンボル事業「エコ・ミュージアム構想」の発展形と位置付けることができる。エコ・ミュージアム構想とは、地域にある自然や環境を「展示室」に見立て町全体を「博物館」として、豊かな自然や各地区に伝わる伝統行事、各種施設や地場産業、各種の活動をする町民など日常の暮らしを「展示品」として、町民一人一人が主役になり地域づくりに携わり、また、住民が主役であり来訪者に誇りと自身を持って紹介できるような町づくりを目指すものである。エコミュージアムの要件としては、①住民-行政-専門家の協働によるまちづくり②地域遺産の保全・研究と展示・交流を通じた活用③恒久的な「地域の学校／研究所／保全機関」づくりである。

エコ・ミュージアム構想では構想実現のためのプロジェクトを立ち上げ、地元学の手法による地域資源の再発見ワークショップや地域を案内する「奥会津案内人」講座などを実施してきた。また、住民主体の地域づくりを促しながら、県の支援などを活用し地区づくりを進めてきた。一方で財政難によりコア施設となる交流センター山びこが閉館に追い込まれたり、既存の組織や仕組みの再活性化が薄かったことが課題ともいえる。

そのことを踏まえながら、10年間の活動で培ったエコミュージアムの考え方や地区支援の在り方などを踏まえて、歴史文化基本構想においてさらに発展させていくものとする。

### (3) 本構想と他の行政計画との連携について

本構想は、10年単位の「歴史と文化を活かしたまちづくり」の理念と方策を示したものである。その実現には、平成23年度から10年間の総合計画となる「第四次三島町振興計画」をはじめとして行政各分野の事業計画との連動が欠かせない。また、構想実現のために計画の進捗状況の評価、環境変化に対応した計画修正に関して、住民の参加を保障するために、適切な期間毎に「評価と見直し」を行う仕組みを定める必要がある。

第四次振興計画における基本構想では町のシンボルである「会津桐」をテーマに、町全体に桐の花咲く理想郷を「桐源郷」と名付け、その名にふさわしい地域づくりを目指していくこととしている。その構想を実現するために①町民参加と推進体制整備、②若者定住対策、③美しい地区づくり、④安全安心の基盤づくりの4つの柱を基に基本計画を立てて実行に移していく。歴史文化基本構想は、③美しい地区づくりの中の地域資源を活用した地区の魅力づくりと地区の活動支援を支える構想として位置づけられている。

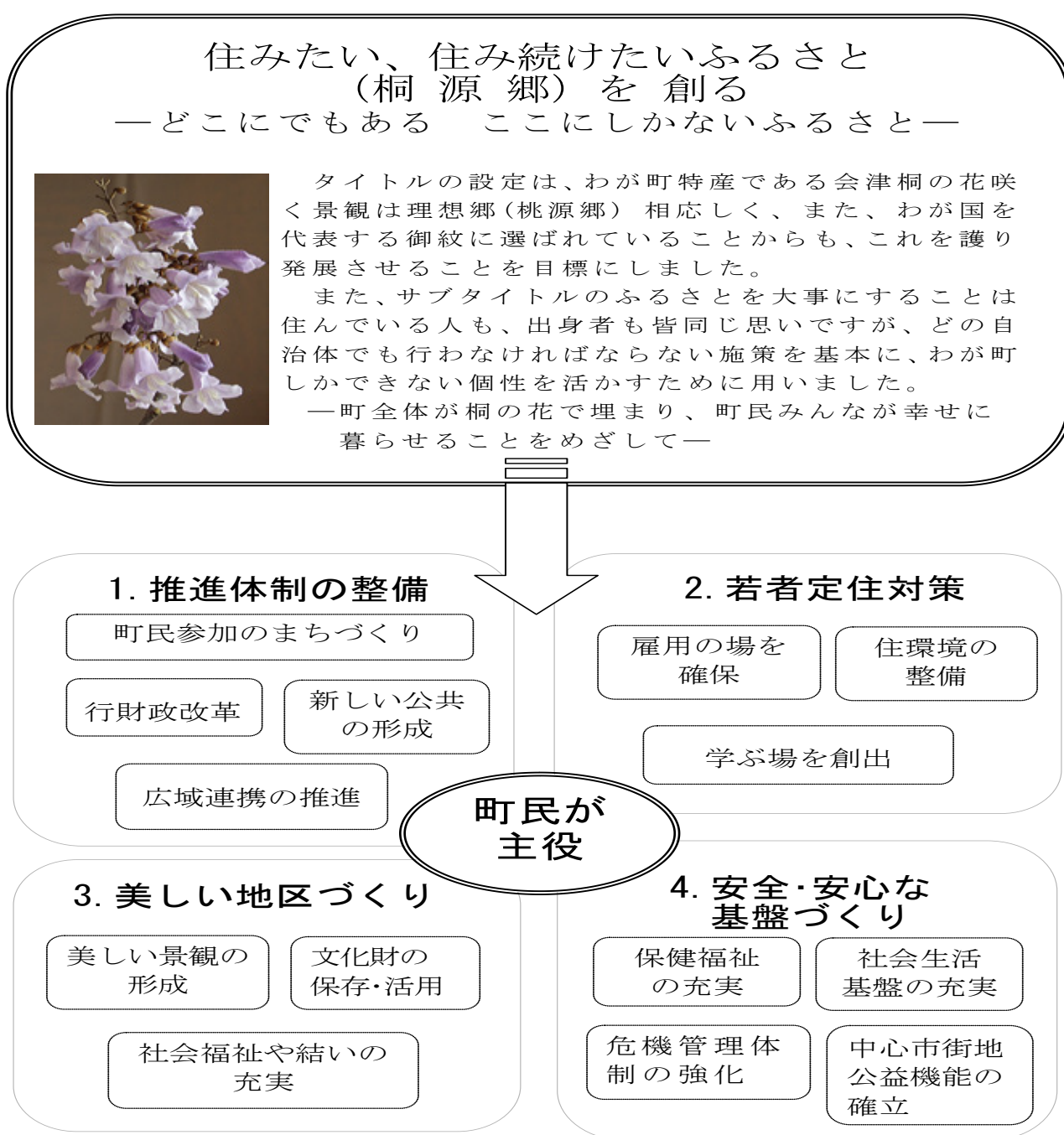


図1 第四次三島町振興計画基本構想概念図(案)

## 第2章 文化戦略

### 第1節 歴史と文化を活かした「物語」のある地域づくり

三島町で歴史・文化を保存・継承・活用するためには、地域そのものの存続が必要であり、中山間地域の少子高齢化と過疎化が進むこの地域に人々が住み続けていくことが前提となる。その厳しい前提条件の中で歴史・文化を活かした地域づくりを進めていくためには、現状を認識し、成果と課題を踏まえていくことが重要である。それは、ふるさと運動、エコミュージアム構想と30年間地域づくりを継続してきたが、人口減少に歯止めがかからないからである。

これまでの大きな課題の一つとしては、施策そのものの地域住民への浸透と行政内での共有化が薄かったことがある。施策を進めていく上で地域住民、行政双方からのイメージの共有と浸透を図っていくことが重要課題であると言える。

そこで、本構想では三島町の歴史と文化を色濃く反映し、地域のアイデンティティを明らかにする「物語」を掘り起し、地域づくりの柱・基礎としながら活性化を図ることを戦略的に取り組んでいく。ここで言う「物語」とは、「昔話や民話、伝説などの分類にとらわれずに、三島の中で語り継いできた歴史や地域に暮らしてきた人々の思いや記憶から紡ぎだされる語り」であるとする。昔話や民話、伝説あるいは歴史や考古、民俗などの分類によらずに地域にまつわる様々な物語を丁寧に掘り起し、地域住民、行政が共有していくことで、地域づくりに関して双方一定の方向性を見出すことが可能となると考える。



図2 三島町歴史文化基本構想の位置づけについて



この「物語」が掘り起こされることによって得られる効果は①場所やもののいわれなどの記憶を呼び覚ます、②そこに住む誇りや意味合いをもたらす、③地域文化の価値観に根ざすものを揺さぶる、④そこで何かをしよう、大切にしようという気持ちにさせる、⑤好奇心や感動を伝える、共有する素材となる、の5つであるといえる。

地域住民の暮らしと結びつき、地域住民の胸に落ちる物語を生み出すことができれば、持続性のある活動を進めていくことができ、新たな取り組みへと結びつくことが期待できる。

つまり、地域に対する思いを再認識していくことができるといえる。

## 第2節 物語のイメージ

本構想の主人公である地域で暮らす人々が、日々の暮らしの中で大切にしている歴史や文化に焦点をあてていくことが重要である。三島町では伝えるべき人たちが新しい価値を見いだせずには伝わりことなく消えてしまった知恵や技、年中行事、それに対する思いが多く存在している。それらを伝えていくためには、その過程は様々ではあるが、丁寧に聞き取りし、そこから物語を生み出していくことが必要である。そして物語が蓄積する、また新しい物語を見つけるという良い循環が生まれることにより、人々の暮らしの中に歴史や文化が残されるきっかけが生まれていくことだろう。

物語の性質としては、町全体の物語と地区の物語、そして、小さな物語がある。それぞれについて詳しく説明してみる。

### (1) 小さな物語

小さな物語は地域に暮らす人々が、個人的に、あるいは家族や小さい単位の地域などで大切にしている物語である。例えば、早戸地区の石祠が並ぶ神々の道を構成している一つ一つの神様を守っている人や家族のそれぞれの物語であったり、西方地区の宿場町の名残にまつわる商家、宿家などの各家々の物語であったりと、一つ一つの物事すべてに対して物語があるといえる。

### (2) 地区の物語

地区の物語は、地区ごとの特徴やイメージを与えるものであり、地域住民が地域の宝であることを広く共通認識している物語である。大石田、西方、名入地区の虫送りであったり、滝谷地区の三十三観音であったり、桑原地区の愛宕様の行事であったりと、地区プライド運動に指定されたものから生まれてきた物語や、指定されていなくても地域住民の誰もが大切に守ってきた物語がこれらにあたる。また、早戸地区の神々の道などは多くの小さな物語が集合して地区全体を包む物語になっている。

### (3) 町全体の物語

町全体の物語は、三島町の特徴を表したりイメージづけしたりするものであり、町全体を包み込むような物語であると考えられる。あるいは、地区の物語や小さな物語をつないだり、結びつけたりするような物語が考えられる。この町全体の物語は小さな物語と関連していくこととなり、一方で地域の歴史や文化に裏打ちされたものではないなければならない。また、三島町では暮らしの中で文化財を保存していくことを目指していくので、その物語は地域住民に暮らしそのものの新しい価値を見出すきっかけとなることが望まれる。

例えば、国指定重要無形民俗文化財の「三島のサイノカミ」は、16集落中11集落が実施し、町のシン

ボリ的な年中行事であり、そのサイノカミを始めとした年中行事や信仰が今でも色濃く残る三島町は、まさに日本人が忘れかけている心の世界を今も垣間見ることができる。また、県指定文化財の荒屋敷遺跡出土品からは、地域住民の暮らしの中で受け継がれてきたものづくりの文化や、会津の漆文化の原点ともいえる貴重な製品が出土している。これまでは縄文からのものづくりと現代の工芸品とのつながりが薄かった。さらに、前述の早戸地区の神々の道や西方地区の塩街道の宿場町など、地区の物語や小さな物語をつなぎ合わせて町全体の物語としていくこともできると考える。

これらの物語は、奥会津地域など地域特性が似ている近隣町村との新たなつながりをもたらし、市町村を超えた広域的な関連を可能とする。つまり、さらに広域な物語づくりを進めていくことができる。

物語の具体的な内容については第7章において述べる。

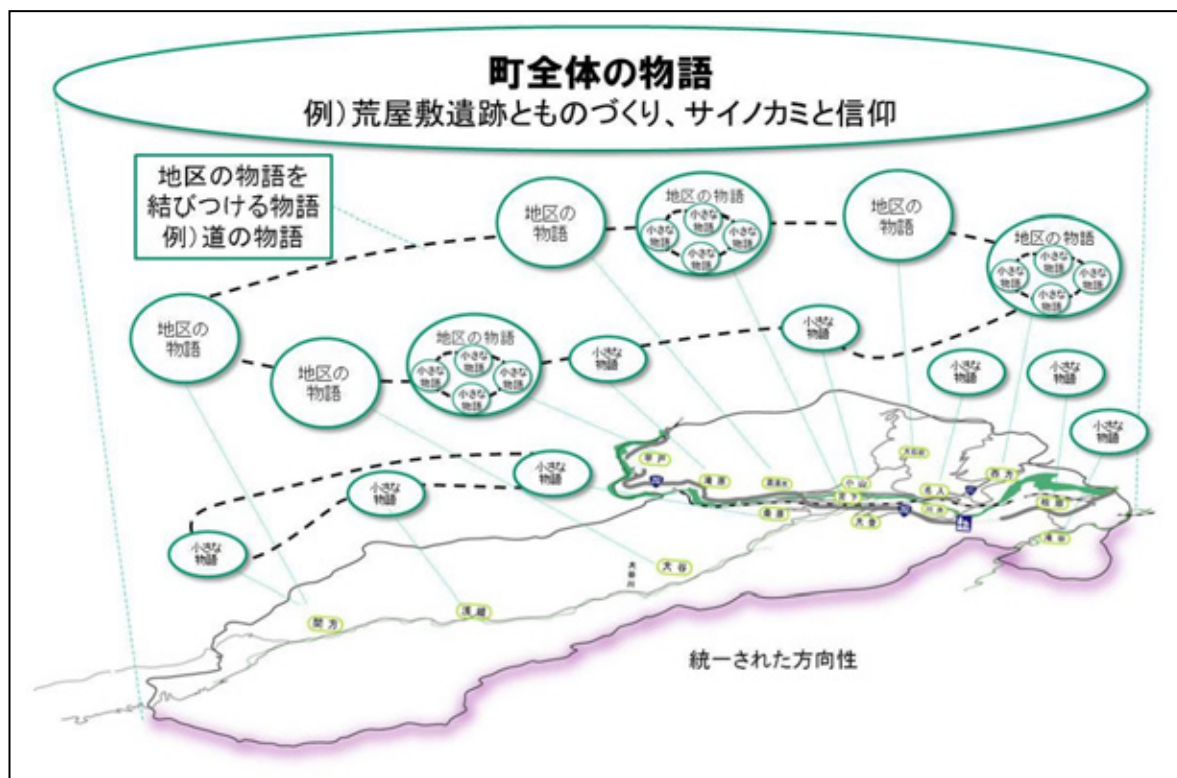


図3 町に広がる物語イメージ

### 第3節 物語を活用した地域づくり

歴史・文化を活かした物語が掘り起こされることにより様々な効果がもたらされることが考えられる。特に三島町での地域住民が自ら地域の活性化を目指した活動を起こしたり、暮らしの中にある文化を中心とした交流を展開する文化観光であったり、新しく文化財として指定して保護していく運動であったりと様々な効果が期待される。そして、それにより当初の目標である三島町の歴史や文化を伝えていながら、地域の活性化、地域の存続を図っていくことができると考える。

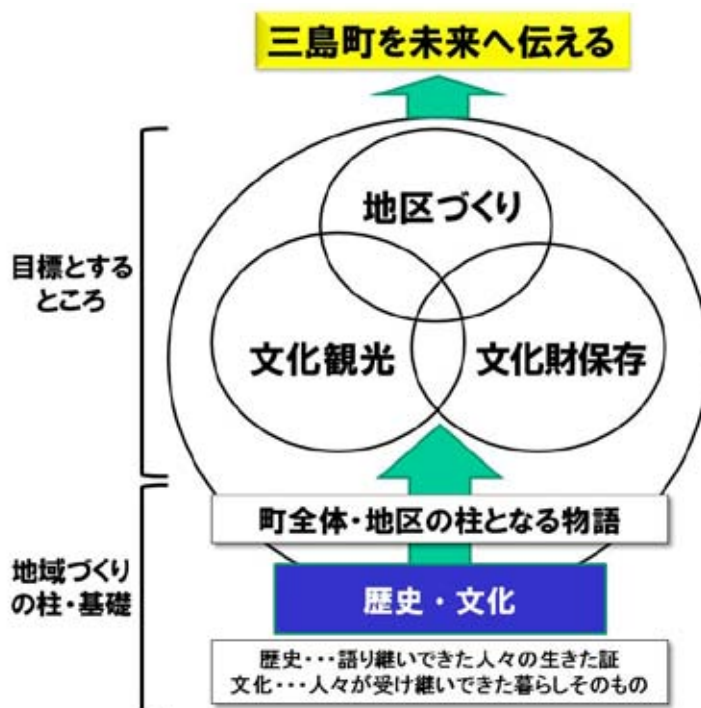


図4 歴史・文化を活かした物語のある地域づくり概念図

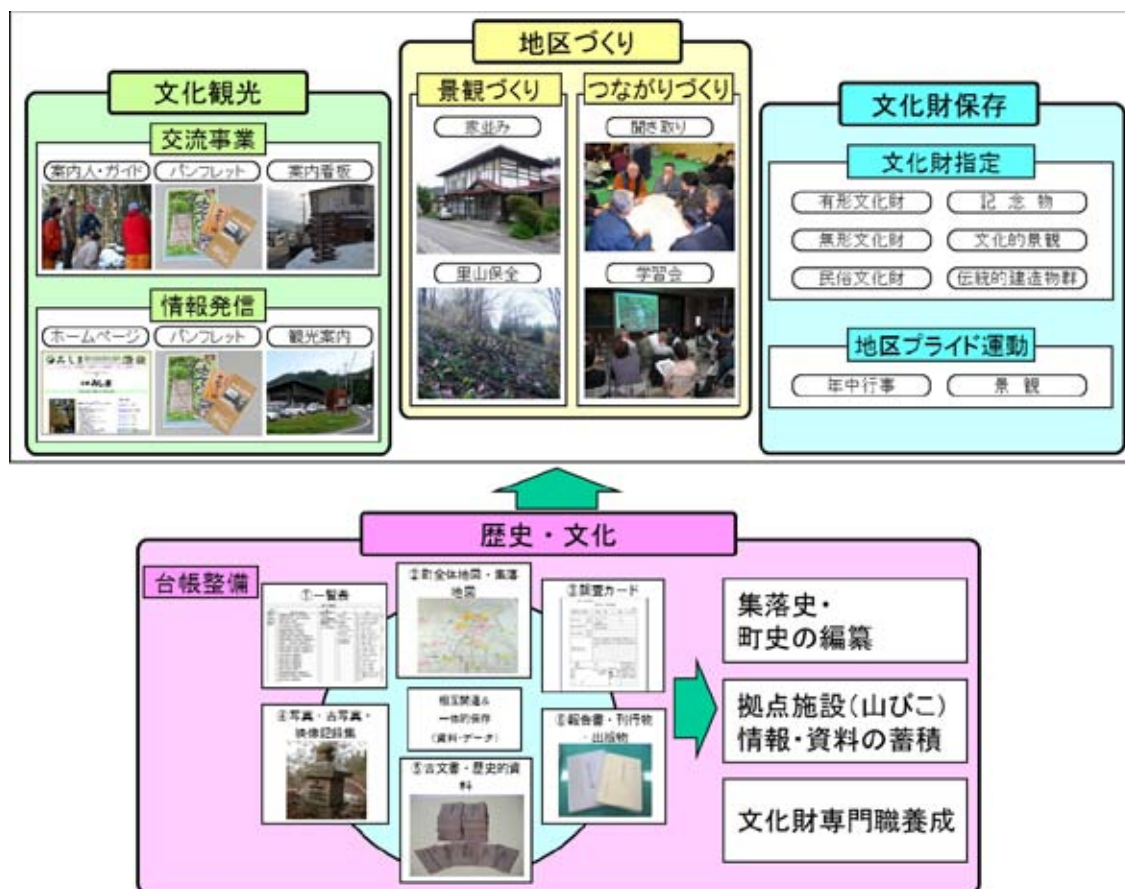


図5 具体的な事業の位置づけイメージ

## 第3章 三島町の文化財

### 第1節 三島町が伝えてきた文化財・守るべき文化財

物語の構成要素となり、地域の誇りや、交流などの活用を図っていく上での下支えとなるものが文化財である。

三島町における文化財は、町内の11の地区で今でも伝統的な方法を受け継いでいる国指定重要無形民俗文化財「三島のサイノカミ」を始め、初春の行事を中心に33の年中行事が指定されている県指定重要無形民俗文化財「三島の年中行事」など、特に民俗行事を中心に指定されその価値を高めながら保護を図ってきた。(下表参照) これらの文化財は地区住民が暮らしの中で伝えてきた文化であるといえる。

また、文化財指定とは別に昭和56年より「地区プライド運動」として年中行事と景観の保護を通じた地域のつながりづくりを行ってきた。

昭和50年から60年にかけて指定した文化財及び地区プライド運動は、30年経過した今でも伝わるものもあれば、中断してしまったものも存在する。伝統行事を含め地域を守る人々の高齢化が進み、担い手不足により今後も継承されていくことが困難な状況となってきた。

表1 三島町の文化財数 (H22.4.1 現在)

指定登録	有形文化財		美術工芸品	無形文化財	民俗文化財		記念物		文化的景観	伝統的建造物群	合計	
	建造物				有形	無形	史跡	名勝				天然記念物
	件数	棟数										
市町村	1	1	8					3			12	
都道府県			1		1						2	
国					1						1	

### 第2節 文化財を保存・継承・活用する意義

少子高齢化が進み、地域そのものの存続があやぶまれている中で、文化財を含め地域の歴史や文化を保存・継承・活用していく意義を見出すことが求められる。特に三島町では、年中行事のようにライフスタイルの変化によって省略・簡略化され、意味合いを失ってきたものが中心である。さらに、伝統的な農の暮らしやものづくりの文化でさえも暮らしの中では継承されなくなっており、そういったものも含まれる。

しかし、伝統的な暮らしを実践してきた人々がいる今こそ、地域に暮らしている人、暮らしてきた人達を主人公として、歴史や文化、風土を、もう一度丁寧に掘り起こし、育て、次の世代のために保存・継承していくことが必要である。それにより年中行事や社寺仏閣など地域の人々の関係性の中で成り立つ文化財や、農業や食文化などの暮らしの中にある様々な文化の価値を住民一人ひとりが再認識するきっかけが生まれ、何かしらの意味合いを持つようになるのであろう。そこに新たな物語が生まれてくるのである。

三島町の文化財の保存、活用は、博物館の陳列棚に並べ展示するという方法ではなく、生きた形で活用しながら、あるいはその集落に暮らす人々と共に守り育てていく、次世代へと受け継いでいくということで意義を持つものといえよう。三島町の文化財は暮らしの中で保存し、暮らしそのものを活用していく、まさに「三島スタイル」の実現である。

農業やものづくり、信仰を慎ましく続けていく暮らしは決して派手な暮らしではないので、現代のライフスタイルに逆行する非常に不便な暮らしともいえる。しかしながら、それらの行動こそがまさに日本人の心の世界を暮らしの中で表現するものであるといえる。そこに人々を引き付ける魅力と心の奥に感じる本当の心の豊かさがあると言える。例えば日本全国で行われていることでも、三島町の人々の暮らしを伝えていくことは三島町の人々にしかできないのであり、伝え続けていくことにも大きな意味がある。やはりそこにも



人々を引き付ける物語があるのである。

これまで文化財はすべて単体での保存と活用だったと言える。地域の年中行事や社寺仏閣、景観など、総合的に関連するものとして保存していくような新しい仕組みづくりが必要といえる。それらについて活用区域を設定することにより、単なる文化財ではなく、もっと観光や地場産業などにつなげながら活用し、保存していくことが必要である。そこから地域住民に新しい気づきや地域への思いが生まれ、さらなる文化財の活用への広まりが期待される。

### 第3節 文化財に関する調査状況

三島町の文化財に関する調査状況を「表2」で示している。これまで、三島町教育委員会、福島県教育委員会が実施し、調査報告書として公刊されているものが示されている。特徴としては、民俗に関する資料が整っており、調査カードなども整備されており、長年の蓄積されたものを再度評価することができる。また、埋蔵文化財に関する発掘調査報告書も多く刊行されており、荒屋敷遺跡をはじめとする出土品からは先人の暮らしを垣間見ることができる。

一方で、家屋や建造物など未調査の文化財や、清水や植生などの調査中でいまだ報告書などが発刊されていない文化財もある。また、町史編纂事業は平成16年度を最後に財政難のため閉鎖し、昭和43年に発刊されて以降の近現代史をはじめ編纂途中となっている。

### 第4節 今後の文化財調査に関する基本方針

#### (1) 住民参加型の調査による記憶の収集

文化財が受け継がれてきた形態は、正月やお盆、季節の節目の風習や行事において、各家々や地域の中、あるいは地域の年齢階層や男女別の集団、“講”のような特定の集団により受け継がれてきたものなど様々である。中でも民俗文化財は、過疎・高齢化さらには生活様式の変化などにより衰退あるいは省略化され、さらには消滅の危機にあり、その一部はすでに完全に人々の記憶から忘れ去られようとしている状況にある。

それらの地域や家庭で行われている年中行事を中心とした民俗文化財、及び現在の人々の記憶にあるものを記録し保存することは、この地で生きてきた人々の“生き様”の保存でもあるといえる。大切なことは、今、受け継がれてきた文化財を、調査・記録し保存するとともに、高齢者から熟年層へ、熟年層から若年層、さらには子供たちへと、家庭の中では親から子へ、子から孫へと次の世代に受け継ぐシステムを地域や家庭の中で導き出すことが必要で、社会の変化、年齢集団の変化があったとしても、地域で家庭であるいは地域内集団がきちんと受け継ぎ、次世代に引き継ぐことが可能となるといえる。

そのためには、行政と地域住民が一体となって、その役割分担を明確にし、記録・保存・継承のための活動を計画的に展開することが重要な鍵となる。行政は、住民の協力を得ながら、基礎調査・悉皆調査を実施し、調査結果が文化財報告書の形で公表されたもの以外の文化財の調査を計画的に実施するとともに、一部調査を終えたものや現在も継続的に実施している調査を報告書という形で公表するという作業を進めることが重要であり、住民の方々への文化財に対する認識を深めるための趣旨普及活動にもつながる。

報告書は、コストを考えると必ずしも体裁の整った立派な印刷本でなくとも、パソコン編集の手作り本で、こまめに調査の成果を発信できるような工夫も必要であり、その上で、将来的には学術的なあるいは専門的な解説も盛り込んだ文化財報告書の作成・発刊を目指すことが必要である。このことは、調査の成果を住民に公表し、次の調査に向けての関心を高める作用にも効果があるものと期待されることから、速報版のよう



No.	報告書名	発刊年
文化財調査報告書(三島町教育委員会調査)		
1	川井佐渡畑遺跡調査報告書	1971
2	三島町の仏像	1973
3	銭森遺跡Ⅰ 荒屋敷遺跡Ⅰ	1975
4	みしまの野仏	1979
5	みしまの石祠と供養塔	1982
6	中際遺跡	1984
7	みしまの金工品	1986
8	銭森遺跡Ⅱ	1986
9	西方下館遺跡Ⅰ	1986
10	荒屋敷遺跡Ⅱ	1990
11	キマダラルリツバメ	1991
12	元屋敷遺跡	1992
13	上ノ山遺跡	1998
14	(欠番)	
15	稻荷原遺跡Ⅰ	2001
16	荒屋敷遺跡Ⅲ	2001
17	大石田居平遺跡	2003
18	銭森遺跡Ⅲ	2004
19	西方下館遺跡Ⅱ	2005
20	西方下館遺跡Ⅲ	2007
21	岩谷城跡	2009

文化財調査報告書外		
1	三島町史	1968
2	会津御蔵入 大石田の民俗	1995
3	三島のサイの神	2003

文化財調査報告書(福島県教育委員会調査)		
1	福島県の民謡	1965
2	福島県の祭礼	1979
3	福島県の伝統工芸技術	1980
4	福島県の年中行事	1984
5	福島県の民俗芸能	1983
6	福島県の昔話と伝説	1986
7	歴史の道調査報告書 沼田街道	1988
8	福島県の民俗芸能	1991
9	福島県の祭り・行事調査報告書	2005
10	福島県の民俗技術	2007

調査継続中(三島町教育委員会)	
1	三島町史(新刊)
2	社寺・仏閣
3	清水
4	植生
5	古道
6	民具

表2 調査状況

な形で、住民に先ず公表し、その価値を知ってもらうということを、繰り返し繰り返し続ける事で文化財に対する関心も高まり、新たな調査の着手も容易になる。

さらには、保存・継承のプロセスにおいて、「生きがい」や「交流」「(話せる)楽しみ」といった部分の活性化にも結びつくことが可能になるといえる。

## (2) 学術的な調査による新たな価値付け

今、急激な生活様式の変化や科学の進歩により、祖先から受け継がれてきた様々な文化の恩恵に浸っているにも関わらず“受け継がれてきた”ということも忘れられ、その価値や意味も消滅してしまう危機にある。祖先から受け継がれてきた「文化＝文化財」は、農業や林業、人の一生や日常の生活での心の拠り所として、それぞれに大きな意味・価値があり、大切に今の時代まで受け継がれてきたものである。

今日まで伝えられてきた文化財の計画的な基礎調査・悉皆調査を進め、住民への報告作業を進めると同時に、一方では、文化財の持つ歴史的な背景や意味、複合的な視点での専門家、研究者による学術的な調査も進める必要がある。ただ単に、文化財に関する解説を求めるのではなく、三島町に残されてきた文化財、とりわけ民俗文化財は、時代の変化とともにその価値観や必要性の意義が薄くなってきており、文化財の価値を見直し、保存・継承の必要性に結びつくものとするのが大切で、同時に、町の外に向けての積極的な情報発信も必要である。

また、荒屋敷遺跡から出土した木製遺物・編組遺物・漆塗遺物等は、日本における縄文時代終末期から弥生時代初期における大変貴重で重要な資料であり、遺物の学術的な再調査と遺跡の総合的な検証も含めて、当時の生活環境や木工・編み組・漆塗り等の技術を明らかにすることも、三島町が取り組んでいる生活工芸運動のさらなる展開に大きな意味を持つものと期待できる。

## 第5節 調査資料の保存方法

三島町の行政機関には現在調査研究を行っていく機関がない。予算削減により町史編纂事業から撤退し、それまで蓄積し、整理されてきた調査研究資料やデータ類を専門的に保存していく体制が整わず、資料の散逸が多かった。そのため、調査・研究資料については相互関連性を持たせながら一体的に保存していくことが必要と言える。

また、この調査資料は基礎調査・悉皆調査の土台であり、今後住民とともに記憶を収集していく際の基礎でもある。

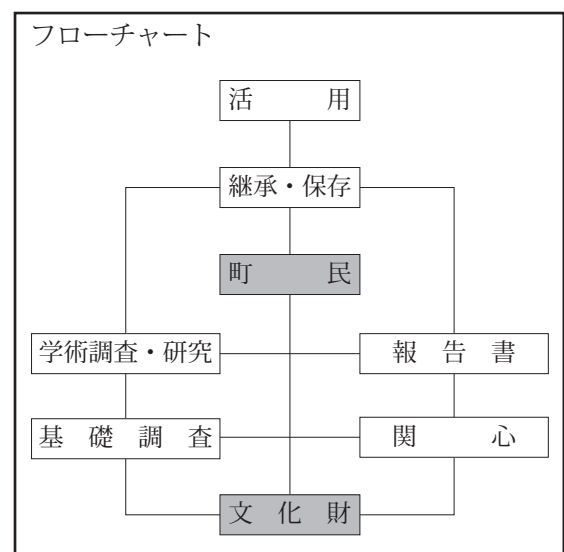


図6 文化財への住民参加フロー図

「相互関連して一体的に保存していく資料関係」

- ① 一覧表
- ② 町全体地図・集落地区
- ③ 調査カード
- ④ 写真・映像記録
- ⑤ 報告物、刊行物、出版物



図7 地区情報の整理方法



## 第4章 関連文化財群と文化財保存活用区域の設定

### 第1節 関連文化財群としての保存・継承・活用

#### (1) 物語からなる関連文化財群の設定

関連文化財群とは有形・無形、指定・未指定を問わず、地域に存在する様々な文化財を歴史的、地域的な関連性等に基づいて、一定のまとまりとして設定するものである。これは本構想を策定する上で文化庁が基本項目として設定することが望ましいとしている。

三島町においては前述のとおり、無形民俗文化財が保存・活用の中心となっていた。無形民俗文化財以外の文化財指定に関しては平成17年の荒屋敷遺跡以外は昭和56年以降全くなされていないことにも表れている。一方で地区プライド運動として第一次を自然・景観部門として昭和60年に、第二次を年中行事部門として平成2年に町独自の指定を行ったが、それ以降は続くことが無かった。

そこから見えてくる課題としても、指定の有無に関わらず、三島町の多様な歴史・文化に対しての意識付け、文化財としての価値の発信が薄い状態にある。特に高齢化が著しい三島町においても受け継がれてきた暮らしの中の文化は、今のうちに洗いざらい把握しておかなければならないと言える。それは指定・未指定に捉われない関連文化財群の考え方が必要であると言える。

そこで、三島町では文化戦略にある人々の暮らしの中に受け継がれてきた「物語」を中心に関連文化財群を捉えていく。第2章で述べたように三島町の物語には①小さな物語、②地区をつなぐ物語、③町全体を包み込む大きな物語の3つの大きさの物語がある。これらの物語の特徴に応じて関連文化財群が変わってくるため個別に検証してきた。

しかしながら、関連文化財群を設定して保護、活用をかけていくための仕組みや制度が整っていないため、現段階ではすぐさま設定せずに段階を踏んでから進めていくこととする。

また、関連文化財群としてはこれらの物語そのものが地域の記憶として関連文化財群のひとつとなり、保存・活用されていくことを目指していく。

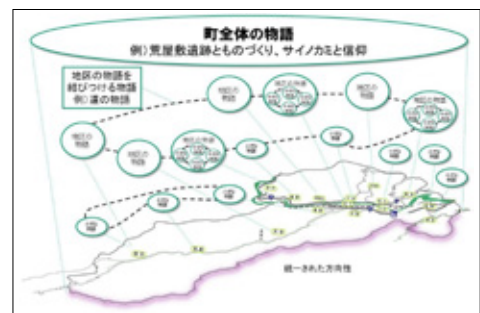


図3 再掲 物語のあるまちづくり

#### (2) 小さな物語からなる関連文化財群

人々の暮らしの記憶などから導かれる物語や、文献、調査資料から読み取れる歴史的な物語など、小さな物語は多種多様であるが、物語単体では関連文化財群を形成することはできない。その物語に出てくる山や川、道、峠、居住地などの場所やモノ、コトにまつわる物語が、その物語の主人公である住民あるいはその物語の語り手によって繋ぎ合わされ関連文化財群となるのである。これまで単体の文化財としてのみ見えてきたものが、その物語が語られることによって、新たな関連文化財群が繋ぎ合わさるとも言える。それにより、これまで単体で保存されてきた文化財が、その周辺環境と一体となって保存されるのである。

#### 《小さな物語からなる関連文化財群の具体例》

##### ①昭和の食糧難を乗り切ったヒンムキ（日向山）での暮らし（会津学研究会『会津学6号』より）

平成22年の春、講座三島を学ぶでは「ヒンムキの暮らし」を行った。

戦中戦後の食糧難の時代に山を切り開き、出づくり小屋を建て、難を凌ぎ村を守った功績を称えて建て





図8 ヒンムキの暮らし

へ向かう昔の峠道やいたるところで湧き出る清水、いわれのある地名など多種多様な小さな物語が語られるのであった。

【関連文化財群】 小松為吉建立の山ノ神、小松為吉翁板碑、当時の出づくり小屋の跡地  
西方地区から出づくり小屋までのルート（すべて文化財未指定）

### （3）地区の物語からなる関連文化財群

三島町に16ある地区それぞれに人々の暮らしは違ってくる。地形や風土の違いによって暮らしの仕組みや生業が異なり、歴史的な背景の違いにより残されてきた文化も異なる。特徴の違う地区には全く違った物語があり、特に人々の大切にしているもの、心の拠り所になっているものが地区の代表的な物語として求心力を持つようになる。そのため、地区の物語は、長年大切に守り育てられてきた年中行事や地区の人々の話し合いによって、大切に守らなければならないと認め合うことのできたものから生まれてくるものと言える。

しかし、地区の物語だけで関連文化財群となるわけではない。地区の物語が生まれたり、新たに掘り起しされたりして地区の人々が改めて保存・活用していくと決め、その地区づくりのテーマに応じて場所やモノ、コトが繋がったときに初めて関連文化財群となる。そのつながり方は多様であり、保存が目的か活用が目的かなどの目的の違いもあるが、一様にそれらが関連付けされることで地区そのものの魅力が高まり、そこに内包されている文化財が一体となって保存されていく可能性を秘めていると言える。

### 《地区の物語からなる関連文化財群の例》

#### ①宮下地区 宮下ダム開発と大火の記憶

昭和16年、只見線（旧会津線）が会津宮下まで開通。それと同時に着工し、昭和21年に完成した宮下発電所。国策により進められた只見川電源開発の皮切りとして建設され、宮下は奥会津の物流の拠点として栄えた。一方で昭和17年、宮下は大火に見舞われ114軒の家々を消失したが、早々と復興を遂げるのであった。

町の中心である宮下は、目まぐるしい変化を遂げたこの数年の中にこそ、そのアイデンティティが眠っていると言っても良



写真1 宮下ダム開発の様子



写真2 大火からの復興の様子

い。現在の宮下からは想像のできない人ごみと物資の移動、短い期間で作り上げられた町並み、そしてひっそりと残されている昔からの人々の営み。それらの掘り起しが今、地区の人々の手によって行われようとしている。

#### 【関連文化財群】

宮下ダム、J R 只見線（駅舎、鉄橋、機関庫、転車台等）、宮下式軸組工法の住宅群、大火の頃の古写真、復興委員会資料

#### （４）町全体を包み込む大きな物語からなる関連文化財群

小さな物語や地区の物語は地域住民の中からボトムアップの形で上がってくる物語であるが、町全体を包み込む大きな物語は重要性が高いと判断し、それにまつわる物語を組み上げて町全体のイメージを作り上げるための物語である。そのため、サイノカミや荒屋敷遺跡のように三島町を代表する文化財が盛り込まれ、それらを中心に物語が構成されるのである。そのため、物語そのものに関連文化財群が含まれているのである。

#### 《地区の物語からなる関連文化財群の例》

- ①縄文の編み組荒屋敷遺跡
- ②サイノカミなどの彩り豊かな年中行事のある暮らし

※大きな物語の具体例の詳細については第7章にて記載

## 第2節 保存活用区域の設定

保存活用区域とは関連文化財群や個々の文化財を核とし、それらと一体となって価値をなす周辺の環境を含めて、文化的な空間を創出するための計画区域のことを言う。

三島町は16ある地区ごとに計画区域を設定する。その上で地区のテーマや文化財群に基づいた物語ごとに詳細な区域を設定していくこととした。

分類すると3種類ある物語からなる関連文化財群が掘り起こされるため、それらの保存・活用を図っていくためにはそれぞれに活用区域の設定をする必要性が出てくる。

現状としては関連文化財群同様すぐに区域として設定する段階ではない。そしてその区域に基づいて具体的な保存を指定、未指定に関わらず実現していくためには十分な地域住民との協議が必要である。





## 第5章 三島町全体の概況

ここで、三島町の歴史的、文化的、自然的な背景について、その概況を押さえておく。この概況を基に大きな物語づくりの足掛かりをつけていく。

### 第1節 三島町の歴史概要

ふるさと三島町が、どのような変遷を経て現在に至ったのか、この事業を推進する上で町の歴史概要を把握することは重要である。

縄文・弥生時代については荒屋敷遺跡の項に詳述したので、以下では古代から現代までの変遷について、アウトラインのみを述べた。補足資料として三島町の歴史略年表を添えたので参照されたい。

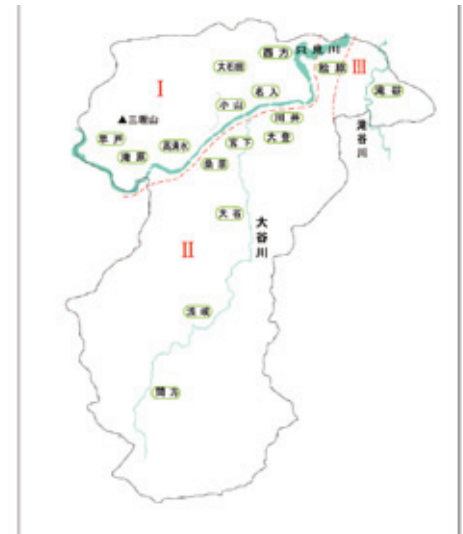


図9 三島町の集落の配置

#### (1) 金山谷は会津古代史の入口

会津の古代史は現在もなお詳細については不明な点も多いが、三島町を含む金山谷が会津の古代史と何らかの関わりを持ったことは否定できない。4世紀後半に構築されたと思われる若松市の大塚山古墳から出土した三角縁神獣鏡は、卑弥呼ともいわれる畿内王権からの拝領品であることは間違いなく、大塚山の被葬者が大和政権と何らかの形で結ばれていたことを示している。「日本書記」「古事記」の伝えるところによると、東国の某所(会津)に強力な王権が存在し、そこを平定するため大和政権は2柱の四道將軍を派遣し、北陸道から進軍した大彦命と内陸道を侵攻した建沼河別命の合流した場所を「相津」と称し、その国を平定して畿内に覆奏したことが述べてある。詳細は拙著「奥会津・只見川を歩く」に述べてあるが、大彦命の進軍路は金山谷の三条御神楽岳から三坂山・湯ノ岳・博士山・明神ケ岳を繋ぐ、越後と会津を結ぶ古代の要路に比定される。このコースは伊佐須美明神の遷宮路と伝えられ、また沿線には四道將軍や千石太郎にまつわる神話伝説が多く残されていて、会津古代史の解明に貢献可能な地域と思われる。

#### (2) 恵日寺と三島町

古代会津は、大塚山の被葬者と考えられる古代安倍氏によって統治されたが、その支配の及ばない地域は多様な豪族や長者が跋扈し、莊園を営むなど独立した国家社会が多数存在したと考えられている。しかし8世紀頃の会津には、畿内からの遊行僧徳一大師が磐梯山麓に恵日寺を建立し、ここを拠点として会津に仏教文化を広め、また多数の僧兵を配備してこれらの土豪や莊園を組み入れ、ほぼ会津全域を支配下に置いたとされる。大同2年(802)徳一大師は会津に30ヶ寺にあまる寺院を建立し、寺僧300人、子院3800坊、僧兵数千人を擁したとも伝えられ、三島町には入間方邑に横雲山高野寺、大石田邑に三坂山大高寺を建立した。同じ頃越後国には城氏が武力集団を結成し、肥沃な会津を侵攻しようと磐梯恵日寺と対峙した。三島町に建立した2ヶ寺は、城氏と防戦するための柵戸ではなかったかとの見方もある。この2ヶ寺はいずれも戦火で焼亡したが、再興の記録も、この地に仏教文化が伝播した伝承も残されていない。なお入間方高野寺の本尊仏大日如来像が、戦火を免れ逆瀬川邑興隆寺に飛び移ったという伝説はあるが、現存する像体は貞観仏とはほど遠い造作である。三坂山大高寺建立場所の特定は困難であるが、大石田邑にはこの寺の三十六坊

の地名が全て伝承されており、名入邑や麻生邑・黒沢邑にまで及んでいることからやはり城氏への防柵であった可能性は高い。なお「会津正統記」によると大高寺は天文 21 年 (1552) 西方嶋ヶ城主山ノ内信重によって滅ぼされたとされる。

### (3) 会津四家と山ノ内氏

磐梯恵日寺の崩壊と時を同じくして、国の内外では公家や貴族の栄華の蔭で、困窮・疲弊した人民による暴動や一揆が増大し、律令制度の上に成り立っていた公家政治が終焉を迎え、代わって武士団の台頭をうながし、武家による中世封建社会へと移行する。

武士団の中でも関東を一円とした桓武平氏と、摂津・河内を根拠地とした清和源氏、それに奥州の藤原一族も強力な勢力を保持し、これら三つ巴による政権争奪の戦乱は全国に及んだ。12 世紀の半ばに起こった保元・平治の乱後は平氏の勢力が勝ったが、貴族化した政治で孤立し、寿永 4 年 (1185)3 月に滅亡し、源頼朝による全国平定が進められた。

文治 5 年 (1189)、奥州藤原氏は源氏によって討伐された。頼朝はこの戦役で軍功のあった諸将士に恩賞として所領を与えた。「会津四家合全」によると「文治五年巳酉八月、奥州征伐ノ後頼朝公ヨリ会津六郡ヲ佐原十郎義連、河原田近江守盛光、長沼五郎入道宗政、山ノ内季基、四人ニ賜ル」とある。この 4 氏は会津の四家と呼ばれ、佐原改め蘆名氏は会津の盆地と猪苗代周辺、山ノ内氏は伊北郷と金山谷郷、河原田氏は伊南郷、長沼氏は田島地方を所領とし、はじめそれぞれ遙任の形で支配したが、少なくとも至徳年間 (1384-1386) までには会津に本拠を移し、領国の経営に当たったものと考えられる。

山ノ内氏は横田山入の里に本拠地を堅め、一族を野尻・川口・沼沢・西方・桧原・滝谷に配置して支配させた。世に山ノ内七騎党と呼ばれる軍事体制を作り上げた。山ノ内氏は鉱山の開発に意を注ぎ、更に森林資源の活用を図るなどして領国経営に当たったが、中世封建体制の崩壊と共に領地を失い、滝谷山ノ内氏以外は会津を離散した。

### (4) 三島の山ノ内氏

三島町に居を構えた三家の山ノ内氏の去就はおおよそ次のようである。「会津四家合全」「四家合考」「旧事雑記」其の他の記録を照合すると、横田山ノ内領の東限は宮下・大谷周辺で、大谷川の右岸に当たる大登・川井は会津蘆名領に属しており、大谷川を境とする軍事境界線があり、戦乱時には互いに前線基地となるため、村には屈強の防塁館や山城が構築されていた。宮下館・上ノ山城、大谷島ノ海城があり、大登には西ノ海城、川井には中平山館のほか桧原丸山城の防塁館が築かれていた。

蘆名領の西端に位置する滝谷邑には、明德元年 (1390) 蘆名氏の重臣松本源兵衛が岩谷城を築き、臣下の井上河内を城代に住ませ、また桧原邑には蘆名盛氏が屈強な丸山城を築き、重臣の内山淡路守を城代に任じ、共に伊北郷の領主山ノ内氏の動静を探らせたことが「山ノ内事跡考」に記されている。

弘治元年 (1555)8 月、会津大地震発生。滝谷邑の大半が岩崩れのため壊滅し、人心が動乱し岩谷城の警護も手薄となった。この隙をついて、かねて蘆名領の略奪を試みていた横田山ノ内氏の二男山ノ内俊政、三男山ノ内俊範兄弟が、岩谷城の井上河内を攻め滅ぼし攻略するという事件を起こした。これに立腹した蘆名盛氏は山ノ内氏の討伐を図ったが、沼沢城主山ノ内政清の仲裁で事なきを得、自今は蘆名氏の旗下に属するとの約定が成り、二男の俊政を滝谷岩谷城主に、三男の俊範を内山淡路守の婿養子として桧原丸山城主に就かせることとなった。

「西方正統記」によると、西方邑は 10 世紀の頃藤原保祐と名乗る豪族 (銭盛長者) が荘園を営み、比事原と呼ぶ土地に城郭を構え、近隣の諸村を支配下に納めていた。その支配は 400 年にも及び、近隣の戦国領

主とししばしばいさかいを起こしたが、享禄4年(1531)沼沢邑に丸山城を築いた横田山ノ内氏の第4子山ノ内俊安と恭順し、その孫山ノ内左馬亮氏信を養子とし、天文14年(1545)比事原城を改修して鳴ヶ城と改めた。氏信の子信重は蘆名盛氏に従って岩城合戦に参戦し軍功を上げたが、天文21年には三坂山大高寺を攻略して焼亡させた。その後奇病を患い狂死したと伝えられる。信重の子重勝は妻の実家野沢大庭氏に加担して蘆名盛氏と戦い、天正6年(1578)2月15日、小巻邑の合戦で敗戦し鳴ヶ城に戻り自害、子孫絶えると思われている。

天正17年(1589)6月5日、蘆名氏と伊達氏の合戦に参戦した滝谷城主山ノ内俊基は、摺上原の戦いで戦死。蘆名氏も滅亡する。翌年、伊達氏は旗下に属しない横田山ノ内一属討伐を開始、各地で合戦が繰り広げられた。その詳細は「山内天正記」に述べられている。この戦いの最中に豊臣秀吉の全国統一が成り、会津四家の所領は全て押収され、全ての諸士は禄を失い会津を離散した。ただし滝谷山ノ内氏は所領を安堵され邑に留まることを許され、蒲生時代には大割元を任せられ、幕末まで筆頭郷頭の地位にあった。

#### (5) 会津の戦国時代

天正18年8月9日、秀吉は奥羽諸侯の処遇を命じる奥羽仕置きを断行するため、伊達政宗に命じて開かせた背中炙峠を越える新鎌倉街道経由で会津入りを果たし、矢継ぎ早に奥羽二国の仕置きを断行した。

その結果、政宗から没収した旧蘆名氏の広大な領土と、山ノ内・河原田・長沼氏から没収した伊南・伊北・金山谷・南山の全領土をあわせた92万石は、重臣の蒲生氏郷に与えられた。会津の新領主に就いた氏郷は、直ちに兵農分離と検地を実施した。いわゆる文禄の検地で、文禄3年(1594)にまとめられた「蒲生家高目録」には三島町旧村の検地高が全て載せてある。なおこの前年、桑ノ原邑と宮下邑の間で、焼畑の所有をめぐる山論が発生し、近隣の邑主(肝煎)の仲裁証文が河越家に現存する。

「限りあれば、吹かねど花は散るものを、こころ短き春のやま風」という有名な辞世のうたを残し、40才で死去した氏郷の後をうけて、慶長3年(1601)3月24日、越後の豪族上杉景勝が120万石の太守として会津に入部した。秀吉は景勝に「百姓は土地に残し、家臣一属郎党は二度と越後に戻る事の無きよう、家財一切引きつれ会津に行け」と、おりしも豪雪の季節にもかかわらず所替えを命じた。上越から会津まで、どのような進路を選んで移住したのか上杉家にも会津にも記録は残されていないが、家臣の直江兼継の判断で、雪中でも女子供の安全に通行できる五泉・津川・野沢・西方・柳津を経由して若松に入ったと判断される。この折これらの村邑は宿駅として整備されたと考えられる。

景勝は若松城の守備に不足を覚え、入部とともに郊外の神指邑に新城を築くべく工事に着手した。これを謀反と解した徳川家康は会津出征を断行したが、途中で石田三成・前田利家の出兵を知らされて引き返し、関が原の決戦に突入することになる。時に慶長5年9月のことである。上杉景勝に天下取りの意思があったのかどうか定かではないが、会津の動静がわが国の進路を決したとみて誤りはないだろう。

米沢に移封された上杉氏の後には、再度蒲生氏が会津の領主として就封した。氏郷の実子蒲生秀行が会津60万石の大名として若松城に入ったのは慶長6年9月26日のことである。秀行の治世は金銀への欲求が高く、石ヶ森金山、黒澤银山などの採掘が行われ、滝谷の大嶽山からも大量の鉛が掘り出され、大割元に任命された山ノ内治部少輔が請負者に指名された。秀行の一子忠郷は疱瘡を病み25才の若さで死去した。

寛永4年(1627)1月4日、蒲生氏の後任に加藤嘉明が起用され、四国松山から会津40万石の大名として就封した。上杉時代の大割元制度はそのまま継承され、滝谷の山ノ内氏は会津の四分の一を支配下に置き、南山・伊南・立岩郷は古町邑の佐野外記が支配した。

加藤氏は父子二代にわたり会津を支配したが、貢租の増徴など非常識な行動が多く、また自然災害の多発とも重なり、領民の困窮が極に達したことで幕府からの査察をうけ、僅か16年で失脚した。別項に述べた



奥只見の上田・白布銀山の開発にも手を拱き、領土の多くを失った加藤氏の責任は大きい。なお寛永末年の飢饉では、増石に苦しむ間方村の百姓 16 軒が越後国に逃散し、6 軒しか残らなかったと「間方村覚書」に記してある。

#### (6) 会津藩と御蔵入領

寛永 20 年 (1643)7 月、加藤明成に代わって保科正之が会津の領主として就封した。封禄は 23 万石であったが、幕府領 (天領) に定められた南山御蔵入領 55,000 石が私領同然に預けられたので、実質は 28 万石であった。しかし幕藩体制により 23 万石の会津領は会津藩となり、55,000 石の天領は南山御蔵入領として区別されたが、支配の内容は私領と変わる所はなかった。だが正之の没後は数度にわたり天領は幕府直轄の支配が行われ煩雑をきわめた。預かり支配と幕府直轄支配の期間は次のようであった。

会津藩預り支配の場合は南山奉行を置き、郡代官を若干名置いて支配した。幕府直轄支配の場合は、田島に陣屋を置き、代官一名、手代五名、元締一名を派遣し、郷頭、村名主宅を役家として行政を行った。

預支配と直轄支配の回数		期	間
第一回	会津藩預り支配	寛永 20 年 (1643) ～ 元禄元年 (1688)	四十五年間
第一回	幕府直轄支配	元禄元年 (1688) ～ 宝永 2 年 (1705)	十八年間
第二回	会津藩預り支配	宝永 2 年 (1705) ～ 正徳 3 年 (1713)	八年間
第二回	幕府直轄支配	正徳 3 年 (1713) ～ 享保 7 年 (1722)	十年間
第三回	会津藩預り支配	享保 7 年 (1722) ～ 宝暦 5 年 (1755)	三十四年間
第三回	幕府直轄支配	宝暦 5 年 (1755) ～ 宝暦 13 年 (1763)	九年間
第四回	会津藩預り支配	宝暦 13 年 (1763) ～ 天保 8 年 (1837)	七十四年間
第四回	幕府直轄支配	天保 8 年 (1837) ～ 弘化 3 年 (1846)	十年間
第五回	会津藩預り支配	弘化 3 年 (1846) ～ 文久 3 年 (1863)	十六年間

表 3 預支配と直轄支配の回数と期間

#### (7) 御蔵入領の農村組織

近世期は幕藩による農民統制が厳しく、身分制度を徹底させ、幕藩の貸与した土地からの年貢収納を確実にする目的から、村の住民組織は本百姓と水呑に分けられ、名主・組頭・百姓代などの村方役人は本百姓から選任され、名主・組頭を除く本百姓は五人組と称する単位にまとめられ、年貢収納など相互連帯責任を持たされ、欠落や逃散を互に監視させられた。水呑は検地帳に登録されていない小作人・小作百姓のことで、名子・分付百姓・身売り奉公人などと共に村自治会に属することはできなかった。延宝 9 年 (1677) 滝谷組の古記によると、百姓と水呑の割合は 4 対 1 であった。

また地理的・経済的立地条件を同じくする周辺の村邑が十数ヶ村集合して組と呼ぶ行政組織が与えられ、郷頭がこれを支配した。南山御蔵入領には 19 の組が組織され、そのうち金山谷郷には大谷組 2,000 石・滝谷組 2,700 石・野尻組 2,800 石・大石組 3,700 石の 4 組が置かれ、野尻村に郷役所が設置された。

郷頭制度は会津藩では正保 2 年 (1645) に始まり、大谷組 (大谷村・浅岐村・間方村・桑原村・宮下村・川井村・大登村・小ノ川原村・砂子原村・五畳敷村・黒沢村・冑中村・芋小屋村・大成沢村・漆峠村・琵琶首村 16 ヶ村) 郷頭に大谷村二瓶三右衛門。滝谷組 (滝谷村・桧原村・西方村・大石田村・名入村・湯八木沢村・田代村・中村・大嶺村・牧沢村・鳥屋村・遅越渡村・高森村・九九名村・沢中村 15 ヶ村) 郷頭に滝谷村山ノ内治部左衛門。大石組 (早戸村ほか 13 ヶ村) 郷頭に大石村中丸宗左衛門。野尻組 8 ヶ村郷頭に下中津川村本名五郎助が任命された。滝谷組の郷頭は旧滝谷岩谷城主山ノ内氏の家系、大谷組郷頭は旧横田山ノ内氏の重臣大谷村柵主二瓶氏家系からの任命で、他組の郷頭もそれぞれ中世封建社会における武士階級の出資で、村名主同様幕末まで世襲化村役人の地位が与えられた。

#### (8) 村人の生活

近世封建社会で暮らす農民の生活について簡単に触れておこう。封建社会は將軍大名などの大土地所有者と、土地に縛り付けられ年貢を生産する戸前農民とが土地を媒体に硬く結びついた社会であり、農民は領主

から土地を与えられ、一定の保護を受ける代償として恩義と報恩を返さねばならない仕組みになっていて、農民の生活は独自に楽しむというようなものとは全くかけ離れており、衣食住すべてに厳しい統制が課せられ、五人組制度でも述べた通り、あらゆる方面で連帯責任制度・監察制度・密告制度がはりめぐらされ、身動きの出来ないように束縛された中での生活を強いられた。

「慶安の御触書」や直江兼継の「四季農戒書」には、支配者から見た農民の生活規範が事細かに指示されており、がんじがらめの生活を強いておきながら、「年貢さへすまし候へば百姓ほど心易きものはこれ無く」と論している。百姓は年貢を皆済するためどれくらい苦勞しているか支配者には理解できず、絞れば絞るほど出るとの認識であったから、飢饉の年には木の根、草の根はおろか毒草まで食い、数万人の餓死者を出したときでも、支配層からは一人もの餓死者は出なかったと「日本災害史」には述べてある。

近世期の田畑の生産力は低く、年貢を納めると家族で食べる米も残らない程であったが、今日のような補償制度は皆無であったから、自力で家や家族を守る外は無かった。村人にとり自然災害は脅威であったから、日月、神仏に願をかけ無災害を祈念し年の初めには諸神仏に祈願し予祝の所作を怠ることはなかった。村の定めは遵守し、祭りごとに参加して五穀豊穰を勝ち取るための努力は惜しまなかった。農村の習俗が年中行事化する根源は農民生活の厳しさにあったと云える。

#### (9) 三島町の近・現代

戊辰戦争の余韻いまだ燦る明治元年(1868)10月3日、大谷組を皮切りに一揆が発生した。

宮下村総代名主酒井壮哲の文になる若松民政局への訴願状には、会津の民衆には封建的束縛から解放され新しい社会を作ろうとする願望と行動が渦巻いており、いつ世直し一揆が勃発してもおかしくない状況であることが記されている。この一揆は全会津に伝播し、村役人宅に保管された年貢関連の書類を強奪する動きが目立ち、明治新政府に年貢収納の改革を強要したものと解されている。しかし願いは入れられることなく、その反動として各地に自由民権運動が起こり、名入村名主坂内米太郎などの活躍が知られている。

戊辰戦後、明治新政府は会津に幹線道路を開穿して風穴を開ける計画を立て、地元の反対運動を押し切って会津三方道路の建設を強行した。新道路の開通後は物流変革をもたらし、疲弊した戦後会津の経済を急速に膨らませた。さらに明治14年沼田街道の県道昇格を機に、大登村、宮下村、川井村などの有志により、若松から桜枝岐村まで馬車運行の可能な新道の開修が計画され、10年の歳月をかけ全線を開通させた。会津の近代は道作りからスタートし、交通革命は諸物産の交易を助長させ僻遠の地まで潤した。

一方、近代の自治組織の変遷は煩雑をきわめた。明治元年民政局の分局が西方村に開設されたが、若松県の設置にともない廃止された。旧組には区制がしかれ大谷組は第49区、滝谷組は第50区、大石組は第47区となった。同6年には区制の変更があり、大沼郡は第二大区となり、西方村と大谷村に大区長を置き、各村には戸長を置いた。さらに明治22年(1889)町村制実施に伴い、それまで独立していた村は大字を冠して呼ばれることになった。この年4月1日、わが町には西川村(大字宮下・同川井・同大登・同桑原)、原谷村(大字滝谷・同桜原)、三谷村(大字大谷・同浅岐・同間方)が誕生し、合併して西川村外二ヶ村組合村となった。また大字西方・同名入・同大石田・同早戸の旧四ヶ村が合併し川西村が誕生した。その後大正6年(1917)9月21日に西川村は西方村と改名した。また昭和17年4月1日西川村外組合村は宮下村と改称した。三島村の誕生は昭和30年、宮下村と西方村が合併し、同36年町制が施行された。

国鉄会津宮下線の開通、沼田街道の整備、さらには宮下水力発電所の建設に伴い、宮下村は奥会津咽喉の地として、また宿駅の経済都市として急速に発展した。戦後は只見川電源開発の基地として、定住人口も八千人を超す過密村となったが、電源開発の終息とともに人口が流失し、平成の現在では二千人をわる過疎村となり、集落の多くは限界村の様相を呈している。

(文責 角田伊一)

## 第2節 「サイの神」を中心とした年中行事

### (1) 町内の継承状況と特色

昭和 55・56 の両年度に、福島県教育委員会が実施した年中行事の基礎調査で、三島町には文化財として価値の高い行事が継承されていることが判明した。そのため同教育委員会では昭和 61 年に、元旦から初午までの 27 件を「三島の年中行事(初春行事)」として県の重要無形民俗文化財に指定した。さらに平成 11 年にはそれ以降の行事 6 件を追加指定し、名称も「三島町の年中行事」に改めた。ことに小正月行事の「サイの神」は、ほぼ地区ごとに継承されていて特色もあり、さらに基本は変えずに信仰深く行われていることから、平成 20 年に「三島のサイノカミ」として、国の重要無形民俗文化財に指定された。

これはひたむきな信仰が連綿と受け継がれていること、地区内での融和がよく図られていること、さらには協力体制が整っていることなどのためであろう。それに加えて当町では「地区プライド運動」として、地区内の誇りとするものを地区民が自ら選び、40 件を指定して保護にあたったことも忘れてはならない。



写真3 松原地区 サイの神 平成22年1月15日

### (2) 町内の特色ある年中行事

福島県が指定した「三島町の年中行事」は、次の 13 種である。

- 1 月／「若水汲み」「若木迎え」「鳥追い」「団子さし」「初田植」「サイの神」「愛宕様参り」「愛宕様の火」
- 2 月／「豆まき」「初午(わらだ転ばし)」「初午(火伏せの行事)」
- 3 月／「三月節供と雛流し」
- 6 月・7 月／「虫送り」
- 10 月／「虫供養」

これらは複数の地区で行われているものもあることから、指定した地区は 33 に及ぶ。このほかにもさまざまな行事が継承されており、主なものだけでも次のとおりである。

なお、行事名は集落によって異なることもある。

- 1 月／「元旦参り」「年始参り」「歯固め」「事始め」「三日とろろ」「爪切り正月」「七草」「針供養」「初山」「棚下げ(棚下ろし)」「風穴」「餅の正月」「長虫除け」「粟穂さし」「成り木責め」「金物の年取り」「お日待ち」「女の寺年始」「仏の正月」「二十日正月」「お大師さま」「三夜さま」「寒粥餅」
- 2 月／「節分焼き」「作占い」「百万遍」「やさぶろうかかぁ」「から白突き」「地神祭り」
- 3 月／「雛まつり」「節供礼」「十三参り」「大般若」「団子まき」「山の神祭り」
- 4 月／「花祭り」「お明神さま」「観音さま参り」「地藏さまの祭り」
- 5 月／「端午の節供」「菖蒲湯」
- 6 月／「ムケの祝儀」「早苗振り」
- 7 月／「七夕」「土用の宮籠もり」「土用次郎」
- 8 月／「墓参り」「迎え火」「盆」「盆踊」「十五夜さま」「二十日盆」
- 9 月／「二百十日の宮籠もり」「初九日」「豊年踊」「中の節供」「締め九日」
- 10 月／「刈り上げ」「大根の年取り」「から白搗き」
- 11 月／「太子講」「三夜さま」
- 12 月／「川浸り餅」「師走八日」「大黒さまの年取り」「恵比須さまの年取り」「つめ恵比須」「冬至かぼちゃ」



「納豆の年取り」「煤はき」「松迎え」「餅搗き」「年取り」

さらには庚申講・熊野講・観音講・初午講・疱瘡神講・古峯神社講・不動尊講・雷神講・地蔵講・湯殿山講・天王講・山の神講・天神講なども行われている。

県指定やこれらの中には残念ながら中断、あるいは廃絶したものもあるが、現在継承されている行事でも、県内には類例をみないものも少なくない。ことに次の4件は特筆すべきものである。

#### 1) 大谷の「愛宕様の日」と桑原の「愛宕様参り」

「愛宕様の火」は大谷地区の火伏せの行事で、1月23日から翌24日にかけて行われる。23日の夜、もと郷頭の二瓶家の当主が乾燥させた杉の皮を束ねて、長さ1間(1.8㍓)の「松明」を作る。翌日の午前4時ごろに同当主は紋付き羽織の正装で、座敷に設けた祭壇の前に坐って火打ち石で火を起し、まずモグサにつけ、さらにつけ木に移してから、祭壇の燈明に点火する。この燈明の火で座敷の囲炉裏においてある豆幹を燃やし、それより松明に点火する。



写真4 大谷地区 愛宕様の火

これを二瓶家から決められた順に、集落の全戸を深い雪に囲まれた道を通って次々と送り渡していく。消えそうになると、少し強く振る。するとたちどころに火の勢いは強まる。次の家に松明が持ち込まれると、主として主婦が玄関先で迎えて塩をかけて清めてから受け取り、その火をつけ木に受け、次に燈明、豆幹と移し、最後に竈の薪を焚きつける。この日の神棚への供物と朝食はこの火で調理し、これより一年間、この火をきらさずに用いる。朝食がすむと、家族揃って「しとぎ」や魚の干物、古銭などを持って集落はずれの小高い山にある愛宕神社に向かう。途中に参拝者に会えば、互いに新年を祝い、労をねぎらう。供物と古銭を供えて参拝し、火伏せを祈る。帰りにはすでに供えてあった古銭を1枚いただいて帰り、それを囲炉裏の自在鍵に下げておく。火伏せ祈願という。しとぎもお護符として持ち帰り、家族でいただく。直会である。

桑原の「愛宕様参り」も、基本的には前者と同じである。もと名主の河越家の当主が、まだ暗い早朝に供物と火縄を持って愛宕様に行き、火縄に点火する。これを持ち帰ってやはり戸ごとに回す。各家ではこれまでの火をこれと切り替える。



写真5 桑原地区 愛宕様参り

愛宕神社の総本社は京都の愛宕山にあり、古くから都を守る神として信仰されてきたが、火の神も祀っているところから、火伏せのお札も配布した。東北地方にもその神が勧請され、信仰が広まった。県内でも各地に祀られているが、ことに会津地方では冬季に強い風が吹くことから、各地で大火にみまわれた。そのために愛宕神社だけでなく、同じく火伏せの神である古峯神社のお札を祀った石塔も多くの集落に立てられ、古峯講は今なお続いている。

県内には例を見ないこの大谷と桑原の火伏せの行事も、このような背景から生まれたのであろう。それにしても単に信仰深いだけでは継承は困難で、集落の強い結束が根底にあったことによると思われる。協力と相互扶助を柱とする共同体の姿をよく伝えていて、特に注目すべき行事である。ただし、残念なことに大谷では現在中断している。県指定の行事の一つというだけでなく、地区がこれまでのように一体となって存続するためにも、ぜひとも再興を願いたい。

#### 2) 大谷の初午行事～わらだ転ばし

大谷地区の鳥海で行われている「わらだ転ばし」は、初午の日を中心に行われる豊作祈願と年占の行事で



ある。

初午の前日に、家ごとに藁で直径 40 ㍍ほどのお盆状の「わらだ」を一つ作り、これに繭玉とっている繭状の団子・赤飯・小魚の干物・炒り豆を入れ、当主は子どもを連れて集落到近い山の中腹にある稲荷神社に向かう。同神社は小さい社で、ここに着くと、めいめい供物を入れた「わらだ」を供えて拝礼し、一同で直会をする。



写真 6 大谷地区 わらだ転ばし

翌日の初午当日、家族揃って稲荷神社に参拝する。この

あと直会で、前日に供えた供物をお護符としていただく。この日、ここに参拝しないうちは朝茶は飲まない。

直会がすむと、子どもたちは「わらだ」を借り、これを社殿前の参道から約 10 ㍍下にある鳥居めがけて転がす。参道の雪は踏み固められているが、前日から人々が上り下りしているために凹凸があり、思うように転げ落ちない。途中で倒れることも多い。3 回くぐすことができれば、今年は吉とも養蚕が豊作になるともいって、子どもたちは真剣に参道をのぼり降りして繰り返す。何としてでもくぐすと頑張っている。「わらだ」を拾って届けるなど協力しあうこともあり、その姿はじつに微笑ましい。めでたく 3 回くぐると、歓び勇んで登校する。

作占ともいって稲の豊凶を占う行事や神事は、雪国の東北にはきわめて多く、その形態もさまざまである。それにつけてもこのような行事も県内には例がなく、養蚕の信仰が深く関わっているのも特色である。

なお、この行事も現在中断している。子どもたちが互いに助け合う場でもあるだけに、残念でならない。この再興も切に望みたい。

### 3) 高清水の三月節供と「雛流し」

高清水の三月節供で、「雛流し」も行っている。

前日の 3 月 2 日に、各家では女性たちが白紙と色紙などを用いて、家族の女性の数だけ着物姿の紙人形を作る。人形はすべて女性で、髪は島田をかたどっている。古くは色紙は用いず、白だけであったという。できあがると座敷か床の間に祭壇を設け、最上段に会津天神、その下に人形並べ、さらに菱餅も供える。天神は男児が初節供を迎えた時に、親族が贈る習わしになっていて、旧家の神棚には代々のものがいくつも供えてある。



写真 7 高清水地区 雛流し

翌 4 日の午後、小学生の子どもたちが学校から帰ると、年長の男児が中心になって木箱を持ち、家ごとにめぐって人形を集めて歩く。各家では祝儀を用意している。すべて集め終わると、箱に入れたまま只見川に流す。それを子どもも大人も一緒になって手を合わせて見送る。この行事は、と

ときには大人の助言はあるものの、ほとんど子どもたちだけで行っており、かつての子ども組の名残がみられる。厳しい自然の中で生きるがために、老若男女が揃って無病息災と長寿を祈るその姿には胸を打たれる。

「雛流し」は、かつては隣接する金山町の西谷・水沼・中川でも行っていたがいずれも中断し、現在只見川沿いでは高清水だけである。この行事は雛飾りの古い姿ともいわれ、全国的にみると京都市のほか長野県・島根県、東北では山形県でも行われているが、数は少ない。高清水では一時中断したものの今なお継承しており、これは町の誇りである。

### (3) 「サイの神」

小正月行事の中でも規模の大きい行事で、1 月 14 日に地区を上げて行われる。町内では今なお 12 の地

区で継承しており、西方地区は組ごとなので、それも含めると 24 カ所になる。

これは区長が責任者になっているところが多いものの、いずれも主役は青年団で、14、5 歳の少年が「親方」になるところもある。最初の仕事は「バンバ踏み」である。サイの神を立てる場所をババあるいはバンバといっている。ここの雪を踏み固めることを「ババ踏み」あるいは「バンバ踏み」といい、いずれの地区も小学生の男女と決まっている。かつては藁沓、近年は長靴にカンジキをつけて行う。午前中から始めるが、夕方までかかることもある。子どもたちは毎年のことだけにすべて心得ていて、特に指示されることなく自主的に行っている。

これと並行して、燃え種といってサイの神の神木に巻きつける藁や豆幹、茅などのほか、その根元に積み重ねるお札や門松・注連飾り、古くなったダルマなどの縁起物も集める。これも子どもたちの分担であるが、自ら運んでくる住民もいる。

一方、大人は集会場などでオンベを作る。これは御幣、あるいはボンデン(梵天)というところもある。扇子を 3 本合わせて円形にし、それにその地区で信仰されている神々の名を書く。その下には大きな和紙で作った垂を下げるか、藁の作り物などをとりつける。

やがて青壮年が揃って、サイの神の芯にする木を取りに山に向かう。この木を神木といい、それを切り出すことを「ご神木迎え」あるいは「サイの神迎え」という。木は杉のことが多いが、ブナやナラのところもある。かつては大小 2 本立てた。現在はほとんど 1 本になったが、長さは 15 ㍎から 20 ㍎である。この木は厄年にあたる人が寄進する。

山に入ると、真っ直ぐに伸びて枝振りも整った木を探す。見つけると木に注連縄を巻き、燈明・お神酒・塩・するめなどを供えて拝礼する。幣束を縛りつけるところもある。切り倒すには、現在、ヨキと鋸を用いているが、かつてはヨキだけであった。倒した木はウラ(先端)の数本の枝だけを残し、それより下は切り落とす。これを運び出すには、近くからとった藤蔓などを巻きつけて引く。山仕事の基本的な技術は、ここで身につけている。運搬にあたっては、ウラを先頭にするところが多いが、反対に根本のところもある。

ババに着くと、いよいよサイの神作りにとりかかる。青壮年が主になって、子どもたちが集めておいた燃え種を、神木のウラから根本に向かって縛りつけていく。反対に根元からウラに向かう地区もある。いずれも藁も豆幹も根を上にして、少しずつ重ねて縛る。根元に近づくにつれて太くするために、二重三重にする。最後にオンベを先端に取り付ける。なお、滝谷地区では神木を十字に組み、宮下地区では丸竹で小屋風に作り、その中に門松や注連飾り・縁起物・燃え種などを入れている。これは会津では珍しい。

やがて立てる作業に取りかかる。1 間(1.8 ㍎)から 5 間(9 ㍎)の梯子を数丁用意し、上部に数本の綱もつける。梯子で少しずつ持ち上げ、綱も引く。子どもたちも綱につかまって協力する集落もある。神木は 15 ㍎前後もあり、大量の燃え種を巻きつけてあるので容易ではない。「親方」の少年が幣束を振ったり、胴突き唄をうたってはやすところもある。

ようやく立ち上げると、数人が根元にとりつけた綱を持ち、掛け声をかけながら持ち上げては突き落とす。これを「胴突き」あるいは「お祭り」といっている。積雪が多いだけに、支えをせずとも倒れない。このあと神木の下に、残った燃え種を積み、さらに門松や注連飾り、縁起物などを積む。これら一連の作業には、年長者も適宜助言をしている。

すべてできあがると、一同はいったん帰宅して夕食をすませ、ころを見計らって再び集まる。点火は麻幹か杉の枯れ葉を杉皮で包んだ「松明」、あるいは蠟燭を用いる。火は近くの神社の燈明の火を移しとるとこ



写真 8 松原地区 御神木迎え

ろや、火打ち石で採火するところもある。点火は区長や厄年の男性が行う。火は数分で先端のオンベに達する。燃え上がると、その地区の世話人が、厄年の人々が寄進した酒を振る舞い、蜜柑を撒く。

この火にはさまざまな占いや呪いがみられる。火の勢いがよいと、豊作になるといっているところは多い。オンベが燃えて飛んできた田は、豊作になるともいう。燃えさかっている間に、子どもや大人の厄祓いのために「胴突き」と

いって、胴上げをすることもする。また、新婚の男性の手足を数人で持ち上げ、上下に振っては雪の中に投げ入れる地区もある。この風習は県内ではこの地方だけで、近くでは新潟県で行われている。さらに厄年・新婚・区長などの地区の役員の腕を若者が両わきから持ち、駆け足でサイの神の周りを3回、あるいは7回まわってから胴上げし、やはり雪の中に投げ入れる集落もある。

火の勢いが弱まると、餅やすめるめを小枝に挟んで焼いたり、酒を竹筒に入れて温めるなどして、これをいただく。病気をしないという。また、この火で腹を温めると「腹痛み」しない、悪いところを温めると治る、その煙を頭にかけると頭痛をしない、風邪をひかないともいう。さらに燃え種の炭を額や顔に塗ると頭痛や歯痛をしないとか、風邪をひかないといっ、自ら塗ったり、互いに塗り合うこともする。強引につかまえて塗り合って、広場を逃げまどう姿も見られる。

神木を片付ける時期や方法は、地区によって異なる。燃やしきるところ、その夜あるいは翌日以降に倒すところ、春先までそのままにしておき、自然に倒れるまで待つ地区もある。

しかし、神木だけに、いずれの地区も粗末な取り扱いはいしない。かつては丸木橋に用いたところもあった。現在はババの地主が短く切って薪にしたり、稲を干す際の細木や冬季の神社の囲いに用いたり、秋の「刈り上げ祝い」に餅を焼く薪などにしている。

近年はかつてほど積雪は多くないが、それでも4、5ヵ月間は雪に包まれた生活を強いられる。このような山里ではなおのこと助け合い、協力し合わなければ生きていけない。農作業はもとより、山仕事での智慧や技術のかかなりの部分を、年中行事をとおして身につけている。さらにこれらはこの地で生きる人々にとって、強力な精神的支えであったと思われる。年齢や性別を越えて行われるこの地の年中行事には、まさに地域づくりの原点を見る思いがする。火・水・土は生活にかかせないだけでなく、それに対する深い思いは決して途絶えることはない。智慧を出し合って活用を工夫すれば、地元の人々の思いを損ねることなく、地域の発展に寄与できる行事になるであろう。

(文責 懸田弘訓)



写真9 西方地区 サイの神作り



写真10 川井地区 サイの神



### 第3節 信仰

庶民の素朴な信仰心と密接に結びついて育まれてきた信仰を、民間信仰といい、かつは俗信ともいわれた。生きることは容易なことではない。雪国では、なおのことである。それだけに1年をとおして、節目ごとに豊作や無病息災・子孫繁栄、さらには火伏せを祈るさまざまな信仰行事を繰り返してきた。

信仰には神道や仏教などの既存の宗教と結びついたものと、自然とかかわって生まれた素朴なものがある。神としては、まず集落の氏神と屋敷神である。町内には稲荷が見られる。このほか町内には山の神(大山祇)・愛宕・古峯・金毘羅・秋葉・月山・湯殿山・飯豊山・豊受・天神(天満)・足尾があり、自然発生的なものでは水神・鳴神(雷神)・疣神・疱瘡神などもある。仏教にかかわるものでは庚申・巳待・二十三夜・二十六夜・馬頭観音(厩山)・將軍地蔵・文殊菩薩・不動尊・毘沙門天・念仏供養、さらには牛馬供養・鼠供養もある。中には神仏習合の名残を留めたものもあり、間方の雨乞いには、行者か山伏の影響がみられる。

これらの祠や碑は、町内の社寺の境内だけでなく、路傍や広場にもあり、きわめて多い。祠はいずれも石造りのしっかりしたもので、雪が多いということもあろうが、信仰の深さが忍ばれる。これらの信仰には、集落内で全戸または有志で講を作っているものも多く、複数の性格を持つものもある。出産は女性にとって命がけのことであったので、子授け・子育てを祈願する観音講は今も行われていて、心の支えになっている。また古峯講や竹屋観音講のように、集落を代表して代参するものもある。次に、講集団を中心に、年中行事の一部も含めて、特色ある信仰行事を上げてみたい。

#### (1) 社寺での行事

涅槃会 釈迦入滅の日とされる旧暦2月15日に、寺院で行われる法会で、涅槃絵を掲げて読経し、釈迦の遺徳を偲ぶ。

川井では、かつては2月14日、現在はその近くの土・日曜日に、松音寺で行っている。前日に女性たちはうるち米を1斗2升集め、集会場で白・紅・緑・青・黄色の五色の団子を作る。翌日、午前10時に松音寺に集まって団子を仏壇に供え、読経、焼香のあと、供えた団子を撒く。一同は競って拾う。これを自宅に持ち帰り、焼いて砂糖醤油やきな粉をつけるなどしていた。寺はここ30年ほど無住で、それまでは花祭りも行っていた。なお、涅槃会は、宮下・西方・名入でも行っている。

花まつり 釈迦の誕生日とされる旧暦4月8日に寺院で行われる法会で、灌仏会といわれ、釈迦の誕生仏に甘茶をかける風習は全国的である。町内では月遅れの5月8日になり、無住になって中断しているところが多い。



写真 11 花まつり

名入の龍昌寺では、素朴ながら本来の姿をよくとどめて行われている。誕生仏は寛延年間(1748～51)に、名入の住人が本堂と客殿の建立を記念して奉納したものと伝えられている。西方の西隆寺では、「鬼子母神祭」と重なって盛大に行われている。鬼子母神像は古くからあったともいわれているが、お堂は滝谷の肝煎であった青木源九郎の寄進で、明治3年に建立したものという。戦後に西方の有志が奉賛会を作って広めてから盛んになったといわれ、今なお多くの参拝者が訪れる。

なお、4月8日は卯月八日といって、田の神が里に降りてくる日とされるところが多く、日本古来の行事もあった。

お籠もり 一般には宵祭りに社寺などに籠もることをいう。

川井では秋口に伊豆神社に甘酒を供え、男女ともにお参りする。かつて男性は社殿に籠もった。

遺髪供養 川井の松音寺境内に、木造の納髪堂がある。盂蘭盆に、前年の間に亡くなった人の毛髪の一部を納めて供養する。集落全体で供養しようとする思いやりが感じられる。

遺骨を木製の五輪塔に納めて供養する習俗は、会津若松市河東町冬木沢の八葉寺にあり、かつては柳津の虚空尊でも行われていた。喜多方市熊倉町小沼の安養寺には、会津の大念仏撰取講の全講員の毛髪を納めた供養碑が明治 33 年に建てられたが、川井の習俗は大変珍しい。



写真 12 川井地区 納髪堂

## (2) 集落での行事

山の神講 山の神は山を支配する神で、山仕事をする人々からは厚い信仰がある。会津地方では西会津町野沢の大山祇神社とつながりが深い。

川井では 2 月 11・12 日に行っている。男性だけによるもので、かつては当番の宿、近年は集会場になった。初日はうるち米 2 升、糯米 1 升を集め、餅を搗き、煮しめも作る。床の間には野沢の大山祇神社の掛け軸を飾り、米の粉を水で解いて固めたオカラク・神酒・切りイカを供える。お膳・皿・茶碗は各自持参し、食後は自分で洗う。

滝原では、12 月 12 日と 2 月 12 日の年 2 回行った。1 戸 1 名の男性が、夕方順まわりの宿に集まり、「山神神社」の掛け軸を飾り、糯米をとぐ。翌日、朝食のあと餅を搗き、一同で幣束・丸い餅二重ねを持って、山の中腹にある山の神を祀った石の祠に供えて参拝する。昼食は汁餅・あんこ餅と、鯨汁餅を作っていただく。数年前から中断している。桑原でも男性だけによる行事で、かつては春秋の 2 回行った。現在は 11 月 12、13 の両日だけで、午後 7 時ころに順番の宿に集まり、掛け軸を飾る。この夜は籠もり、翌朝、朝食前に裏山の愛宕を祀った石の祠にお参りに行く。周辺にはいくつかの祠があるので、その一つが山の神であったと思われる。



写真 13 川井地区 山の神講

平成 23 年 2 月 12 日

滝谷では、春と秋の 2 回行った。参加するのは男性だけで、「とう」のち「講元」と呼んだ当番宿に午後 3 時ころに集まり、掛け軸を飾り、五目飯を作って、お神酒とともに供えた。一同揃って祝詞を唱えてから直会を行った。甘酒も作った。直会では、謡と祝い唄の「さんさ時雨」を唱和したあとは、掛け軸を裏返しにして、流行の歌をうたった。掛け軸を次の宿に引き渡すことを「とう渡し」といった。東北では少ない頭屋制ならでは用語が残っている。昭和 30 年ころに中断した。

大石田でもかつて当番宿に男性が集まり、掛け軸を飾って行った。

古峯講 一般には「こぶがはら講」という。火伏せのための講で、栃木県古峯神社への代参が行われる。

川井では、全戸が加入している。かつては 2 人ずつ交代して栃木県の本社に代参に行き、会費でお札を受けてきて配った。近年は、6 人ずつ 3 班に分かれていて、3 年に 1 度順番がまわってくる。バス会社のバスを利用しての 1 泊 2 日の日程で、1 月 9、10 日ころが多い。

滝原では、雷神社の境内に石の祠がある。旧暦 3 月 28 日、かつては順まわりの当番宿で、現在は公民館に男女を問わず 1 戸 1 名が集まって行っている。祠には生卵・お神酒、賽銭を供えて拝む。一同には奴豆腐一丁と菓子袋がふるまわれ、豆腐は醤油をかけていただく。講員は 17 戸で、本社には代表 1 名が節分の朝に出発し、お札を各戸 2 枚ずつ受けて翌日帰り、すぐに配る。代参は順番に行くので、費用は各自負担

である。

間方では、有志 12、3 戸が加入している。1 月末に全員でバス会社のバスを利用して、本社に日帰りで参拝している。

滝谷では全戸が加入している。年末の集落の総会で 5 名ほどの代参をきめる。本社への代参は 1 月 2 日にバス会社のバスで向かい、お札を受けて翌日に帰る。お札は帰るとすぐに配布する。講は、1 月中に上（かみ）から下（しも）への順まわりの宿で開いた。床の間に掛け軸を飾り、御馳走を供え、謡「高砂」「四海波」、続いて「さんさ時雨」を唱和し、そのあとは掛け軸を裏返す。こうすれば流行の歌をうたってもよいことになっている。夜中近くに解散した。現在は午前 11 時から集会場で行っている。

大石田では、44 戸が上（かみ）19 戸、下（しも）25 戸の 2 組に分かれて、毎月当番の宿で行っている。参加するのは男性であったが、現在は女性も出席している。世話人は各組とも 5 名である。かつては 15 日であったが、現在は第 2 日曜日が多い。酒・煮物・野菜の漬け物などをふるまうが、これは宿で準備する。12 月は合同で、15 日前の日曜日に行く。ここでは 1 年間の反省と、本社へ代参する 6 名を籤できめる。代参は 1 月 10 日ころにバス会社のバスに同乗し、お札を受けて帰る。主たる経費は講で負担する。

この講は会津全域で盛んで、町内でも多く、西方・大石田・高清水・滝谷でも行っている。会津では各地で大火があり、当町でもあったことからその信仰は今なお根強い。

伊勢講 伊勢神宮を総本社とし、参詣を目的に作られた講である。この講は気心の合う有志で組織しているところが多いために、信仰集団としての性格ほかに、お互いに冠婚葬祭などにもかかわっている。

川井では 7、8 人前後の有志で組織し、ほぼ全員で伊勢参りをする。親睦的な性格が強い。戦前は 1、2 カ月を要し、発つ際には家族と水杯を交わした。大石田では、かつて代参をした。

愛宕様（講） 火伏せの神で、京都の愛宕神社を総本社とし、その分霊を祀った神社は全国的に多く、県内にも各地に祀られている。

桑原では 1 月 24 日の早朝、河越家から火を灯した火縄を戸ごとにまわす。各家ではこの火で神棚の燈明を灯す（「第 1 節『サイの神』を中心とした年中行事」を参照）。

大石田では 1 月 24 日に、集落の一つの組だけが順まわりの宿で行う。愛宕の祠にお参りし、直会をする。かつては孔開き銭を供え、すでに供えてあったものをいただき、火伏せになるといって自宅の自在鉤に下げた。

川井では家ごとの祭りになっていて、ここでも 1 月 24 日の早朝に赤飯を炊いて重箱に入れ、これを持ってお参りに行く。愛宕の神は石の祠に祀られていて、ここに重箱の蓋をとって供えて拌んだあと、少し取り分けて供えて、重箱は持ち帰る。自宅に戻ると「お茶ごと」といって、家族全員でいただく。



写真 14 大石田地区（上居平） 愛宕

庚申講 庚申は中国の道教の影響を受けた信仰で、一般には体内の三尸という虫が、眠っているすきに天に登ってその罪を告げるので、翌日まで眠らずに過ごすという行事である。県内でももっとも盛んな講のひとつで、町内にもその碑は多い。

間方では、参加するのは男性の有志であった。春と秋の 2 回、庚申の日の夕方に、順まわりの宿に昆布・牛蒡などの煮しめを持参して集まった。宿では吸い物と素麺を準備した。床の間に仏像を飾り、読経をした。泊まらず、夜に帰宅した。昭和 50 年代から中断している。

大石田では、昭和 60 年ころまで行った。男性の有志が夕方に当番に集まり、掛け軸をかけて祈り、夜遅く解散した。



百万遍 大きな輪の数珠をお堂で輪になってまわす、供養の行事である。

桑原では、2月2日の午後6時から同7時ころにかけて、男女の子どもと成人男性が観音堂に集まり、「なんまいだ、かんまいだ、何もかにも後生だ」と繰り返し唱えながら、数珠まわしをする。終わると子どもたちに菓子袋をふるまう。



写真 15 桑原地区 百万遍

地藏講 地藏はあの世に行く人を救ってくれるといわれることから、年長者に広く根付いている信仰の一つである。

大石田では1月23日、集会場で女性だけで行い、集落の入口にある地藏尊にお参りする。妊娠したことがわかったと、宿を引き受け、親戚の女性も招くこともある。

日待講 一般には「お日待ち」といい、信者が寺に集まって祈祷をするところが多い。

川井では1月7日に、「お日待ち」といって、松音寺で行っている。午前10時から読経・焼香をする。祖先に感謝する日ともいう。一年間の決算・予算もここで決める。

観音講 観音信仰は、地藏信仰と並んでよく広まっている。講員は既婚女性で、子授けと安産を祈願している。当町には今なお毎月行っているところがあり、女性は男性より外出が少ないだけに重要な交流の場で、心のよりどころでもある。

川井ではかつて毎月16日に行ったが、のち春と秋の2回になり、現在は3月だけになった。女性だけによる行事で、1戸1名が参加する。もとは当番の家で、のち集会場になり、煮しめなどの料理を作って一同でいただく。歌や踊りもでる。籤で選ばれた5名は、喜多方市(旧塩川町)の竹屋観音に代参をし、お札を受けてくる。お札は集落内の子安地藏にも1枚供える。近年は、温泉で行うようになった。やはり安産・子育て祈願という。

桑原では、昭和50年代までは毎月、旧暦の16日で、夕方に既婚の女性が順まわりの宿に集まり、床の間に観音像の掛け軸を飾り、芋煮・大根煮などは宿で作って供え、一同でいただいた。現在は、2名から5名の当番をきめていて、新暦2月と11月の吉日の午前10時ころから町営の「ふるさと荘」で、会費制で行っている。これも子授けと安産の祈願という。

間方では、11月16、7の両日で、未婚も含めた女性が参加し、小さい子どもも連れてきた。平成15、6年ころまでは当番の宿で行い、木像を飾った。初日は夕方に集まり、翌日の朝に餅を搗いて、あんこ餅・納豆餅・汁餅などを作って供え、夕方に解散をした。これとは別に「まわり観音講」とか、大豆を炒って食べることから「豆炒り観音講」ともいい、全戸加入の講もあって前者とは別の宿で行った。現在は、両者を一緒にして、夕方に集会場に集まり、会食している。

滝原でも宿に女性が1戸1名ずつ集まり、掛け軸を飾り、供物を供えて拝んだ。

滝谷では、年1回、女性が行っている。かつては順まわりの宿であったが、現在は西山温泉や柳津温泉など、会津地方の温泉で行っている。

大石田では、集落が上(かみ)と下(しも)の2組に分かれ、毎月順まわりの宿で日中に行っている。床の間に掛け軸を飾り、米の粉で作った団子を皿に持って供える。宿ではお茶や汁物をふるまう。年1回、3月16日に近い日曜日は、勘定観音という。籤で選ばれた6名は、喜多方市の竹屋観音に代参し、お札を受けて帰る。お札は仏壇に張ることが多い。

土 用 土用は年に4回あるが、一般には暑さの厳しい夏の土用をさす。土用の第二日目を土用次郎という。

滝原では、「土用のお籠もり」といって、土用次郎の日の午後7時過ぎに、男女の別なく1戸1名が鎮守の駒形神社に集まり、胡瓜もみ・蜜柑・お神酒を供え、拝礼のあと、供物を下げて直会をする。暑い夏を無事に越せるための祈願という。

土用次郎には、家ごとの行事もある。間方では御馳走を作り、神棚と仏壇に供える。桑原・滝谷では農休日、行事はない。

二十三夜講 滝原では、順まわりの宿に既婚女性が1戸1名ずつ集まり、地蔵の掛け軸をかざり、大根煮・漬物・甘酒を供える。現在は中断している。

町内には二十三夜と二十六夜の碑、ことに二十六夜が多い。十九夜は、これまでの調査ではみられない。

二百十日 立春から数えて210日目の日をいい、9月1日ごろである。台風の時期でもあるために、風水害除けの行事が行われる。

滝原では、鎮守の駒形神社に神職を招き、トウモロコシ・菓子・お神酒を供えて祭典を行う。「おこもり」ともいっていることから、かつては籠もったのであろう。駒形神社は金山町沼沢の同社の分霊といい、秋祭りは、9月15日に行う。

川井・桑原・間方では行事はないが、農休日としている。間方では「村休み」といっている。滝谷では休みとはしていない。

雷神の祭りと雨乞い 雷神は落雷除けとして祀るとともに、雨乞いの祈願も行われる。

間方には、小学校の向かいの山腹に雷神の碑があり、4月に甘酒を作って茶飲み茶碗に入れて供える。拝んだあとそれをいただいて帰る。昭和32、3年ころに、一度雨乞いを行った。午前10時ころに雷神に村中が集まり、神職も招いた。神職は法螺貝を吹き、その他の人々は鉦を連打した。終わるころ、短時間ではあつか大粒の雨が降ったという。

滝谷では、集落南東の「上の山」に雷神の石の祠がある。落雷があつたために祀ったと伝えられている。祭礼はない。

雨乞いとは反対に、長雨が續くと若者は区長に「天気まつり」をしたいと申し出た。農休日になり、酒宴を開くこともあった。

家ごとの行事もある。川井では雷神を「鳴り神さま」ともいい、祠はもと集落のはずれにあつたが、愛宕神社の境内に遷座され、石の祠に祀られている。旧暦10月29日に各家で新米で餅を搗き、長さ約10㍍から15㍍、幅3㍍ほどに細長く切って、早朝に2、3本供えて拝む。帰りに先に供えられたものの中から、やはり2、3本いただき、家族で食べる。病気をしないとも、農作業が無事にできともいう。刈り上げ直後で、豊作感謝の行事でもある。餅はこの日に愛宕の神や山の神の祠、伊豆神社などにもお賽銭を添えて供えられるために、小中学生は、年長者の指示で分担をきめて、他の集落の子どもから守り、のちに分け合った。

滝原にも雷神の石の祀がある。かつては山中にあつたが、古峯神社の境内に移した。各自でお参りに行く。早戸にも石の祠があり、佐久間家では7月10日に、米・田作り・お神酒を供えてお参りをしている。

牛頭天王 仏教とともに伝えられ、のちにスサノオの命と一緒に疫病や災害除けの神として信仰された。県内にはそのままの名の碑もかなりみられるが、八坂神社や八雲神社はこれを祀っている。

間方には石の祠があり、「天王さま」と呼んでいる。12月8日にオオシダの木で箸を作って素麺をゆで、家族揃ってお参りに行く。高齢で行けない人は、自宅から祠を向いて拝む。この日、素麺を家族でいただく。

### (3) 子どもの行事

鳥追い 正月は一年の縮図と考えられただけに、この間に稲穂を食べる鳥を追っておけば、秋には心配ないとして行われる、子どもの行事である。

桑原では、1月13日の夜に子どもたちが集落の中央に集まり、次の歌を繰り返したいながら集落を時計回りに二、三巡った。現在は、中断している。

■今日はどこの鳥追いだ 三日町の長者様の鳥追いだ  
何とゆって追いましょう 雀すわどり  
ちゃちゃがりぼっぱ ヤーホイ

滝谷では14日の夕食後、午後7時ころから子どもたちが行っている。持ち物はなく、次の歌を唱和しながら集落を往復する。

■今日はどこの鳥追いだ 長者さまの鳥追いだ  
さらばさつと 追いましょう

■雀の頭八つに割って さん俵に詰め込んで  
鬼が島ホーホ かにが島ホーホ ヤーホイ ヤーホイ

川井でも行われていた。「サイの神」の「ばば踏み」のあと、雪深いところを掘って風穴、訛ってカザナを作り、よくここで夕食をとった。このあと暗くなると揃って、次の歌をうたいながら夜遅くまで練り歩いた。

■今日はどこの鳥追いだ につこう町の法印様の鳥追いだ  
さらばとって追いましょう イヤーホイ シャーホイ  
名入でも行われていた。

■今日はどこの鳥追いだ につか町の法印様の鳥追いだ  
なーになーにさいのこ 一に牛蒡 二に納豆  
三本大根 四豆腐 五とまめ ろっこうかけて  
せんやきでくつつめた イヤーホイ イヤーホイ

鳥追いは檜原でも行われている。また、西方では1月15日に雪を固めてドウといっている穴を作り、上（かみ）と下（しも）に分かれて唱えことばでかけ合いをした。国道で結ばれている西会津町の睦合では、やはり雪穴を掘り、薪や小枝を積み重ねて火をつけ、手には松明を持って鳥追い歌をうたった。川向かいに集落があると、互いに松明を投げ合い、相手に負けまど大声で悪口までいい合う。勝たねば悪い鳥を追い払うことができないと、子どもながらに真剣であった。西方には西会津と類似の習俗がみられることから、関連があるかとも思われる。

鳥追いは会津ではことに広く行われていて、その歌も多彩であるが、名入のような数え歌形式は珍しい。

虫送り 害虫も悪霊の一つとして、藁人形を作ってこれに依りつかせて流したり、焼く行事は全国的にみられる。当町では草と木で小屋を作って虫を入れて焼く。現在、県内では会津地方だけになった。

大石田では、7月10日に子どもたちだけでなく大人も手伝って大がかりな行事を行っている。リヤカーに多くの雑木を立て、雑木と草で虫かごを作る。ほかに行灯風な提灯を数十個、「悪虫送り」と書いた紙も多数用意する。夜7時ころ列を組んで、村はずれの崖まで行って焼く。

桑原では「でんばら虫」といっている。田植が終了した早苗振り祝いのころ、子どもたちは集落の東はずれで、木と杉葉などで屋根つきの小屋を作り、この中にてんとう虫などを数匹入れる。こ



写真 16 松原地区 鳥追い



写真 17 大石田地区 虫送り



れに棒を差して担ぎ、「悪虫送り」と書いた旗も持って、「でんばら虫送るよ、悪い虫送るよ」と唱えながら、鎮守の三島神社にお参りをし、帰途に焼く。

川井では20年ほど前まで、土用次郎の日に小中学生による少年団が行っていた。横木一本に細い木で丸く骨組みを作り、麦わらを編み込み、この中に青虫やてんとう虫を数匹入れた。鳴り神前の広場で2組作り、川べりの沢で焼いた。西方と名入では6月に行っている。

#### (4) 家ごとの行事

初 午 旧暦2月初めの午の日で、農休日とするところが多いが、火伏せの行事を行うところもある。

川井では山椒の実をつぶして煮物を作っていた。かつては集落に足踏みの消防ポンプがあって、全戸に水をかけた。

滝原では、朝早く米の粉で繭の形をした「繭玉」を2個とお神酒・田作りを持ち、地元の稲荷の石の祠にお参りに行く。お参りがすむまでは、お茶も食事もとってはならないといわれている。



写真 18 桑原地区 初午

桑原では、主として当主が朝早くおからく・赤飯・炒った大豆・煮干・孔開き銭を持って稲荷の石の祠に供える。帰りに前に供えてあった孔開き銭を一枚いただいて帰り、自在鉤に下げる。火伏せのためという。

間方では、各家で納豆を作る。12月28日に藁の束に大豆を蒸かして入れ、筵で包んで雪室に入れる。これを「納豆寝せ」という。初午には餅を搗き、この納豆で納豆餅を作って食べる。

滝谷には、金龍寺がある山の上に稲荷が祀られている。この日、「さん俵」に赤飯・田作り・炒り豆をいれて供えて参拝する。当主だけでなく、家族も同行する。ここでもお参りをしないうちは、お茶は飲まない。

厩祭り 厩とは馬屋で、馬を飼育している小屋をいう。一般には正月中に悪霊を祓う行事をするところが多い。猿は牛馬を守ってくれるとされ、猿が牛馬を引いている絵札を貼ったり、猿の頭蓋骨を飾るところもある。

町内でも、農耕馬が飼育されていた。川井では2月に蕎麦粉で直径5、6センチほどの平たい「まぐそ団子」を作り、これを煮た煮汁を馬にも与えた。そのため「まぐそ祭り」ともいわれた。今は馬を飼育していないために中断している。

馬頭観音の頭上には馬の彫り物があることから、馬の信仰とも結びつき、町内にもかなり見られる。

滝原には馬頭観音の碑がある。祭りは行っていない。滝谷では、かつて個人で磐梯町の厩山の馬頭観音にお参りに行った。

土用の丑の日 夏の土用の丑の日で、一般には「う」のつくものといって、鰻を食べることが多い。当町の只見川では鰻は捕れなかったので、多くはうどんを食べた。

子安地藏尊 地藏は童子の姿をしてこの世に現れて苦難を救ってくれるといわれることから、子安地藏の信仰も広まった。

川井では、松音寺前の道路わきに祀られている。子授けと子育ての守り仏で、子どもができない人でもお参りするとかえられるといっ、遠方からも訪ねてくる。



写真 19 川井地区 子安地藏尊

滝谷には、金龍寺の外に子どもの身丈ほどの石造子安地藏がある。子どもが夜泣きをすると菓子を上げて祈願し、止まると肌着やよだれ掛けを作って供えた。子どもが身につけていたものを供えることもある。

早戸の石坂の山際には、岩をくり抜いたところに地藏が祀られている。「夜泣き地藏」といわれ、夜泣きする子どもを連れてきて、団子か菓子を供えると直るという。また、地藏の被りものを借りて被せるとさらに御利益があるという。お礼参りは倍返しで、もう一つ新たに作って供えることもする。

金毘羅様 香川県の金刀比羅宮を総本社とする。漁師の信仰が厚く、全国的に祀られているが、町内にも碑がみられる。

滝原では、山の中腹にある石の祠に祀られている。かつて春から秋にかけて、只見川では木材を筏に組んで前後に2人が乗り、新潟県の津川まで運んだ。途中には急流があり、岩などにぶつかり、筏の綱が切れて犠牲者も出た。また、洪水もあった。このようなことから祀ったと考えられている。現在、神事はもとより、お参りすることもなくなった。

出羽三山講 三山信仰は、山形県の出羽三山神社を総本社とし、県内にその碑は大変多く、講もあり、代参もする。

西方や宮下では、有志で本社にお参りをしている。神社から牛の絵札を受けてきて、これを玄関に張ることもする。

疱瘡神 天然痘除けの神である。

間方の下居平にある「疱瘡清水」は、天然痘の治療に効くとされ、この名がある。

馬頭観音 桑原で農耕の牛馬を飼育していたころは、牛の絵を書いて、牛馬の小屋に母屋を向けて張った。牛馬が家に来るようにという。



写真 20 桑原地区 出羽三山神社の牛のお札

道祖神 疫病などの悪霊除けとして、石造を村境の道路わきに祀るところは多い。男女二人が並んだ双体道祖神は関東に多く、当町などはその北限とみられている。

双体道祖神は、町内には間方の伊豆神社の近くと、浅岐と大谷の境、それに高清水の3ヶ所にある。男女双体であることから縁結びや夫婦円満の神として、高清水では耳の病の神としても信仰されている。また、浅岐と大谷境の道祖神には、結ばれなかった男性が、自分と恋人の姿を自ら彫ったものという、悲恋の伝説が伝えられている。

## (5) 結 び

信仰は五穀の豊穰や無病息災を祈願し、長寿と子孫繁栄をかなえることが第一義であるが、町内の講を見渡しても、山の神講や庚申講のように男性だけによるもの、桑原の百万遍のように成人男性と子どもによるもの、観音講のように女性だけによるもの、さらには年中行事の鳥追いのように子どもの役割になっているものなどさまざまある。これらは集落内での交流と親睦を図る場にもなり、一部には娯楽的な要素もある。ことに女性の講は、苦労や悩みを相談する機会でもあり、事実、先輩からさまざまな智恵も授かった。

人は、一人では生きられない。互いに絆を深め、思いやりの心を持って、ことあれば支え合わねばならない。講などの信仰行事は、祈願に加えて、それを育む場でもある。これが集落づくり、町づくりの原点であるといっても過言ではない。まさに祖先が子孫に伝えてくれた智恵で、これらを受け継ぐことが、厳しい世を生き抜く道でもある。

(文責 懸田弘訓)

## 第4節 河岸段丘と豪雪地帯

### (1) 三島町の地質概要

本町は東北地方の日本海側に属し、黒鉱に代表されるグリーン・タフの地域である。

先新第三系を基盤岩とする地質年代から第四世紀の現在に至るまでの約千万年を超える長期の地質活動が随所に残っている。中でも顕著なものは海底火山活動時代である。

下記に示すように、只見川北岸の噴出・熔解の火山灰由来の凝灰質安山岩ないし凝灰質砂岩、凝灰質礫岩・凝灰質角礫岩の堆積。只見川南岸に発達する。火成岩に関わる安山岩ないし流紋岩。花崗岩類は滝谷川以東に発達している。

地史地形的には後述の河岸段丘の模式的な発達が見川両岸及びその支流に見られる。

黒鉱の胚胎は火山噴出の際の接触鉱床として捉えられている。北部の杉峠金山や三坂山金山または早戸の安山岩の柱状節理に浸入していた硫黄等の鉱石も見られる。

また、沼沢火山に由来する軽石層の堆積分布は五千年内外の大噴火の痕跡を各地の遺跡に残し、赤土と呼ばれる層を形成し鍵層となっている。

また、宮下集落の東端から大谷川にかけて発達している宮下層と称する泥岩層には多くの生物化石を含有し、当時の海底の生物を探究する絶好の環境を現出している。

河岸段丘については、後述するが平坦面は古代から生活の舞台として、産業経済はもとより集落の形成・交通の発達に大きく関わり町発展の自然要件として保存利活用されている。

### 1) 地 質 区 分

#### I. 只見川北岸

- ① 早 戸 滝 原  
(玉梨層、石英安山岩)
- ② 高清水 三坂山  
(輝石安山岩、沖積堆積層)
- ③ 名 入 高尾原  
(段丘堆積、扁平pumice)
- ④ 大石田 中 野  
(段丘堆積)
- ⑤ 西 方 岩倉山  
(段丘堆積、噴出流紋岩)

#### II. 大谷川流域

- ① 宮 下 倉掛谷  
(宮下層、泥岩)
- ② 桑 原 大 谷  
(沖積堆積層)
- ③ 浅 岐 間 方  
(第四紀堆積層、貫入火成岩体)

#### III. 滝谷川沿岸

- ① 川 井 大 登 (段丘堆積層)

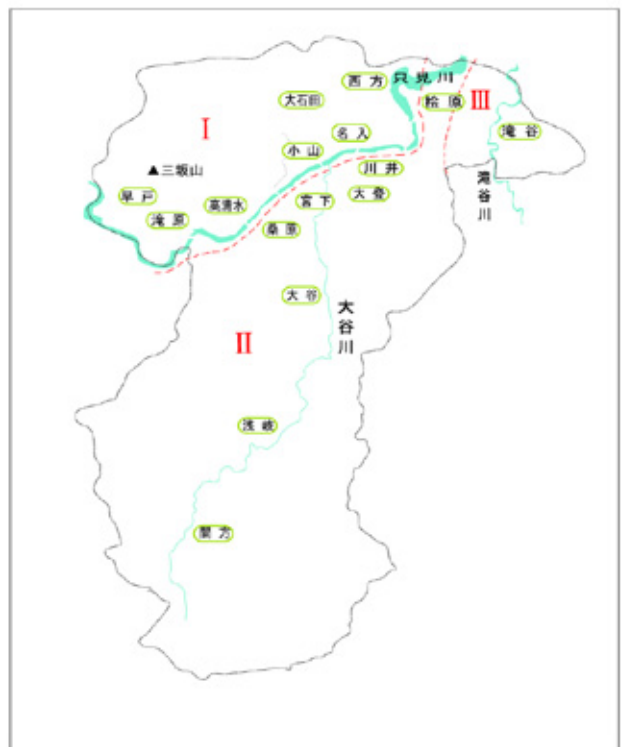


図 10 三島町地質区分



## ② 滝谷 湯ノ岳（紫蘇輝石安岩、沖積火山堆積層）

### 2) 地 層

同じ成分の土砂岩石は、大部分横に広がって層状になる。この広がり在地層という。この地層は、普通幾重にも重なり、臨検地点によってその重なりに特徴がみられる。

#### ①宮下層

石英安山岩や火山碎屑岩の玉梨層の上部にある、化石を含む泥岩層が特徴。倉掛川にみられる、黒灰色のあの巨大な露頭である。岩質が柔らかく彫塑しやすい。

入山沢凝灰岩とは同時異相の関係にある。倉掛川による浸食が激しく右岸の傾斜面は現在も進行中である。鉄橋下の俗に「赤岩」と呼ばれている岩は、この岩の表面が酸化して赤っぽくなっている為である。

#### ②西方層

三島町西方を模式地とする本層は、主として火山礫凝灰岩。凝灰角礫岩。緑色浮石凝灰岩。砂岩。泥岩。またはそれらの、混合互層からなり、上下側方に岩層が変化している。層厚約 300 m で南にいくほど薄くなる傾向がある。俗に「白岩」と呼んでいる露頭は緑色凝灰岩で海底火山に由来する東北地方の日本海側に特徴的な岩層である。（高尾原堆積層）

白岩凝灰岩層とともに、忘れられない層で赤谷川の南側に 10 m 以上の堆積崖を作っている。七折坂層に対比する火山砂礫層である。（早戸輝石安山岩層）

J R 只見線の早戸駅を降り早戸温泉に向かうと、左手にとんでもない黒ずんだ巨大な岩壁が目に入る。これは沼沢火山に由来する輝石や紫蘇輝石を含有する安山岩で、本町の基盤岩の一つである。

#### ③入山沢凝灰岩層（模式地 三島町浅岐入山沢）

柳津町の胄中・琵琶首にとり囲まれた地域に広く分布し中心部層厚は 750 m 程だが、南部では下中津川層、また北部では西方層に不整合に覆われ薄くなる。中央部では、一部が西方層と同時異相の関係になる。

岩層は主に緑色凝灰角礫岩からなり一部に流紋岩溶岩・火山礫灰岩および細粒凝灰岩を挟んでいる。角礫は赤紫の安山岩・流紋岩・火山礫凝灰岩等である。

西方層もそうであるように、安山岩質の火山凝灰岩の層に、流紋岩の貫入がみられる特徴がある。

#### ④滝谷凝灰岩層（三島町滝谷集落）

基盤岩の上部、入山沢凝灰岩層相当の粗粒亀裂をふくむ岩層で、柳津町西山方部に連なる層である。



図 11 高山の地質

### (2) 段丘の形成と浸食

只見川は本町付近で河岸段丘を模式的に形成する。これらの段丘は第三紀中新世から始まった氷河期・間氷期の気候変動と地殻変動によると考えられ、藤峠層や和泉層の形成時に相当し、年代的には五千万年前か

らと推定される。

山間地にとって平坦地はそれだけで価値のある地形である。家を建てるにしても、水田を作るにしても、平地は天恵の佳境である。対岸の檜原から西方方面をのぞむと集落のある居平を最上位として中田・沼田・中舟渡と続き、見事な段階状の景観がみられる。

実はダムに埋没して船場の最下位平地があり、これは只見川でも五段の模式的河岸段丘である。大きな大登段丘には白岩の露頭が、移表の段丘には宮下ダムの岩場が、それぞれに対応してレフ板の役目をはたしているし、西方居平には稲荷の丘や銭森のような残丘が上流面に大きな岩の障害をみせている。

段丘構成物の大半は、安山岩質・流紋岩質・火山岩質の岩石乃至その変質・変性または碎屑物等で沼沢火山の溶岩や噴出物が多い。沼沢火山の活動の終期が五千年前と推定されておるので、これの含有量は各層の鍵とされている。

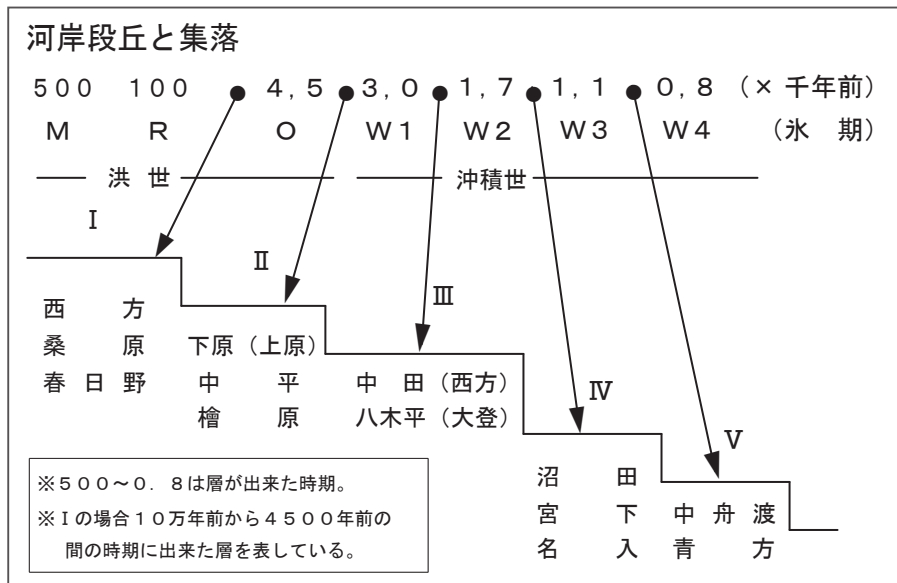


図 12 河岸段丘と集落

河岸段丘は居住性、水田耕作、に適しているばかりでなく、J R只見線の開通、国道 252 や 400 号の敷設を容易にしている。

リスクとしては段丘の積載物の主たるものが砂礫であり火山灰であるので、地盤が軟弱で風雪や水の浸食を受け易い。しかしこのことも自然の造形美の一因をなしている事を忘れてはならない。早戸温泉の巨岩と観光船がもたらす溪谷美、志津倉山の雨乞岩の雪食風景・美坂高原の緩斜草原など町の風光景観は、来訪の皆さんから心からの絶賛を浴びている。

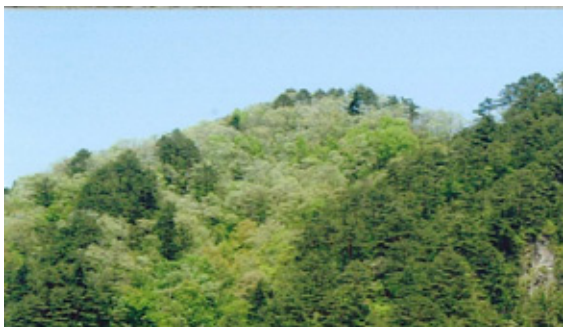


写真 21 雪食地形

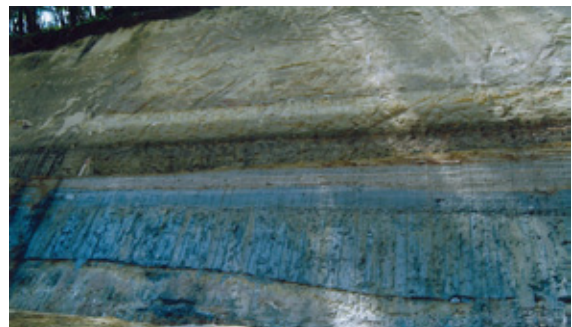


写真 22 河岸段丘の堆積層

### (3) 河岸段丘に広がる文化

本町は寛文風土記では「金山谷」の名をもつ地域に属する風土で、昔から天然資源に恵まれていた。近代

に至っては度々天領として江戸幕府の財政を支援し、戦後の国の復興にあたっては、水力発電による電力の供給地として、お国の産業経済を支えてきた。

黒鉱に関わる金銀等の採掘は、東北地方の地殻の形成史に関わっている。すなわち黒鉱の胚胎は海底時代の火山活動による熱水作用と言うのが定説である。

これによって、柏木山の杉峠・美坂・志津倉・滝谷に金山。早戸に硫黄。また段丘は排水性にすぐれコゾウ・ミツマタ等の和紙の原料植物が自生している。

またアサ・カラムシ・アカソ・クワ等の繊維植物も古くから栽培加工されていた。

アサや煙草は現在栽培禁止植物になっているが、藩政時代までは藩の自由裁可であった。

養蚕は上族期間が短く年四回も収穫されるので各地で営まれていたが、桑の生育のよい所が選ばれた。マタタビ・ブドウツル等の編細工・藁ヒロラとは農生活の必需品で、農閑期や外仕事の無い冬期間の時間の活用である、隣近所男女年齢を問わず所定の小屋などで長は短を導き、無題の社会評論乃至は政治論議を展開する。尊徳流の「いもこじ」だ。

手足の疲れや咽喉の渇きも覚える頃、かぎの鼻の大根や芋なべが、いい按配の味を染ませて一ぷくとなる。

全国的な産物として漆器があるが、漆器づくりは藩政時代からの禁制品で、一般には、蠟燭づくりと木地だけでこれも自家用としては最低数をのこすのみで殆どは上貢品であった。現在では(木うるし)取りが少々見受けられる程度である。

現在町で力を入れているのは、桐である。種根をそだて本島に適性な養分培養をほどこし、三十年以上の肥育には気の許せない目配りが大切である。ある桐の名人は言う。「桐に一番いい肥やしは人の足跡だ」と。病気や害虫は葉や枝がしらせる。長い年月である。台風も来る。大雪の年もある。

#### (4) 豪雪地帯に生きる

東経 139.38 北緯 37.28 の当町は会津地方の北西部と新潟県との接点にある 90.83 平方キロの小面積の町である。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
三 島	-2	0	2.5	9.2	15	18.2	22	25	20	12.5	5.2	0.2
会津若松	-1.2	-0.7	2.5	9.5	15.5	19.2	23.4	24.4	19.7	12.8	6.8	1.6
只 見	-2.5	1.6	0	6	18.5	18.8	23	24	24	13	7	1

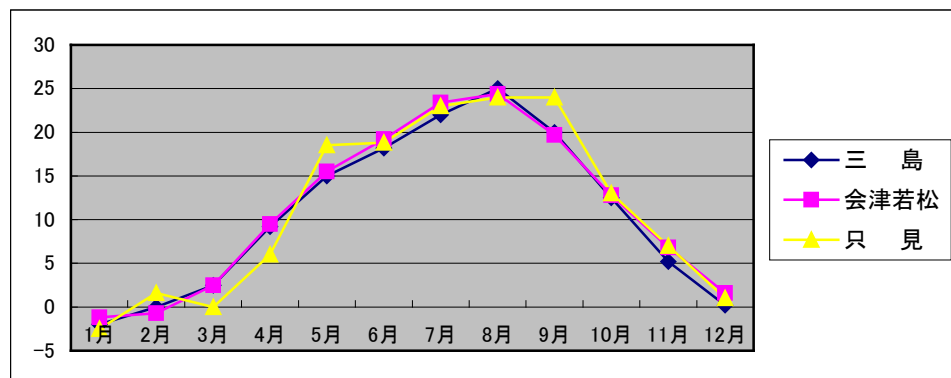


表 4 年平均気温と平均気温の折れ線グラフ

町の大半は高度 200 m から 1200 m の山地にあり、位置からみても北日本の日本海側気候帯に属し、気候の変動が大きい。急激に夏がきて、真夏日に汗し、忽ち紅葉を観賞し霜となり、降雪を迎える。つまり春秋はうすく夏冬はながい。と言いたい所だが夏もまた短いのが実態である。従って極低温のシベリア気団が居すわり北西の季節風が発達すると思いがけない大雪となり、豪雪地帯の要因をつくる。かつて住民は、この積雪のリスクをうまく制御し低温生活に耐えてきた。

彼等は地球史的長い時間の中で、この豪雪を生活に活用することを考えはじめ白銀の世界を、思いで深い dreamland に変えてしまった。

#### 利雪・克雪

- そり              ○スキー              ○材木だし      ○薪木運び
- 雪なっとう    ●紙布さらし    ●川魚とり
- ◎雪遊び          ◎雪祭り           ◎風穴           ◎鳥追い

冬の作業と言えば、(除雪・廃雪) が頭にうかぶが、それと同時に春の準備としての作業がある。最近復活してきた、ザル・メケイ・スカリ・手カゴ等の編組物づくりをはじめ、ナワ・ミノ・ムシロ編みも雪どけと共に必要な用具の用意である。

以上の仕事はもちろん屋内に限られ、積雪期に運びこまれていた薪で暖をとりながら、気の合う友達を誘っての冬仕事である。

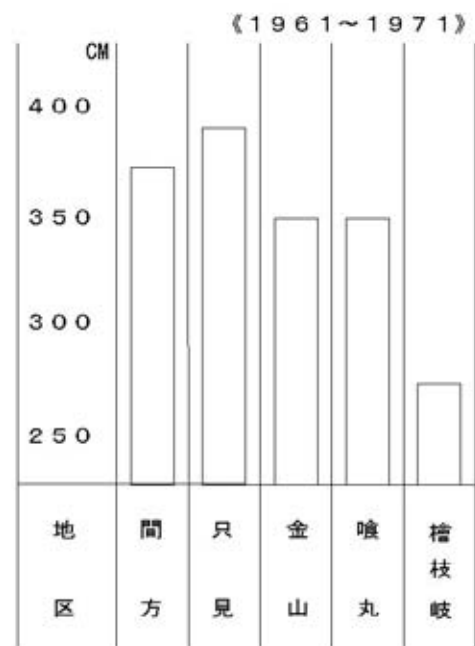


表 5 近隣の平均積雪深

#### (5) 生物との共生

本町は自然環境として、日本海側と北国と言うことと 200 メートルから 1200 メートルという局限空間を占めている。北よりに水力発電で有名な只見川が東に流れ、南の山々から大谷川と滝谷川が支流となってこれにそそいでいる。

従って植物なども温帯性の種が多くナラ・クリの広葉樹が主たる高木である。しかし山地や冷温地にはブナやオキナ草などもみられ、暖かな向陽地にはイタヤカエデ・カシワなども点在し錦秋の佳景をほしいままにしている。平坦面が少なく、山あり谷ありの起伏がこの様な多種小量の植生になったものと思われる。

1946 年の調査では次のような報告がある。

「三島町は冬季降雪量の多い地方で、いわゆる裏日本気候帯に属する地域である。そのため植物も、裏日本型の特色ある種類が多く例えば木本類では、ハイイヌガヤ、エゾユズリハ、ヒメアオキ、ミヤマナラ、ミツバツツジ、などが見られる。三島町の植生型として次に述べる 8 種類に分けてみた。ミズナラ、イタヤカエデ林。ブナ林、溪谷林。スギ林。なだれ地底木林。禾本草原。ケヤキ、アカシデ林。村落田畑。」会津美里町出身の植物学者馬場篤氏は「山間の集落では仕事の大部分が植物に関係した仕事であった。集落からおよそ 1km 以内が毎日の仕事場である里山といわれている範囲である。人の干涉によって維持されている自然である。」と里山の植生をみる。

#### 絶滅危惧種《植物》

フサタヌキモ (タヌキモ科)、ヤチシャジン (キキョウ科)、クグスゲ (カヤツリ科)、

キソエビネ（ラン科）、アツモリ草（ラン科）、スギラン（ヒカゲノカズラ科）、  
ホソバイヌタデ（タデ科）、ノジトラノオ（サクラソウ科）、ヒルムシロ（〃科）、  
ヒメサユリ（ユリ科）、サンショウモ（〃科）、コギシギシ（タデ科）、  
オキナグサ（キンポウゲ科）、ヒメコウホネ（スイレン科）、イヌハギ（マメ科）

#### 身近な動物

キツネ カモシカ ツキノワグマ ノウサギ ノネズミ イエネズミ  
ハクビシン イタチ  
シマヘビ ヤマカガシ カエル カラス スズメ ヤマガラ ウグイス

#### 身近な植物

オオバコ カゼクサ チカラシバ クサイ イヌフグリ イヌビュウ イヌタデ  
メシヒバ オシヒバ ナズナ スギナ タチツボスミレ オドリコソウ ジシバリ  
スズメノテッポウ シロツメグサ ガマズミ ミズキ ホオノキ ナラノキ キリ  
スギ アカマツ クロマツ ミズガヤ チガヤ ウツギ カンゾウ エノコログサ

（文責 小柴 七治）



## 第5節 町内の遺跡と荒屋敷遺跡

### (1) 遺跡を未来に

「遺跡」とは私たちの祖先がこの地で生活を営んだ跡である。そこにはかつて祖先たちが住んでいた家の跡やその当時使われていた道具などが埋もれている。また、地上に現れていて私たちが目の当たりにできる城跡や砦跡なども「遺跡」のひとつである。三島町の数百、数千、数万年前の歴史が、このような「遺跡」の中に今も静かに眠っている。私たちが現代と未来を生きる、その生き方の指針が実は「遺跡」の中に隠されているのである。

今、私たちは三島町の文化財、特に私たちがこの地で守り、伝えてきた「民俗」を中心に文化を再構築しようと考えているが、実は「遺跡」にこそ、私たちの祖先の「民俗」そのものが秘められているのである。忘れ去られた過去の「民俗」を町内の遺跡から掘り起こし、学んでいくことは極めて大切なことである。ひとたび私たちが建築工事や土木工事を行い、地面を掘り返すと、これらの遺跡は破壊されてしまう。そのような時は、専門家による発掘調査を実施して、埋もれているものを正しく掘り出し、記録に残して、この三島町の歴史を明らかにしていかなければならない。

一度壊してしまった遺跡は二度と元には戻らない。埋もれている三島町の歴史を、未来に生きる子孫たちに伝えるためには、これらの遺跡を今生きている地元の人たちが大切に守っていく責任がある。

また、遺跡はこれまですべてが見つかったわけではない。ほとんどの遺跡は畑を耕したり、土を掘り返した時に、たまたま土器のかけらや石の道具などが見つかった場所を登録したものである。だから、まだ草木に覆われて開拓されてない場所やたくさんの土砂に覆われた深い地中に、新しく遺跡が発見される可能性はおおいにあるのである。遺跡として知られている場所以外で昔の器のかけらなどが見つかったら、今後その場所も遺跡登録した上で、地元の方々が守っていく必要があるし、そのような場所を町民みんなでつけていく取り組みも重要なのである。

◎遺跡を守り、未来へ伝える大切さをそれぞれの地区で考えていく。

### (2) 三島町の遺跡

#### 1) 三島町最古の土器

三島町内の遺跡で、今のところ最も古い時代のものは縄文時代の遺跡である。中でも『三島町史』に掲載されている川井の佐渡畑遺跡から出土した土器の尖った底部は今から約8,000年前の常世式土器と呼ばれるもので、少なくとも三島町域に暮らした“住民”の足跡はこの頃からうかがうことができるのである。



佐渡畑遺跡から出土した縄文土器の底部

写真 23 佐渡畑遺跡から出土した縄文土器の底部

#### 2) 沼沢山の噴火

三島町内では上記の土器以外、縄文時代以前の旧石器時代の遺跡、縄文時代草創期、早期、前期の遺跡が全く見つかっていない。これには隣の金山町にある沼沢山の噴火が深く関わっている。

今から約5,200年前、縄文時代前期の終わり頃のことである。沼沢山が大爆発を起こしたのである。山の頂上は吹き飛び、火砕流が発生し、火山灰が空を覆い尽くした。火山灰は偏西風に乗って、遠く猪苗代町でも数cm降り積もるほど被害は広範囲に及んだ。その後大雨によって、降り積もった火山灰は流されて只見川と阿賀川に集まり、大洪水をもたらして川の流域に暮らしていた人々の命と生活を奪ってしまったので



ある。

洪水によって運ばれた火山灰は現在でも数 m の厚さで流域に堆積している。縄文時代前期以前の遺跡は、この沼沢火山灰層の下に埋もれているため、なかなか発見できないものと考えられる。

### 3) 文時代以降の遺跡

縄文時代の後の、弥生時代の遺跡は若干存在するものの（荒屋敷遺跡、銭森遺跡）、不思議なことに古墳時代から飛鳥、奈良時代の遺跡は町内では見つかっていない。平安時代には寺跡が 1 ケ所であるが、未発見の集落跡があるものと推測される。中世になると館跡や社寺が多く、近世を経て、現在に至っているのである。

各集落に存在する各時代の遺跡は別表 1 三島町の遺跡の通りである。

小山、高清水地区には遺跡が無いが、狭い扇状地なので、縄文時代や古代の集落を形成するには適していなかった地形かもしれない。浅岐地区に遺跡が無いことは不思議である。縄文時代の遺跡立地に適した地区である。むしろ調査が不十分で見つかっていないのではないかと考えられる。今後、新たに発見される可能性が高いといえよう。

### 4) 町内遺跡の特徴

三島町の遺跡は 48 ケ所中、19 ケ所（40%）が縄文時代の遺跡である。この比率は、木の実を主食とし、狩猟、漁労活動しながら、自然と共に生きた人々が暮らしやすい環境がいかに整っていたかを示すものである。また、21 ケ所（44%）が中世の社寺や館跡である。これは会津の中世において、この地がいかに重要な位置を占めていたかを示すものと言える。つまり、三島町の歴史の特徴は、縄文時代と中世にあると言っても過言ではないであろう。

◎縄文時代の学習に適した環境である。

◎なぜ古墳時代から平安時代の遺跡が見つからないかを考えよう。

◎中世における会津地域の歴史学習に適した地域である。



写真 24 西方下館遺跡から出土した、地鎮祭に用いられた輪宝墨描土器（16 世紀）

### (3) 荒屋敷遺跡について

さて、三島町を特徴付ける縄文時代の遺跡の中で、発掘調査が実施されたのは、川井の佐渡畑遺跡、西方の銭森遺跡、大谷の中際遺跡、桑原の荒屋敷遺跡、間方の入間方遺跡の 5 ケ所に過ぎない。

その中でも、とりわけ多大な成果を誇るのが、1985 年から 87 年にかけて国道 252 号線バイパス工事に伴って発掘調査された荒屋敷遺跡である。この遺跡は三島町にとどまらず、福島県を代表する縄文時代晩期の遺跡であり、日本国内でも屈指の遺跡と評価されている。それゆえ、荒屋敷遺跡の出土品は、県指定重要文化財に指定されているのである。三島町の宝であり、福島県の宝であり、日本の宝なのである。この大切な宝を守り、未来に伝えていくこ



写真 25 荒屋敷遺跡の木製品出土状況

とは、三島町民の義務であり、使命であると言える。

### 1) 荒屋敷遺跡出土品の重要性

- ① 荒屋敷遺跡は縄文時代晩期～弥生時代初期にかけての遺跡である。縄文時代晩期後葉(今から約2,400年前)の木製品、植物繊維製品および漆製品が多量に出土したことで全国的にも極めて重要な遺跡として位置付けられる。平成14年(2002年)に県重要文化財に指定されている。
- ② 出土品の中で特に重要なのは、製作工程資料を含む漆関連資料(漆塗り土器、漆塗り土偶、漆塗り櫛、漆塗り耳飾り、漆塗りヘアピン、漆塗り糸玉、漆塗り垂飾品、漆入り土器、ベンガラ入り土器、漆付着石皿、ベンガラ付着磨石など)、木製品(弓、石斧の柄、皿などの容器、製作工程がわかる未製品)、植物繊維製品(縄、編みカゴ類、編み組製品)で、このほかに顔を描いた土版や家のようなものが線刻された石版などユニークな土製品、石製品もある。
- ③ 福島県において縄文時代の木製品、植物繊維製品および漆製品が多量に出土した遺跡は他に例を見ない。
- ④ 全国的に見てもこれだけの木製品等が出土した遺跡は稀で、縄文時代晩期の同様の遺跡として知られる青森県八戸市是川遺跡(国重要文化財)、新潟県新発田市青田遺跡(新潟県指定文化財)、縄文時代後期の東京都東村山市下宅部遺跡(東京都指定有形文化財)の出土品に匹敵する内容を誇っている。



写真 26 荒屋敷遺跡出土漆塗り土偶



写真 27 荒屋敷遺跡出土漆塗り櫛



写真 28 荒屋敷遺跡出土漆塗り糸玉

### 2) 収蔵環境

- ① 荒屋敷遺跡から出土した木製品、漆製品、植物繊維製品は、出土後直ちに福島県立博物館や(財)元興寺文化財研究所において、主に PEG 真空凍結乾燥法により保存処理が行われ、温湿度にデリケートな資料であることから、処理後すぐに県立博物館に寄託収蔵された。
- ② 一方、漆製品の中で、漆塗り土器や漆塗り土偶といった資料は、素材が土という理由で三島町に残され、旧西方中学校の空き部屋に保管されていたが、保管環境が悪く、資料の劣化が懸念されたため、県重要文化財に指定されている資料を中心に、平成22年から①同様、県立博物館に寄託収蔵されている。



写真 29 荒屋敷遺跡出土木製皿

### 3) 今後の収蔵・展示方針

- ① 三島町としては、近い将来、郷土の宝である荒屋敷遺跡出土品の県立博物館寄託を止め、同資料を町が独自に収蔵・保管・展示していくこととする。
- ② そのために収蔵・保管・展示施設設置を三島町歴史文化基本構想に盛り込み、計画的に実現を目指すこととする。



写真 30 荒屋敷遺跡出土石斧の柄

- ③ 保存処理を施した木製品・漆製品・植物繊維製品の収蔵・保管  
・展示環境には以下の基準を半永久的に保つ必要があり、施設・設備はこれを維持できるものとする。

- i) 温度 18℃～25℃
- ii) 湿度 60%以上、65%以下
- iii) 有害ガス（ホルマリン、アンモニア、酢酸）の除去

- ④ 荒屋敷遺跡出土品収蔵・保管・展示施設・設備は、町民の学校教育・社会教育・生涯教育に資するものでなければならない。



写真 31 荒屋敷遺跡出土コップ形木製品

#### 4) 文化財活用と産業振興

- ① 三島町は荒屋敷遺跡出土品収蔵・保管・展示施設の設置を通して、文化財を活用したふるさとづくりを目指す。
- ② 荒屋敷遺跡出土品収蔵・保管・展示施設・設備の設置に当たっては、三島町の産業を極力活かして低コスト、エコ、産業振興を視野に入れながら進めるものとする。
- ③ 上記を踏まえて、三島町の特産品であり、文化財保管に適すると考えられる「三島桐」を活用した施設・設備づくりを目指す。

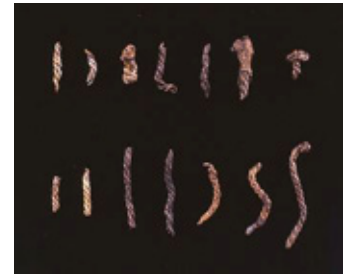


写真 32 荒屋敷遺跡出土縄

#### 5) 課題と今後の取り組み

##### ① 具体的目標

荒屋敷遺跡出土品収蔵・保管・展示施設の設置に当たって、「三島桐」を活用していくことは、産業振興と文化財の保護・活用、歴史文化を活かしたふるさとづくりをリンクさせた理想の形といえる。旧来の「箱物から」という行政観念から脱却を図るものとして注目もされよう。



写真 33 荒屋敷遺跡出土編み組製品

具体的には既存の建物を再利用し、壁面に二重に桐材を貼って断熱効果を高めて温度を保持し、桐材が持つ湿度を吸収・放出する特性を活かして収蔵スペース、収蔵ケース・展示ケースなどを製作することにより湿度を保つことができると考えられる。日本では古来より文化財の収蔵・保管に桐箱を用いてきた。その意味では伝統文化を伝承することにもつながる。



写真 34 荒屋敷遺跡出土丸木弓

また、温泉施設を利用することで冬期間の温湿度維持を効率化するというような発想も必要と考えられる。これは、高コストの機械に頼らず自然力を活かすエコの考え方とも合致する。

##### ② 桐の特性の分析と把握

一方、現在桐材については有害ガス、特に酢酸による文化財への悪影響が指摘されている。また、桐材が湿度を一定に保つという点においても具体的なデータが得られているわけではない。この点を克服するためにある業者（富士シリシア化学株式会社）では吸・放出剤（アートソープ）と有機酸吸着剤を桐材と併用するという方法を採用して収納保存用桐箱を生産している。

三島桐を活用した施設づくりは理想であるが、用いる桐材から悪影響があっては産業のマイナスイ



メージにもつながり、かえって不振に陥る危険も孕むわけである。

よって、この際、施設・設備づくりに当たって徹底的に「三島桐」の特性を分析していくことが重要と考える。

### ③ 将来へ向けて

もし、上記のような徹底分析が実現するのであれば、当然ながら荒屋敷遺跡出土品収蔵・保管・展示施設の設置にこのデータを文化財保存に活かすことが可能となる。さらにはその実績をもって、文化財収蔵に最も適した材として三島桐をアピールすることができ、国内はもとより、世界的文化財保管収蔵の需用に応える特産品として位置付けることが可能になるかもしれない。

◎郷土の誇りである荒屋敷遺跡出土品を町内に戻さなければならない。

◎そのため、収蔵・保管・展示施設設置を三島町歴史文化基本構想に盛り込み、計画的に実現を目指す

◎施設の設置は地元産業振興を念頭にリンクさせて考える。

## (4) 縄文の赤と黒

### 1) 衝撃の赤

1987 年秋、三島町教育委員会から発掘調査現場を見に来ませんか、と連絡を受けた。縄文時代の木製品が出土したという。早速、荒屋敷遺跡の調査現場を訪れると、そこは泥沼のような状況。横たわる木々に混じって、何やら人工的な四角いものや股木が見える。木の器と斧の柄だ。土嚢袋に渡した危うい板の上に腹這いになった調査員が、丁寧にそれらの形を露わにしていくな。移植ベラの先は泥と共に縄文人が食した多量のクルミやトチの殻をも剥いでいく。その先端がコツツと異物に当たる。道具を替え、水をかけながらハケで泥をひと掃きすると、「赤」が目に見え込む。漆だ。赤漆が塗られた土器片。その赤は現場でしか見ることのできない、つややかで鮮やかな、まさに深紅。しかしその直後、2400 年ぶりの空気に触れたその衝撃的な「赤」は・・・現代のくすんだ色に染まってしまった。

### 2) 漆のルーツ

かつて漆は中国から伝わり、日本はそれらを真似しつつ技術を高めていったのだろうと考えられていた。縄文時代の漆製品が発見されて以降も、中国揚子江下流域の河姆渡遺跡や跨湖橋遺跡から出土した約 7000 ～ 8000 年前の漆製品が最古と言われ、縄文の漆はその影響を受けたものとされていた。

しかし、近年北海道函館市垣ノ島 B 遺跡から約 9000 年前の漆を用いた装飾品が見つかった以来、縄文の漆が日本独自の技術として生まれ、育まれたとの見方が強まってきている。まさに Japan が漆文化のルーツと言えるのである。

最近の東アジア一帯におけるウルシの分布調査や DNA 分析結果によれば、中国揚子江流域の浙江省や湖北省のウルシと日本のウルシは全く別系統で、中国北部の遼寧省や韓国のウルシとは同系統であることがわかってきた（鈴木 2007）。一方、中国北部、韓国には漆液を採取したり塗布したりする縄文時代と同時期の文化は見られない。このことから、中国南部の漆文化と日本の縄文漆文化とはルーツが異なり、縄文時代以前に日本列島と大陸が地続きだった頃、中国北部に自生していたウルシが日本列島にも入り込んで自生し、定住化とともに縄文時代早期後葉に列島北部で利活用が促進され、独自の漆文化が成立したと考えられるようになってきた（岡村 2010）。



### 3) 縄文漆の用途

#### ①器に塗る

縄文時代前期後半（約 5500 年前）、漆文化は列島に拡がりを見せる。東北では山形県高畠町押出遺跡で赤漆を地に黒漆で渦巻文様を線描きした特殊な形の土器が多く出土している。漆は防湿効果と滅菌効果に優れている。この特質が特別な用途の器に塗られる要因だったろう。中期後葉（約 4000 年前）では田村市前田遺跡の近く（船引町北鹿又字向山地内）から出土した注ぎ口のあるヒョウタン形の土器に漆が塗られている。これは漆と液体との関りを想定させる。後期前葉（約 3800 年前）の新潟県胎内市分谷地 A 遺跡では木胎の黒漆塗容器と赤漆塗容器がセットで出土しており、内部からヤマグワ、ニワトコ、サルナシなどの種子が検出されている。これらは発酵すればアルコールを発生させる果実である。また、後晩期にはやはり注口土器やその液体を受けると考えられる浅い小型の土器に漆が多用される傾向にある。

このように漆が塗られた土器は、果実酒や滋養飲料などの特殊な液体と何らかの結びつきが予想されるのである。

#### ②装飾品に塗る

漆塗りの櫛は、縄文時代前期、石川県七尾市三引遺跡から最も古いものが出土している。その後、縄文時代を通して漆製品を出した多くの遺跡で櫛は見つかり、その豊富さを物語っている。

ウルシの木は傷付いた箇所を癒すために樹液を滲出させる。それは自らの身を守る現象である。装飾品に漆を塗る行為はここに繋がるのであろう。

櫛は結歯式と呼ばれる、複数の歯を根本で編み連ね、この部分を木屎漆で塑形し、黒漆と赤漆を重ね塗りするという高度な技法で作られるものが多い。ヘアピン、耳飾り、腕輪、ペンダントなども同様な技法が用いられるとともに、胎に樹皮や編み組材を用いるなど、さまざまな技法が駆使されている。

漆塗り糸玉と呼ばれる、植物繊維を撚った糸に 1 本 1 本漆がかけられ、数十本を束ねて連続した結び目を施していくという製品は、前期から晩期にかけて東日本の数カ所の遺跡で発見が相次いでいる。髪飾りや首飾りなどの装飾品と考えられるが、結び目で意思伝達をした「結縄」との解釈もある（小林 2001）。

#### ③示威具に塗る

男性だけが持つと考えられる弓にも漆が塗られる。東京都東村山市下宅部遺跡には漆が厚く塗られた飾り弓もあり、実用とは考えられず、狩猟に伴う儀式用であろう。一方、三島町荒屋敷遺跡の弓のように薄く塗られた実用の補強と考えられるものもある。これは防水効果を高めるものと考えられるが、護身の意味があるのかもしれない。

### 4) 縄文漆の特徴

#### ①採液から塗布まで

縄文時代の漆製品が出土した遺跡では、樹液採取から精製、添加物の採取、顔料添加、塗布、彩文という一貫した作業を基本的に一遺跡（集落）で行っている。下宅部遺跡での掻き傷のあるウルシ、荒屋敷遺跡の漆液を濾した布、その他ベンガラ（酸化第二鉄）、ベンガラ粉碎用石皿、朱（水銀朱）、磨石、各種パレット、製品各種などがそのようすを物語っている。ただし、未だハケは見つかっていない。

製品は近隣の遺跡に配られた可能性もあるが、むしろ拠点的な漆製品生産遺跡はそこ自体が重要なマツリ場であった可能性もある。

縄文時代の漆の特徴は、誰かのために作るのではなく、あくまで自分たちと自分たちの祈りや願いのために用いられたという点を挙げることができるだろう。

#### ②赤と黒

唐突ではあるが、死んだ人と同じように目を瞑ってみよう。目を瞑って太陽を仰ぐとまぶたの裏には真っ赤な世界が映る。まぶたの血管を透かした色が網膜に映るのであろう。一方、木陰や暗がりでは目を瞑ればそこは黒の世界である。目を閉じた世界に赤と黒が存在する。まさにこの二元的配色で漆製品は構成されている。

目に見える血の赤も生命そのものの色だろう。赤い血液がいのちを失っていけば黒に変化していく。赤が生命の象徴であれば、黒がその抜け殻あるいは生命を失ったものの象徴とも考えられる。しかしながら、この2色は二元的でありながら、重層的で、交互に繰り返し変化するものらしい。

押出遺跡の漆塗りの土器。赤っぽい地に黒く渦巻が描かれている。向山地内から見つかったヒサゴ形注口土器の渦巻文は、赤と茶色の漆で塗り分けられている。新潟県分谷地A遺跡の2つの木製の器は、似た形でありながら、赤漆のものと生漆のものが対照的に作られている。荒屋敷遺跡や新潟県青田遺跡、また青森県の著名な亀ヶ岡遺跡や是川中居遺跡など、いわゆる亀ヶ岡文化の漆製品は、最も完成された姿として、さまざまな手法で赤と黒の対比を表現している。

これら赤と黒の対比は、単にきれいだからこのように仕上げられたわけではないであろう。そこには深遠な精神世界が見て取れるのである。

縄文土器の文様を見てみよう。土器に付けられた文様は単なる模様ではない。調理を行う土器・・・その中には人間が奪った自然界のさまざまないのちが入れられ、水が張られ、火にかけられる。やがて火のチカラで、中の亡骸は息を吹き返し、グツグツゴトゴト声を上げ始める。そして人間のエネルギー、まさにいのちの源として土器の中でよみがえるのである。土器はいのちを再生させる、いのちを産み出す「母」であり、そこに描かれる文様は、その機能を全うさせるための呪文、あるいは符号と考えられる。

このように土器の文様を考えると、土器に塗られた漆の赤と黒も、その意味するところが通底してくる。新しいいのちというものは、いのちを失ったものから生まれ出てくる。つまり黒から赤が生まれ、やがて赤は黒へと帰って行くのである。赤の中の黒、黒の中の赤、そして赤に覆われた黒。それぞれの漆製品がこのようないのちの繰り返しを意識した深い精神性の元に作られ、使われていたのであろう。

## 5) 縄文漆のチカラ

縄文人はウルシという木の持つチカラを常に見ていたであろう。その木は傷ついた時、自ら体液を流してその傷を癒していく。「再生」のチカラである。

縄文人が身に着ける櫛やヘアピン、腕輪、耳飾りなどの装身具や男が狩りに使う必需品である弓に込めた願いはおそらく「身を守る」ということであつたろう。これらに漆を施すことで、漆の再生のチカラを宿したと考えられるのである。

また、「いのち」を失ったものが再生するチカラと、新たな「いのち」を生み出すチカラ。これも赤と黒という二元性を加味しながら、縄文人の世界観を漆製品に表現しているといえる。塗り重ねという手法は三次元的観念ですらある。

さらには、「防水」「防腐」「防虫」「防菌」というチカラも見落とせない。分谷地A遺跡の漆塗木製容器が果実酒造りと関係があるとすれば、漆の防腐効果がそこに欠かせない役割を果たしたのであろう。これもまた、酒という神がかり的な貴重な液体を産み出すために必要な殺菌のチカラと赤と黒の魔力が発揮されることとなる。

このように縄文人は漆の持つ根本的なチカラを知悉しつつ、そこに体系的な論理を重ね、新たないのちの誕生に結びつけて行つたのであろう。

## 6) 弥生時代以降の漆

縄文時代の後、弥生時代、古墳時代と漆製品は減じていき、それは会津大塚山古墳の靱に見られるように、主に権力者の威儀のために用いられるようになる。

さらに飛鳥、奈良、平安時代には、大刀の鞘など、やはり権力者の工芸品に用いられたり、建造物を彩ったり、仏像仏具制作に用いられるようになる。そして、この技術が地方に移転することでようやく漆は一般化するであろう。しかしながら、庶民が漆の器を持てるようになるのは、明治期以降の極めて最近であるといえる。

今、縄文人が知り尽くしていた本当の漆のチカラに、果たして現代人は気づいているのだろうか。漆の根源的チカラを見直すことこそ、会津の漆の再生に繋がっていくのではないだろうか。

(文責 森 幸彦)

表6 三島町の遺跡

集落名	遺跡番号	遺跡名	時代・時期	出土資料	縄文				弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	中世	近世	近代
					早	前	中	後								
宮下	26	宮下柵跡	中世・城館跡													
	49	上ノ山遺跡	中世・城館跡													
桑原	29	桑原遺跡	縄文時代中期～後期	縄文土器・石器												
	27	荒屋敷遺跡	縄文時代後期～弥生時代	縄文土器・石器・木器・漆製品												
大登	47	西海館跡	中世・城館跡	郭・帯郭												
川井	25	佐渡畑遺跡	縄文時代中期～後期	敷石住居跡・縄文土器・石器												
	30	川井林道遺跡	縄文時代後期	縄文土器												
	28	中平山館跡	中世・城館跡	郭・空堀・土塁												
	48	川井館跡	中世・城館跡	郭・帯郭・堀切												
桧原	4	小和瀬遺跡	縄文時代晩期	土偶(東京国立博物館蔵)、縄文土器・石器												
	15	丸山城跡	中世・城館跡	土塁・空堀・堀切・石室・見晴台												
滝谷	23	滝谷遺跡	縄文時代中期													
	17	藤沢遺跡	縄文時代晩期	縄文土器												
	16	岩谷城跡	中世・城館跡	土塁・虎口・本丸・二の丸・帯郭												
	39	滝谷一里塚	近世・塚													
大谷	32	中際遺跡	縄文時代中期～後期	縄文土器・土笛・石器												
	31	鳥海館跡	中世・城館跡	堀切・帯郭・腰郭・本丸・二の丸												
	※31	鳥海柵	中世・城館跡													
	33	薬師堂跡	平安・社寺跡													
	40	大谷一里塚	近世・塚													
	41	石上峠一里塚	近世・塚													
間方	34	美女峠遺跡	縄文時代	縄文土器												
	35	入間方遺跡	縄文時代中期～晩期	住居跡・縄文土器												
	42	美女峠一里塚	近世・塚													
	36	入間方木地師墓跡	近世													
西方	7	大林遺跡	縄文時代中期～晩期													
	13	稻荷原遺跡	縄文時代中期～後期													
	8	銭森遺跡	縄文時代中期～弥生時代前期													
	5	下館遺跡	中世・城館跡	空堀・土橋・虎口・土師器・陶磁器・古銭												
	6	沼田羽黒神社跡	中世・社寺跡													
	9	飯森山西照院跡	中世・社寺跡													
	12	鳴ヶ城跡	中世・城館跡	堀切・郭・櫓台												
	14	山神社跡	中世・社寺跡													
	37	元屋敷遺跡	中世・城館跡	土師器・陶磁器・中国陶磁・石風呂・銅製水滴・木器・漆塗腕												
	46	菅沼館跡	中世・城館跡													
大石田	1	持栗遺跡	縄文時代中期	縄文土器												
	11	大石田居平遺跡	縄文時代中期～後期	縄文土器・石器												
	20	高尾原遺跡	縄文時代後期	縄文土器												
	10	金岩山金秀院跡	平安・社寺跡													
	19	上古屋敷遺跡	中世	土師器												
	21	高尾神社跡	中世・城館跡													
	22	鶴巻ノ館跡	中世・城館跡													
	18	大石田木地屋敷跡	近世													
	38	三坂鉦山	近代													
名入	24	飯岡遺跡	縄文時代後期	縄文土器												
	45	飯岡館跡	中世・城館跡													
早戸	2	早戸(佐雄)遺跡	縄文時代後期	縄文土器・土偶												
	3	滝原遺跡	縄文時代後期	縄文土器・石器												
	43	早戸館跡	中世・城館跡													
	44	滝原館跡	中世・城館跡													
小山	登録遺跡なし															
高清水	登録遺跡なし															
浅岐	登録遺跡なし															



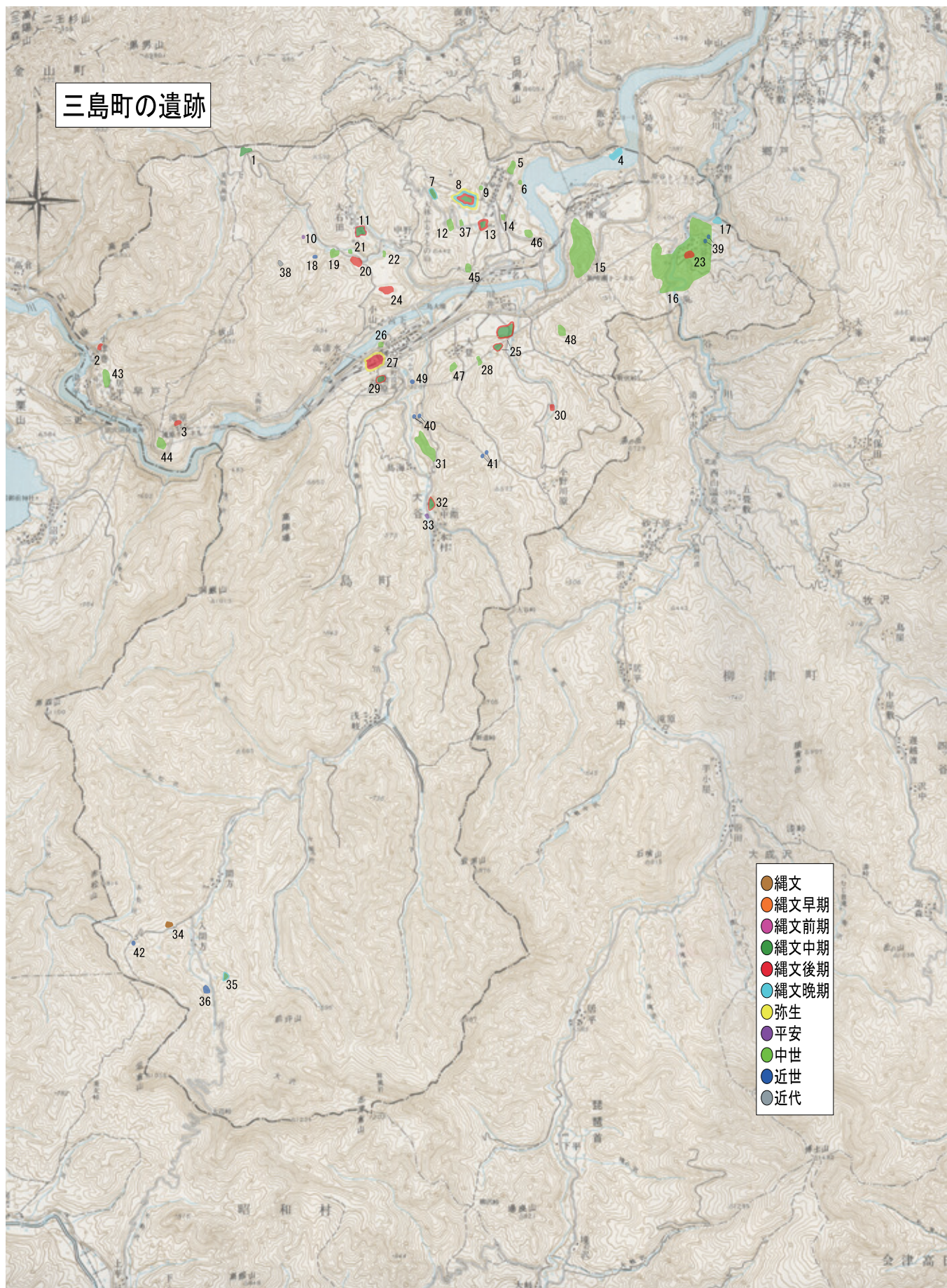


図 13 三島町の遺跡



## 第6節 三島の旧街道と文化財

### (1) 中世期の街道

三島町は古くから交通の要衝として知られ、西方・滝谷・大谷など、主要街道に沿う村は政治・経済の中心地として殷賑をきわめたことが知られる。中世から近世初頭にかけては、黒川(若松)蘆名氏と臣従関係にあった伊北山之内氏の居住地、横田と若松をつなぐ幹線道は川口・沼沢・宮下・滝谷など、山之内氏一族で固める村邑を通して蘆名領と相通じていた。この街道は伊北領主(城主)の通行する参勤の道であると共に、軍事や物資の輸送路として欠くことのできない施設であったことはいままでもない。滝谷は伊北横田から行程八里の距離にあり、山之内氏の惣領が若松に向かう折には宿泊地として利用したことが知られる。現在でもこの道筋には領主を警護するための関所(木戸場)跡が残されている。

西方は、伊北山之内氏の支城の所在地で、城下町として発展したといわれるが、さらに慶長のはじめ、越後上杉氏の会津移封に伴い、大規模な伝馬宿として整備されたのではないかとと思われる。村邑の形態は独特で、奥会津でも有数の規模をほこる宿駅構造が明瞭である。

### (2) 近世期の街道

会津藩政期には城下町若松を基点に、東西南北方向に幹線道が敷かれ、それぞれ白河街道・二本松街道・越後街道・米沢街道・下野街道と命名され、この5路線を「会津五街道」と称し、それぞれ宿駅・渡船場・関所(口留番所)・一里塚などを設置し、藩の道中奉行が支配した。一方、会津藩の預かり支配をうけた御蔵入領の幹線道にも宿駅・渡船場・口留番所・一里塚が築かれ、こちらは幕府道中奉行の管理下におかれた。それ故、支配の相違から、奥会津の宿駅や一里塚についての記事は、「新編会津風土記」には見られないが、これら施設が存在したことは明らかで、詳細は後述する。

### (3) 奥会津の公道

それでは御蔵入領内の公道について概観する。ただし下野街道は会津藩主の参勤交代路として利用され、会津五街道の一つにあげられているのでここでは略す。

- 1) 銀山街道 府下大町札辻を起点に、七日町・融通寺町・柳原から郭外に出て、下荒井・逆瀬川から軽井沢銀山を経て、大谷・浅岐・間方から美女峠・野尻・布沢の諸村を通して八十里越・六十里越から越後国に至る公道で、伊南・伊北街道とも呼んだ。
- 2) 伊北街道 越後街道気多宮宿より分岐して、柳津・滝谷・川井・宮下・沼沢・川口・横田・叶津を通り八十里越・六十里越から越後国に通る公道で、国道252号の母体。
- 3) 金山郷街道 府下大町札辻より下野街道を通り、大八郷より分岐して藤田・冑・博士峠を越えて小野川に至り、野尻郷に至る公道。現国道401号の母体。
- 4) 伊北越後街道 下野街道田島宿より分岐して、針生・山口・界・大倉を通して只見に至り、六十里越・八十里越を経て越後国に通る公道。後の国道289号の母体。
- 5) 沼田街道 伊北越後街道の宿駅山口より分岐して、古町・大桃・桧枝岐・尾瀬峠を越えて上州沼田領に通る公道で、上州街道・会津街道とも呼ばれた。国道352号の母体。
- 6) 西方街道 越後街道野沢宿より分岐し、牛尾・出原・黒澤を通り、柏木峠を越えて西方から金山谷郷に通じる公道で、御蔵入街道とも呼ばれた。現国道400号の母体。

この六筋の公道は全て脇街道であるが、会津五街道と同じく制札場・道標・一里塚・渡船場・橋梁・番所・宿駅・問屋・伝馬などの交通施設が整備され、諸国巡見使や御領巡見使の通路として用いられ、主要駅所に

は三本陣も仮設された。

#### (4) 街道の歴史の変遷

三島町を通る公道の歴史の変遷を概観しておく。只見川に沿って東西にのびる伊北街道は、中世期すでに政治・軍事の幹線道として機能しており、そのルートは山之内七騎党と称された一族の城館を縫うが如く敷設されている。近世に入っても街道の道筋は変わることなく、滝谷に入るには、岩谷城の中段に構築された墨門をくぐり、桧原に向かうには、同様に小館山にめぐらせた墨門を通り抜けなくてはならない。この施設は、街道の宿駅滝谷の最大の特徴となっている。幕藩の高官を警護するにきわめて有効な施設で、墨門を閉じ通行を遮断することにより、宿内の安全性が確保されたので、通行する高官の多くは滝谷宿を利用した。この街道は駒啼瀬峠を通ったことは、「新編会津風土記」桧原村の条に「伊北郷ヨリ府下ニ通ル道ナリ」とあり、川井の村中道が本道で、大登の村北から宮下に下り、左うつぼの断崖を経由して沼沢に向かった。この街道には寛文7年(1667)築立の一里塚が各地に残存している。明治に入って沼田街道と名を変えるが、その開修に関わる解説は後述する。

銀山街道は軽井沢銀山が有数の銀の産出を誇ったこともあり、蒲生氏郷をはじめ歴代の藩主の庇護のもとに整備され当時は殷賑をきわめたと言われる。この街道には会津五街道同様宿駅・一里塚などが構築され、その遺構は現在も確認できる。三島町への入り口は砂子原宿からで、現在廃村の小野川原から大谷へと通じている。大谷は近世期には大谷組郷頭の所在地で、村中で西方街道と合し、塩をはじめ越後の海産物などが集散する市街でもあった。村は街道の宿駅で、諸国巡見使の定宿泊地として利用された。宿駅については「大谷組地志書上帳」(文化3年)に「当村伊南・伊北への通りにて馬継に御座候、村中に御高札在之、砂子原村より当村まで壱里拾六町四十六間にて継ぎ、壱里参十式町式間にて間方村に継申候、村より十五町寅の方に当たり一里塚在之、村より南の方中ノ橋に一里塚有之候処先年川欠に罷成申候」同様に間方村の条にも「伊南・伊北への通りにて馬継に御座候、大谷村より壱里参十式町式間にて継ぎ、野尻組野尻村まで式里式町にて継送り申候、村より丑の方拾六町参十式間に一里塚有之、又村より申の方拾九町式拾八間に一里塚有之候」とあり街道の宿駅(馬次)であり、駄馬運送の算定に欠かせない一里塚の位置関係についても述べてある。この記述は「新編会津風土記」会津五街道宿駅村と同様の記述内容であることに注目したい。この街道は、会津の地名説話にもとづく神話伝説の道でもある。「古事記」の四道將軍東国派遣の記述では、大彦尊と建沼河別尊とが邂逅して会津の地名が生まれたとしてあるが、それぞれ北陸道と東山道から会津の豪族を攻め滅ぼしたとすれば、古代にはこれら官道から会津に通じる道の開かれていたことが分り、その一つが銀山街道であった可能性が高い(「沼田街道・銀山街道」歴史の道調査報告書・福島県教育委員会)。

西方街道は明治初年の命名で、西会津方面では古くは御蔵入街道とか金山谷道と呼んでおり、金山谷方面からは野沢道と呼んでいた。街道交通史の上からは、越後街道野沢宿から分岐して西方を経由し、川井・大登・大谷を経て美女峠・吉尾峠を越え、伊南伊北郷に達する大動脈の一部に位置付けされる。「野沢郷より伊南伊北へ通る塩駄賃取申候」(「御手鑑」享保十七年大登村)、「野沢郷より伊南伊北へ商塩通り申候、駄賃少々取申候」(同帳、大谷村)とあるのがそれを裏付けている。街道は野沢組黒澤村から柏木峠を越えて西方村と通じた。「新編会津風土記」巻之九十四黒沢村の条に「柏木峠 端村今和泉ヨリ未申ノ方ニアリ、登ルコト八町五十間余、麻生村ト峯ヲ界フ、金山谷ニ通ル路ナリ」とあり、現在の杉峠を経由したことが分かる。街道の麻生村との境界には口留番所が置かれ、今でも番所坂と呼ばれている。西方村は明治十六年作成の村絵図面によると、かつて検断屋敷の置かれた大規模な宿駅構造の村であったことが分かる。藩政期には筏番所が置かれ、また御蔵入領使用塩蔵が置かれ、また廃藩置県直前には若松民政局の西方分署が置かれるなど政治・経済の中核地であった。街道の通る名入村の渡船場は公道で「新編会津風土記」には「村南ニテ只見

川ヲ渡シ河井村ニ通ス」とあり、西方塩蔵からの塩荷はここで荷揚げされ大登・大谷・間方・野尻へと駅継ぎにより運ばれた。

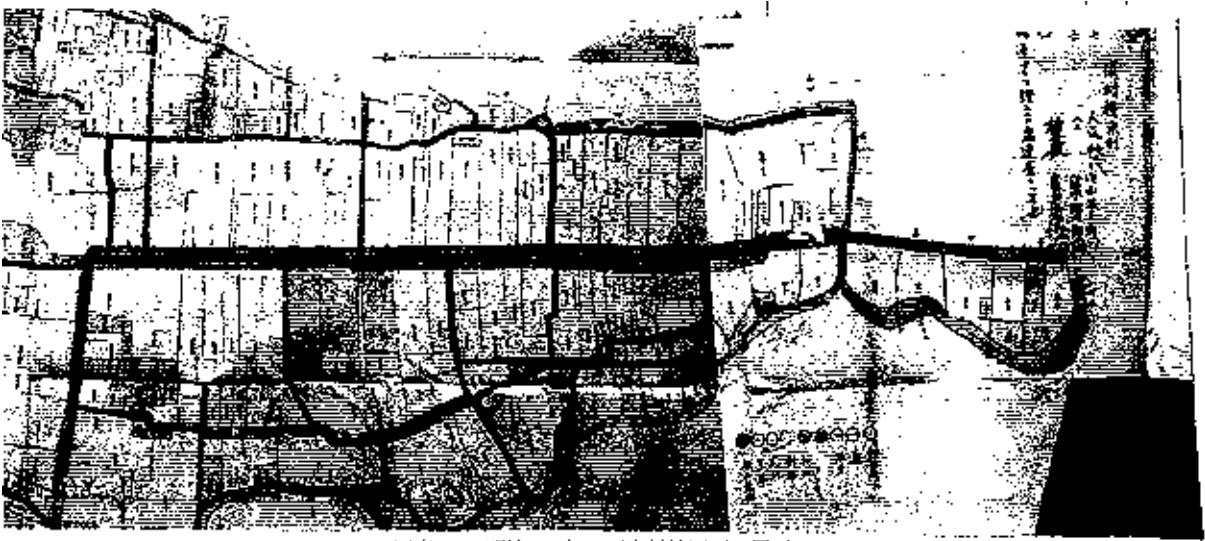


写真 35 明治 16 年 西方村絵図面一居平

#### (5) 街道の文化財

街道は人馬が往来し、物資を運搬するのに欠くことのできない施設である。そのため道は交通の手段として人間が開き、整備し、利用しやすくしたものである。道は人と人を、家と家を、そして村と村をつなぐ重要な役割を担っている。交通の要衝とされる至便な土地には早くから人が集まり、村や町を営み経済活動を行い、また自衛組織や軍事・防衛の設備(城・館など)も整い、地域の政治・経済・文化の中核地として繁栄したことは歴史の証明するところである。三島町を十文字状に通る上記三街道には多くの史跡や文化財が残されている。その代表的なものについて述べておく。

伊北街道の中核地滝谷村は、中世山之内氏の城下町として知られ、居城の岩谷城は明德元年(1390) 葦名の家臣井上氏の築城と伝えられる(「会津鑑」)が、永禄元年(1558)からは伊北郷の豪族山之内氏が支配した。近世期にはその子孫が滝谷組郷頭を勤中し、村は街道の駅所として繁栄した。山之内吉右衛門著「雑補弁略銘記」には、滝谷宿は城下より高久・坂下・柳津・滝谷と続き、塩野や大谷宿にも継いだことが述べてある。岩谷山金竜寺は臨済宗。文化年間に消失し、本堂の復興はまだなされていない。駒啼瀬峠の中段に一里塚が現存する。峠路は中世からの軍事路でもあり、各所に狼煙台、見晴台・番所跡が残存する。桧原山之内氏の居城丸山城は峠の北稜線上に築かれ、郭跡や縦堀などの地形(人工跡)が現在も明瞭に残存する。峠の頂上は滝谷組・大谷組の境界で、巡見使案内などの引継場に利用された茶屋跡があったと伝えられる。峠の麓は川井村で大石沢の街道筋には馬頭観音像・飯豊山塔・念仏供養塔・庚申塔などの祭祀場が多数残存する。曹洞宗長寿山松音寺は永享 12 年(1440) 僧鉄山により創建されたと云われ、境内の庚申塚は異彩を放つ。ほかに薬師堂には木造の薬師如来坐像一体を安置する。村は交通の要衝で、只見川を船渡しで継いだ西方街道と合し、ここから旅行者の大半は大登村から大谷村へ出て、銀山街道経由で伊南郷から沼田領に出た。また伊北経由で越後国に出る最短ルートに位置することから、会津藩の役人はこのルートを利用して中越の預り地支配を行った。大谷村の名主家にはその資料が残されている。享和 3 年(1803)「間方村書上帳」には「当村若松より越後六十里越江之通路に御座候」とある。伊北街道は大登村の北端八木ノ平の金鳥供養塔祭祀地から宮下村まで一直線に下り、大谷川を高欄付きの板橋で渡った。寛文七年橋のたもとに一里塚が築立されたが、川欠けにより消滅している。宮下村は三島町の中心地であるが、近世期には家数 40 戸足らずの小村であった。しかし街道を挟んで二字に町割りされた家並みからは、過去に伝馬宿であった可能性が窺われる。この



村は天正年間まで伊北郷山之内一族の支配地で、宮下大膳某が居館を開いて居住した。三島神社には市神も祭祀され、正月 13 日には初市が開かれる。この市が駅所などに継承される六斎市との関わりは無いと思われる。洞巖山宮昌寺は応永 18 年 (1411) の開基とされるが、「新編会津風土記」には慶長 15 年に創建したとある。境内には観音堂があり、傍らの青面金剛像は優れた彫像である。左うつぼ坂は天正年中に伊北山之内氏と伊達氏が激しく抗戦した地として知られている。只見川に沿う断崖絶壁のこの街道は、「会津正統記」によれば文永 7 年 (1270) に開通したとある。明治二十年代に開始される沼田街道の開修計画では、地形的に馬車を通す道には不向きとのことで、対岸の高清水村を通る街道と換線され、古代から続いた幹線道の使命を終えた。

銀山街道の駅所砂子原村から続く小野川原村は、現在は廃村となっているが、かつては街道に沿う交通の要衝で、川井村・大登村経由で西方村と通じ、交易の場として利用され、この街道を通じ地方の特産品麻織物・和紙・蠟などの荷が大量に輸送されたことが知られている。村の街道沿いには全国的にも珍しい青麻の供養塔を祀り、高価な商品輸送の安全性を祈願したものと考えられる。大谷組の郷頭居村、大谷村は古くから開けた交通の要衝で、この街道を通行した諸国巡見使の定宿泊地として知られ、村には三本陣が置かれ、幕藩の高官が多く利用した。曹洞宗円福寺は寛正 5 年 (1464) の創建で、江戸中期建造の本堂は十二間に七間、庫裡は六間に十三間の大きさを誇り、奥会津地方に現存する寺院の中では最も規模が大きい。村には古来からの民俗行事が多くこのこされ、中でも元和 2 年 (1616) より伝承される「愛宕様の火祭り」は県の重要無形民俗文化財に指定されている。街道沿いには一里塚の他、道祖神、馬頭観世音、庚申、二十三夜、道標などの石造文化財が多く見られる。浅岐村は出入口・西屋平・庭口・通口・遠背戸など中世の地名が多く残され、村全体が豪族の居館であったと思われる。美女峠の麓に位置する間方村は街道の駅所で、人馬の通行も多く殷賑をきわめたといわれる。「間方村覚書」「会津鑑」などによると、徳一創建の会津五高野の一つ、横雲山高野寺という古刹があり、その廃寺跡とされる一区も現存する。美女峠一里塚は原型のまま残り、野尻村前坂の一里塚も街道の左右に現存する。天明 8 年、諸国巡見使に随行した紀行文作家の古川古松軒は、美女峠の厳しい坂道を牛の背に跨り越えたことを「東遊雑記」に記し、さらに「この山は楓の木ばかりにて、人びとみな目を驚かせしなり。竜田・高尾とて昔より世に称せること、なかなかこの楓林には及ぶべきに非ず」と峠の景観についても賞賛している。

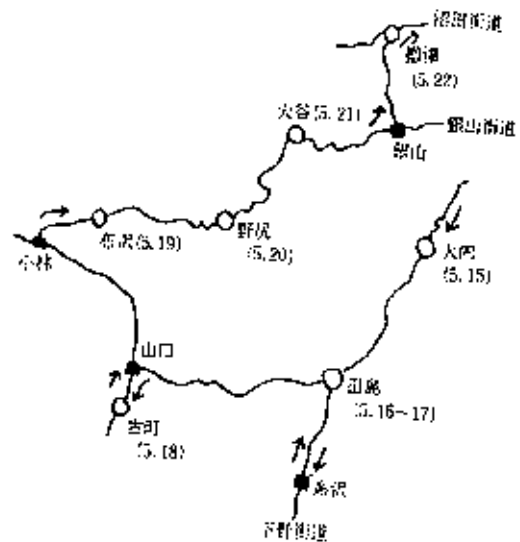


図 14 天明 8 年 5 月 諸国巡見使 (藤沢要人) 路程図

西方街道は現在杉峠とよぶ柏木山の鞍部を通り巣郷へと通じた。番屋坂から分岐する牛沢組麻生村との追分には、近世期築立の古い道標があり、現在は国道 400 号との別れに移築されている。村は街道の宿駅であったことが上名主二瓶家文書に記載されているが、その開始については詳らかでない。先述のように「新編会津風土記」にも記載はないが、「村中二官ヨリ令セラルル掟条目ノ制札アリ」との記述があり、また村絵図には幅員六間の広い往還の中央に宿駅常設の街渠が描かれており、かつて問屋場や検断屋敷も存在したことから、越後街道野沢宿や銀山街道大谷宿と継ぐ駅所であったことは間違いない。ちなみに「無枕雑補家宝記」「会津藩家世実記」天和 2 年 (1682) の記述によると、会津藩領・南山御蔵入領全ての宿駅に忠孝札・毒薬札・切支丹札三枚 (枚) を、「金山谷七ヶ所 西方・滝谷・砂子原・大谷・小野川・野尻・大石」に公費にて建立したと述べてある。曹洞宗宝沢山西隆寺は、永正元年 (1504) 開基、慶長 4 年の再興と云われ、寺宝に弘

仁二年銘の木造聖徳太子像を秘蔵する。村西山上に西方山之内氏の城跡があり、同氏の勧請と思われる伊夜彦神社、ほかに稲荷神社がある。村の特産品として和紙があり、「本組ノ諸村ニテ多ク製ス、此村ノ産殊ニ勝レタリトテ、総テ西方紙ト称ス」と新編会津風土記に紹介されている。民俗行事では土用に行われる「虫送り」が、隣接の名入村・大石田村と共に県の重要民俗文化財の指定を受けている。街道は中田から名入村に通じ、只見川を船渡して大谷組川井村へと渡る。また沼田から船渡して松原村を経て、滝谷組郷頭居村伊北街道宿駅の滝谷宿とも継ぐ。名入村の曹洞宗霊淵山龍昌寺は「会津正統記」に永享8年(1436)の開基とある。本尊は木造阿弥陀如来坐像で鎌倉初期の作で、村長の坂内宮内の寄進と伝えられる。また観音堂には藤原末期作と伝えられる木造持国天立像を安置する。

#### (6) 沼田街道の開修

会津三方道路が開通し、物産の交易が盛んになるにつれ、道路整備の必要性が急激に高まった。しかし路線が国、県道の認定を得なければ補助の対象にならず、改良は遅々としてすすまなかった。しかし明治14年(1881)8月の県議会で、伊北街道が里道一等から仮定県道三等に格上げされ、道路補修県費支弁の道が開かれた。同時に伊北越後街道・上州沼田街道も県道に格上げされ、この三路線を一本化して越後街道気多宮村を起点に、柳津・松原・川井・宮下・高清水・滝原・川口・横田・只見・小林・山口・古町・大桃・松枝岐を経由して上州沼田駅に達する全長三十二里二十四町の道程を「沼田街道」と命名し、全線を車幅二間の馬車道として整備する大工事が開始されることになった。平坦地の多い伊北越後街道は明治19年ごろには近代的な馬車道が開通したが、起伏の多い河岸段丘地帯の只見川沿いの工事は一向に進まず、人民の負担ばかり重なり頓挫の危機に陥った。そこで立ち上がったのが西川村の素封家渡部禎二、細川熊太郎、馬場庄平等で、私財をはたくなど、幾多の困難を乗り越え、最も危険な工事箇所川井村大飛戸・宮下村左うつぼ・西谷村ネタの換線を終え、明治24年に若松から松枝岐までの馬車道が完成したのである。この開修の一切を記録した「沼田街道開修顛末」には、沿線住民の生活程度や車道全通に寄せる期待と意義が記されているのでその一部を所収する。

「此の路線に沿う二千余戸の住民は、何れも山間僻陋の地に散在し、農業及び山野の業を専らにし活計を営むと雖も、半歳は積雪に埋もれて諸材を伐採し、また農産物を製造し坂下町に持ち出して、米塩其の他の日用品と替え輸出入をなすも、地勢天険の窮僻にして行路の不便なるがため、第一世上の風潮に遅れ、第二は売の物価安く買物は価高し、如何に勤力するも生計不足し糊口に窮し貧困に陥り、他の奴隷たるを免れずの不幸を來たし、為に産業興らず、教育を誘導するも授業ふるわず、依然太古の民たるを脱する能わず、皆これ道路の不便より生ずる処の不幸にして、沼田街道開修を要する所以なり」と生々しく開修工事の意義が述べてある。

### 第7節 三島町の生業と交易

#### (1) 生活基盤の特質

町域の87%を山林で占める三島町は、古来より農業生産に依存する生活体系にはそぐわず、林産資源を活用した生業に活路を見出し、また他産業に従事したり、出稼ぎなどで現金収入を得て、生活資金にあてるのが一般的であった。「我が西川村は土地広き割合に耕地に乏しく、水田は30町歩にすぎず、各字共に米の生産額は僅少にして、各種の事業により得たる大半は、皆米価として奪い去られ、之がため農家の副業たるべき養蚕業、林業は本業たるの感あり」(明治40年「宮下尋常小学校郷土誌」)。

近世期の古文書にも「当御領の儀は山郷の狭き地方にて、石高より人数多く、田畑すべて一毛作りにて穀

大谷組の村勢と産業の状況						
村 名	竈数	人口	田反別	畑反別	役漆木	産 業
川井村	58	282	9 町 4 反	24 町 7 反	1184	紙漉・養蚕・太布織
大登村	41	168	4 町歩	25 町 3 反	983	塩荷駄賃・紙漉・養蚕・太布織
宮下村	55	281	1 町 9 反	31 町 1 反	1422	紙漉・養蚕
桑原村	28	116	5 反歩	14 町 8 反	287	紙漉・養蚕・太布織
大谷村	77	353	3 町 2 反	40 町 3 反	1214	塩荷駄賃・紙漉・養蚕・太布織
小野川原村	13	41	1 町 1 反	12 町 8 反	85	養蚕・太布織
浅岐村	40	168	1 町 3 反	14 町 1 反	71	養蚕・太布織
間方村	38	160	3 町 4 反	26 町 7 反	5	鋤柄作り・太布織・養蚕
合 計	350	1569	24 町 8 反	175 町歩	5251	

表 7

取なく」と、当地方の産業立地の不利条件を的確に表現している。この分析は現在も享保の昔と、三島町の農林業と農村構造になんら変化のないことを明らかにしている。以下、それぞれの時代の生業の変遷を概観してみた。

## (2) 寛文風土記による滝谷組の生業

滝谷組には寛文 7 年 (1667) 書上げの「滝谷組風土記並金山谷寄」という貴重な資料が残されており、記載項目は地勢・村勢・産業のほか本途年貢・小役・漆年貢など数十項目に及んでいる。この中には稲の品種や畑作物の種類が記され、また産業の項では特産の和紙の売上高や、漆・蠟年貢の余得金高なども記載されていて、この時代の農民のなりわいの一端を伺うことができる。滝谷村の竈数は 30 で男女数 168 人。畑面積 27 町歩、田面積 4 町 5 反歩。畑作物は麻栽培が多く、大豆・小豆・大麦・小麦・粟・稗・蕎麦・黍・芋・大根・牛蒡・煙草など。他に和紙や炭焼の売上げ三両ほど。役漆木本数 419 本で余蠟代は十八両ほど。松原村の竈数 23、男女数 146 人。畑 59 町歩、田 3 町歩。畑作物は大豆・大麦・油荳・粟・蕎麦・芋・大根・煙草・胡麻が多く、麻・小豆・小麦・黍・稗・牛蒡などは少ない。役漆木は 1940 本で余蠟代は四十両ほど。他に和紙売上げ代金四両ほど。西方村の竈数 87 で男女数 398 人。端村沼田は竈 4、男女 28 人。畑 93 町歩、田 11 町 5 反歩で稲は早稲・糯稲少なく、晩稲の作付けが多い。畑作物は大豆・粟・蕎麦・大麦・芋・大根・煙草が多く、小豆・稗・黍・小麦・麻・油荳・牛蒡は少ない。役漆木は 1069 本で余蠟代は五十四両ほどになる。他に楮の紙漉きが多く三十両ほどの売上げがある。大石田村は竈数 59 で男女数 271 人。端村中野の竈数は 6 で男女数は 43 人。畑の面積 95 町歩で田は 4 町歩と少ない。畑作物では麻と煙草が多く、小麦・油荳・黍などは少ない。大豆・小豆・大麦・粟・蕎麦・稗・大根・芋などは普通作。役漆木は 625 本で余蠟代は二十四両程になる。他に紙漉きで七両程の売上げがある。名入村は竈数 17、男女数 115 人。端村小山の竈は 9 で男女数 52 人。同高清水は 10 竈で男女数 83 人。同飯岡は竈 2 で男女数 10 人。畑 48 町歩で田は 3 町歩と少ない。大豆・粟・蕎麦・芋・大根などを作付けし、小豆・稗・黍・麻・煙草・牛蒡の栽培は少ない。役漆木 1658 本で余蠟代は五十両程。他に楮の紙漉きも多く二十両程の売上げがある。

同帳記載金山谷郷 4 組の産業としては、「楮紙金 194 両・養蚕金 67 両・麻織布 139 両・炭焼金 5 両 2 分・煙草・胡麻・油荳代不定、皆之貢す」とあり、これらの収益金は全て年貢上納金として用いたことが知られる。

## (3) 大谷組の村勢と生業



大谷組には寛文風土記が欠けているので、享保 17 年 (1732)「大谷組覚書」により、滝谷組と同じ竈数・人口・田畑反別・御役漆木本数・主な産業を一覧に付すと次表のようである。但しこの目録には余蠟代金や産業項目の売上代金は記載されていないので、例えば余蠟代については、滝谷組の漆木本数を参考に類推していただきたい。宮下・大谷・川井・大登の各村ではおよそ五十両ほどと見込まれる。紙漉や布織などの余得もかなりのものと思われる。銀山・西方街道の駅所であった大登村と大谷村では、塩荷運送の余得も少なからずあったと思われるし、間方村には木地師の屋敷地もあり、鋤柄など木地製品の製作販売はかなりの額に達したと思われる。

いづれにしても、両組には田面積が少なく、年貢は川井村・西方村を除く各村は全て金納であったから、百姓は買米だけでなく、年貢上納の分も現金を得る必要があった。ここには記載されていないが、ゼンマイ・キノコなどの山菜、炭や薪などの林産資源も貴重な現金収入の一つであった。

明治以降は漆年貢の制度が廃止され、木の実・漆とも自由売買が許された。このため近世期からの村の釜座・釜元が生蠟の生産を一手に引継ぎ、取引業者と契約し、収益金を村中に配分した。またローソクなどの加工もおこなった。一方漆は漆掻職人が定期的に巡村し、生産物は会津漆器店などに買取ってもらったが、大正以降は養蚕業の隆盛に伴い漆の枯損木が目立ち、衰退の一途をたどり、現在は生蠟の生産はない。

#### (4) 各産業の状況

##### 1) 養蚕業

近世初期は主に山桑を利用してカイコを飼っていたが、養蚕業は有利な換金源であることから、収量の多い栽培桑の改良や、蚕種の育種法が急速に発達し、幕末ごろには重要な産業となり、特に只見川流域での飼育は隆盛を見た。これは只見産の蚕種が風土に適しており、農家の嫌忌する違蚕の割合が少なく、さらに山桑の自生が豊富だったことによるものである。近世期の養蚕はまだ繭の売買はなく、真綿をひいて自家用にし、余分は販売した。

明治時代には養蚕業は我が国の一大産業として躍進し、絹織物は世界一の生産を誇った。

このため金山谷郷の飼育農家は急増し、畑地には生産量の多い無拳桑や立木の高助桑が栽培された。明治九年の大沼郡物産取調表によると、工芸品では真綿・生糸の生産高が一位となっている。さらに大正末期～昭和初期には養蚕景気に見舞われ、水田面積の少ない山間地での飼育戸数が急増し、僧侶や商家でも副業にカイコを飼う時代となった。昭和 9 年調べの「大沼郡西川村外二ヶ村組合村勢一覧」によると、繭・種・蚕糸類の売上高は米の四倍に相当する約 12 万円で、林産物の用材 4 万円より三倍も多いことが次表一覧に示されている。

表 8 養蚕の収穫高とその他の石高との比較

種 別	収 穫 高	価 額
米	1,688 石	33,216 円
馬鈴薯	35,209 貫	3,169
春蚕繭	6,921 貫	39,405
夏秋蚕繭	6,051 貫	23,722
蚕種	13,500 g	1,215
蚕糸類	72 貫	1,288
林産用材	9,996 石	40,548
木炭	94,195 貫	12,363

養蚕業の推移を収繭量から見れば、「大沼郡治統計書」によると、明治 35 年旧川西村 (西方) の春夏秋蚕合計でわずか 271 石であったものが、同 45 年 583 石、大正 5 年 850 石、同 10 年 1453 石と著しい増加を示している。昭和にはいるとさらに躍進するが、退潮も激しく元年の 4291 貫を最高に、同 10 年 2349 貫と減少し、同 16 年には 1830 貫にまで落ち込んでいる。此の傾向は旧宮下村でも同様で、世界的な養蚕



業の不振は山間地の経済活動に大きなダメージを与え、昭和 43 年にはかつて 400 戸を越えた飼育戸数も 83 戸に減少した。ちなみに現在は皆無である。

## 2) 麻織物

近世期の年貢引当て工芸作物として麻の栽培が盛んであった。「滝谷組風土記・金山谷寄」の産業の項には「麻有布にめて百三十九両程」とあり、紙漉き代金に次いで主要な生産高であったことが示されている。先に示した「大谷組目録」の中にも「雪中は女太布仕り」とあり、麻糸を紡いで布に織り上げ売買したことが分かる。麻は地味の肥えた土地でないと生育しないので、近世期には村毎に「麻畑割り」を行った。これは数年に一度の割合で、富農から零細農まで地味の肥えた麻畑を均等に配分する制度で、「麻畑ならし」とも称し、石代納百姓に現金収入の途を開く善政として高く評価されている。麻織物の盛んな伊南・伊北郷の記録によれば、一冬の女の稼ぎ高は一両から多い人では数両に達したとあり、古町村宿駅や、近隣村にはこれを一手に買い集める豪商達が居て、江戸や京都に運送して商売した。大谷組や滝谷組にも、布織物を仲買する村の商人が居て、これら豪商と深く関わっていたことが知られている（「伊南村史」第五巻）。

麻は明治以降も栽培された。「宮下村郷土誌」によると、西川村外二ヶ村の生産高は明治 41 年 1400 貫、同 42 年 1300 貫、同 45 年 500 貫と次第に減少し、大正 6 年には 250 貫、同 12 年には 120 貫とかつての 10 分の 1 となり、昭和初年にはわずか 15、6 貫の生産にとどまった。

## 3) 紙漉き

こちらも年貢引当の産業で、地味の肥えた山地に栽培した楮から和紙を漉いて上納金にあてた。「楮有紙二漉金百九十四両程、年々増減有」（「滝谷組風土記」）とあり、麻織物・養蚕を抜き第一位を占めており、金山谷での主要産業であったことが分かる。「大谷組風俗帳」（文化三年）にも「紙漉十一月より三月中まで漉申候、楮、紙に仕上げ御国用に相払、並に越国へ差出す儀も御座候」とある。滝谷組では西方村・名入村での生産が多く、大谷組では享保 17 年目録に川井村「村三ヶ一は紙漉申候」、宮下村「楮之有紙漉申候、女も手伝仕候」とあり生産も多かったようである。「新編会津風土記」には西方紙・川口紙の記載もあり、良質のものが生産され流通したことが知られる。しかし明治以降は継承者もなく、紙漉きの伝統は消滅した。

## 4) 薬用人参

かつて三島町は薬用人参の生産地であり、村人は連作障害を回避するために、未耕作地を求めて奥山まで開墾し栽培した経緯がある。今でも奥山の平地や緩傾斜地には「キツツケ」と呼ぶ人参栽培の畝跡が明瞭に残されている。明治・大正期の生産高は付表の統計表にあるとおり、5000 貫を越え、販売額は養蚕業に匹敵し農家を潤した。「西方村郷土誌」によると川西村西方には土根の処理場があり、近隣から集荷された製品は京・横浜方面に出荷された。昭和期に入ると連作障害による生育不良で、栽培農家が激減した。

## 5) 葉たばこの生産

昭和 25 年ごろより、養蚕業の不振から葉たばこ生産農家への転換が始まった。安定した政府推奨の作目とあって、全国的に栽培が拡大し、三島町でも新興の換金作物として普及を奨励し、宮下村に葉煙草収納所を誘致した。このため、またたく間に全集落に普及し、昭和 30 年には 30 町歩以上にまで増反され、生産額は 3000 万円を越え、養蚕・



写真 36 たばこ植え

米をはるかにしのぐ町の基幹作目となった。しかし、昭和60年代から少子高齢化による就労人口の減少が続く、耕作を放棄する農家が續出して、現在はずか2、3戸が耕作を続けるにすぎない。



写真 37 ブナ林

#### 6) 林産資源

三島町の森林面積は7841町歩で総面積の87%に相当し、この内民有林は6165町歩、内私有林3500町歩で、農家1戸当たりの所有面積は約4町歩である。戦後人工造林熱が高まり、杉は約700町歩ほど植栽された。生産された用材は建築材として高価に取引され、昭和40年の統計表では、年間2万石以上が売買され、1戸平均20万円ほどの収入があった。しかしその後建築様式の変化、安価な外国生産材の大量移入などにより杉材の需要が激減し、現在ではほとんど取引されていない状態が続いている。

森林面積の大半はナラ・クリ・ブナなどの落葉広葉樹林で、木炭の生産が積極的におこなわれた。大正8年の「大沼郡治統計書」によると、旧宮下村の生産高は八万貫で、繭・杉材・酒・桐下駄に次いで第五位の販売高があり、米や蕎麦・ローソクなどはこれに次いでいる。昭和16年国鉄会津宮下線の開通に伴い、宮下駅からは奥会津全域から運びこまれた木炭が、毎日大量に貨車積みされ出荷された。駅構内にはいく棟もの木炭倉庫が並び、出荷する木炭の精度を検査する「木炭検査員」も在駐した。昭和43年の「三島町統計綴」によると、木炭・薪・シイタケ・ナメコ・杉皮などの林産副産物の年間の売上高は約5000万円で、この内木炭は年間六万俵・2600万円相当を稼ぎ出している。

#### 7) 桐下駄

三島町の桐栽培は明治初年に分根育苗法が一般に知られるとともに著しく普及し、大正10年の栽培面積は旧西方村105町歩、旧宮下村75町歩で会津桐の中心地であった(「会津桐の沿革」)。桐は地元で下駄などに生産されたが、良材は琴・タンス材として丸太で関東・関西方面に出荷された。大正八年の桐素材販売高は旧宮下村で4,000石・46,400円、旧西方村で76,680円で、ともに繭代金相当の収入となっている。



写真 38 桐下駄の野積み

桐下駄の生産は明治期から行われていたが、会津桐下駄の価値が高まるにつれて需要が増大し、大正6年にはそれまでの手工業から動力による下駄加工が開始され、生産高も飛躍的に伸びた。大正8年には旧宮下村で12万足、旧西方村で10万足が製造され、昭和10年には宮下村30万足、西方村でも20万足が製造され、生産販売額の順位は共に林産物販売に次いで第二位を占めている。

桐タンスの製造販売もおこなわれていたが、統計表に載るほどの生産額がなかったようで実数は明らかでない。現在町では純粋の会津桐タンスを普及するための生産組織を立ち上げ、第三セクターによる桐タンス工場を運営しているが、近年は販売実績が伸び悩みの状態にある。

#### 8) 電源開発

近世期40戸足らずの寒村であった宮下村は、国策として進められた只見川電源開発の基地として、急速

に発展し、奥会津政治・経済・交易の中核地として発展したところである。戦中から建設工事に着手した宮下発電所は、終戦直後の昭和 21 年に流域最初の水力発電所として運転を開始した。その後只見川水系の発電計画は順調に推移し、宮下に設計事務所をはじめ、工事関係の事務所が置かれ、また上流工事場に移送する資材・物資の発信基地として、交通・運輸関連の出先機関も置かれ、田子倉・奥只見ダム工事の終了するまでのおよそ 30 年間、基地としての使命を果たした。そのため宮下にはダム関連の建造物や労働者が多く集まり、最盛期には 7,000 人の人口に膨れ上がったこともある。



写真 39 宮下ダム

その後工事終焉とともに著しい人口の流失があり、また第一次産業から第二次産業への大量の労働人口の異動は、三島町の農業・林業の仕組みを変えたとも云える。宮下には多数の土木建設関連の会社や請負業者が輩出し、農村からの余剰労働者を利用した建設業全盛時代がはじまる。いわゆる「三島町公共事業依存社会」の発端はここに存在したのである。しかし、現在の三島町にはこれら大手の土木建設会社の大半が姿を消し、「土方稼ぎ」と称した農村労働者の去就に関心が持たれている。

その後工事終焉とともに著しい人口の流失があり、また第一次産業から第二次産業への大量の労働人口の異動は、三島町の農業・林業の仕組みを変えたとも云える。宮下には多数の土木建設関連の会社や請負業者が輩出し、農村からの余剰労働者を利用した建設業全盛時代がはじまる。いわゆる「三島町公共事業依存社会」の発端はここに存在したのである。しかし、現在の三島町にはこれら大手の土木建設会社の大半が姿を消し、「土方稼ぎ」と称した農村労働者の去就に関心が持たれている。

## 9) 主要生産物と販売

「福島県史」第 17 巻政治 3 に、三島町の明治・大正・昭和（前期・後期）期における主要産業統計表が所収されている。それぞれの年代でどのような商品が生産されて販売し、生産者の収益はどの位あったのか、その概要を掴むことが出来る。資料は付表の通りである。明治末年の主要物産の第 1 位は旧宮下村では繭。旧西方村では薬用人参。大正時代は宮下村は相変わらず繭。西方村は 1 位林産物で 2 位繭に変わる。昭和初期の宮下村も 1 位林業、

表 9

産業別就業者数

	昭和 40 年	昭和 50 年	昭和 60 年	平成 7 年	平成 17 年
就業者数	2,107	1,937	1,626	1,504	997
農業	933	513	255	200	142
林業	82	55	7	19	7
鉱業	9	0	0	0	0
建設業	303	548	406	400	150
製造業	89	166	308	272	169
電気ガス業	62	19	5	30	11
運輸通信業	114	96	78	68	21
卸・小売業	240	186	214	124	107
金融保険業	10	18	16	25	12
サービス業	224	276	272	309	311
公務	41	60	64	57	65
第 1 次産業	1,015	568	262	219	149
第 2 次産業	401	714	714	672	319
第 3 次産業	691	655	650	613	528

三島町町勢要覧 2008 資料編

2 位桐下駄。西方村も同様。昭和 40 年の統計には商工業も加えたのか水力発電が販売高の 1 位を占め、12 億 3,000 万円の販売額となっている。2 位は林業で杉材などの販売額は年間 1 億 2,500 万円、3 位葉煙草で 2,800 万円ほどとなっている。しかし現在は電力は別として、農林業からの販売額はほとんど無に等しく、山間住民の経済情勢は極めて深刻化しているといわざるを得ない。

（文責 角田伊一）



## 第8節 只見川電源開発

### (1) 戦後復興に貢献

昭和16年12月8日、あのいまわしい太平洋戦争が勃発し、やがて第二次世界大戦として発展し、わが国は勿論全世界が悲惨な歴史の渦中に巻き込まれることになるが、その大戦勃発のほぼ1ヶ月前の11月15日、国策として進められてきた只見川電源開発計画の先陣をきって、宮下発電所の建設工事が着工された。この工事は大戦の最中とあって資材や労働力の極端に少ない中ですすめられたことで有名である。そして、昭和21年12月28日、宮下発電所の第一号機が完成し、出力13,800 kWアワーのタービンが始動し、電力不足の首都圏に送電が開始された。只見川電源開発は戦後日本の経済復興に果たした役割はきわめて大きいものがある。以下只見川電源開発について述べるが、その序章として、只見川の姿をさまざまな面から検証してみることにする。

### (2) 只見川物語

只見川の源は、尾瀬沼から西流する沼尻川と、尾瀬ヶ原を流れるヨッピー川で、これが合流して只見川となる。只見川の流路延長は145.2キロ、流域面積は実に2792平方キロの広大な範囲に及ぶ。主な支流は伊南川の流路延長80.2キロ、野尻川の流路延長38キロ、滝谷川の流路延長32キロで、その他多数の河川を集め、悠久の歴史に彩られる奥会津の山野を貫流して、耶麻郡山都町館原(現喜多方市)で阿賀川と合流し、越後平野の穀倉地帯を潤して日本海に注ぐ国内屈指の大河である。



写真 40 只見川

只見川の流路山地はまたわが国屈指の豪雪地帯で、常に安定した豊かな水量を保持することから、水力発電には恰好の河川として名高い。さらに尾瀬の沼面標高1660mから、会津の平原阿賀川合流点標高160mまでおよそ1500mの高低差があり、平均水面勾配7パーセントの激流には階段状のダム構築が可能であり、あとから述べるが只見川は早くから水力発電の好適地として注目されていた。

ところで只見川という地名が何時の時代につけられたのか明らかでないが、「寛文風土記」には只見川の文字が見えるので、起源はもう少しさかのぼるかもしれない。「新編会津風土記」には只見川の古名を「あかの川」と表記しており、さらに寛永年間の終わり頃に発見された奥只見銀山平銀鉱の領地所有にかかわる越後高田藩と会津藩との境界論争でも、川の名は赤の川と呼んだことがしられている。

只見川の地名伝承はいくつか知られているが、柳津円蔵寺縁起によると、昔弘法大師が尾瀬から川筋を歩いて寺を建てる恰好の場所探しをされたが、なかなか適当な場所がなく、柳津まで「ただ見て通った」ので、只見川と名づけられたとされている。また尾瀬三郎房利伝説でも、虚空蔵菩薩を祀る場所を探して尾瀬浪拝の岩場から柳津までの下流を探したが、全て途中の両岸は切り立って眺望もままならず、見えるは「ただ川ばかり」だったので、そう語られたと伝えられている。このように只見という語源は、ただ見るに過ぎないという意味であるが、これは只見川の形成した地形、すなわち河岸段丘の生活様式と大きく関わってくる。南会津郡只見町以東の只見川沿岸には細長い階段状の平地が随所に見られる。地理学ではこれを河岸段丘と呼ぶ。伊南川や野尻川中流域に開豁した川に平行した平地、盆地・河谷平野とは異なった成因によるもので好対象をなしている。後者の川は流域の耕地を潤し、魚類などの恵みをもたらすと同時に、母なる川として生活と直結するが、前者の川は深い峡谷を流れるだけで、むしろ人々からは危険な場所として嫌忌され、けっして「母なる川」とはなり得なかった。このような立地から只見川は流域民からは「見るだけの川」でしか



なかったと思われる。

それでは公式に只見川と呼ばれるようになったのは何時の時代だろうか。江戸時代の初期寛永年間にはまだ赤の川と呼ばれていたが、寛文年間の公文書には只見川が用いられている。この年代の中間に改変されたことは明らかで、何がきっかけでそうなったのかは詳らかでないが、私は次のような解釈をしている。先にも述べたが、只見川の支流には大塩川・山入川・野尻川・大谷川・滝谷川があり、これらに共通するのは、全て郷頭居村の村邑名と一致していることである。会津の郷頭制度は保科正之が藩主として入部して間もない正保2年(1645)から始まり、山水の地形を勘案し、十数カ村、およそ3,000石単位に一つの行政組織を作り上げ、組の総元締めには郷頭を置き行政全般を遂行させた。これらの川の名は全てそれらの組名と一致しており、それまで「大川」「おおがア」などいろいろな呼び方のされていた川の名を、正保2年制度改革の断行に伴い、郷役所の名を冠し統一した呼び名を採用したと考えて誤りであろうか。なお只見組は郷頭の不正により取り潰され、黒谷村から後任の郷頭が選ばれ黒谷組が誕生したことは歴史の示すところである。山入組も同様の経過をたどっている。

### (3) 銀山の発見

いまから約400年前、只見川(赤の川)最上流の岩場からわが国屈指の銀山が発見され、200年にも及ぶ長い間良質の銀鉱が採掘された話は、会津にはほとんど伝わらなかった。しかし鉱脈の発見地は只見川水系に属する会津領であるにもかかわらず、立地的に会津領の桧枝岐村・田子倉村とは長大に隔絶しており、漁労や狩猟にもほとんど足の踏み入っていない人跡未踏の場所でもあったから、その絶好の漁場は越後高田領湯之谷村民の独断場として利用されたが、会津側からの苦情や差し止めの措置はなかったと言われている。昔から赤の川には海から大量のサクラマスが遡上し、湯之谷村の百姓達は山越え谷越えしてその漁場に入り漁猟していた。寛永17年(1640)夏、越後国折立村の百姓が、赤の川上流の上平という所の河床岩場から光る石を見つけた。「越後上田銀山草創略記」にはいわゆる銀山平発見の経緯をこのように現している。ここでは詳細は省くが、やがて会津藩と越後高田藩との間で銀山の所属をめぐる境界争いに発展し、それは越後国と陸奥国の国境論争にまで発展するが、時の会津領主加藤氏の弱腰と銀鉱にたいする執着心の薄さから全面敗訴となり、幕府からの裁定は「不動滝から大鳥沢までは、只見川(赤の川)の流心を国境とする」というもので、会津藩の主張した「赤の川を越え西の山の峰を境」とする分水嶺の一般論は却下された。この境界線は明治の地租改正でも変更がなく、現在でも新潟県との境界線は只見川上流は川半分のままである。この裁定は極めて不法なもので、わが国では古来より「峰落ち境(大分水嶺)」が国土境界の大法とされたが、これを元に戻せなかったこと、つまり末丈ヶ岳・枝折峠・駒ヶ岳・中ノ岳・平岳から景鶴山までの東側一体に広がる広大な水系を只見川水系として福島県に移行しなかったことが、やがて只見川水系電源開発の大きな障害となり、本流案だの分流案だのとの政治的な駆け引きの材料にされるのである。尾瀬沼から大鳥ダムまでの虫食い状の県境は、観光行政でも大きな損失で、人跡未踏の真の秘境を失ってしまったのである。



図15 会越国境論争概要図 尾瀬と只見川電源開発より

#### （４） 尾瀬ヶ原に巨大ダム

只見川に水力発電所を建設して電気を起こし、産業に役立てようと目論んだ者は決して少なくなかった。文明開化の花形、電灯が点りはじめると同時に、電気と鉱脈を求めて銀山平に出入りする事業家や山師が増え、この地が「水力電気事業」に最適の立地との想いを持つようになり、広大な銀山平を湖底に沈め、巨大ダムを構築して 100 万 kW 級の発電を起こす計画を、すでに明治時代に抱く人々の存在したことが新潟県「湯之谷村のあゆみ」に語られている。

さらに驚くべきことは、かの有名な尾瀬ヶ原を水没させ、巨万の水を貯え、これを発電と工業用水として利根川に落とそうとする目論見が、本格的にすすめられていたという話も載せてある。

この尾瀬ヶ原の総合開発計画はその後積み重ねられ、戦後急速に浮上し、とくに利根川水系の補完からみから、国策としても論じられ、昭和 22 年 3 月策定の日本発送電株式会社の「只見川筋水力開発計画」には、尾瀬ヶ原発電所の名前が載せられ、次のような計画が練られた。尾瀬平滑滝の上流に高さ 57 呎の堰堤を構築し、尾瀬沼を除く湿原全域を貯水地とし、下流に尾瀬発電所を建設し最大 15 万 kW を発電するという計画で、今思うと卒倒するような内容で、「尾瀬ヶ原一帯の湿原は水底となるが、満々と湛えられたる青き水面と、これを囲む燧ヶ岳・至仏山等の風景は、必ず新しき観光地となるものと思われる」と計画書に記載されているから驚きである。

戦後の廃墟と混迷から立ち直るには、経済の活性化と国民の自立を促す他はなく、その復興の原動力となるのが電気であることはいまでもなく、電源開発は国策として最大のプロジェクトとしてすすめられた。そこで水量が豊富で地形的にも絶好の条件を備えている奥只見・尾瀬地域が着目され、調査・研究の手が入ったのである。ただ当時の世相は文化よりも食を希求する声が高く、世界的遺産尾瀬の価値は極めて低く、危ういところで戦後日本史に汚点をのこすところであった。

さらにこの計画が実施され、尾瀬の水が群馬県側に流されれば、只見川は完全に枯渇し、その後の只見川水力電源開発は存在しなかった筈である。

この尾瀬沼の水利権問題は、大正 10 年の福島県会で激しく論じられ、次のような意見書が採択され群馬県知事と内務大臣宛に送付されたことは有名である。「近時水力電気発生を以て水利使用願続出するに際し、只見川の水源たる尾瀬沼の付近に大堰堤を築造して群馬県に導引放水し水力電気を発生せしめんとする出願あるやに聞き知り、この種出願は水利の天然慣行を無視するものにして本県の断じて承認し得なし所、若しこれを許可すれば将来永久に紛争を断たないものと思う、故に県知事及び内務大臣に意見書を提出する」

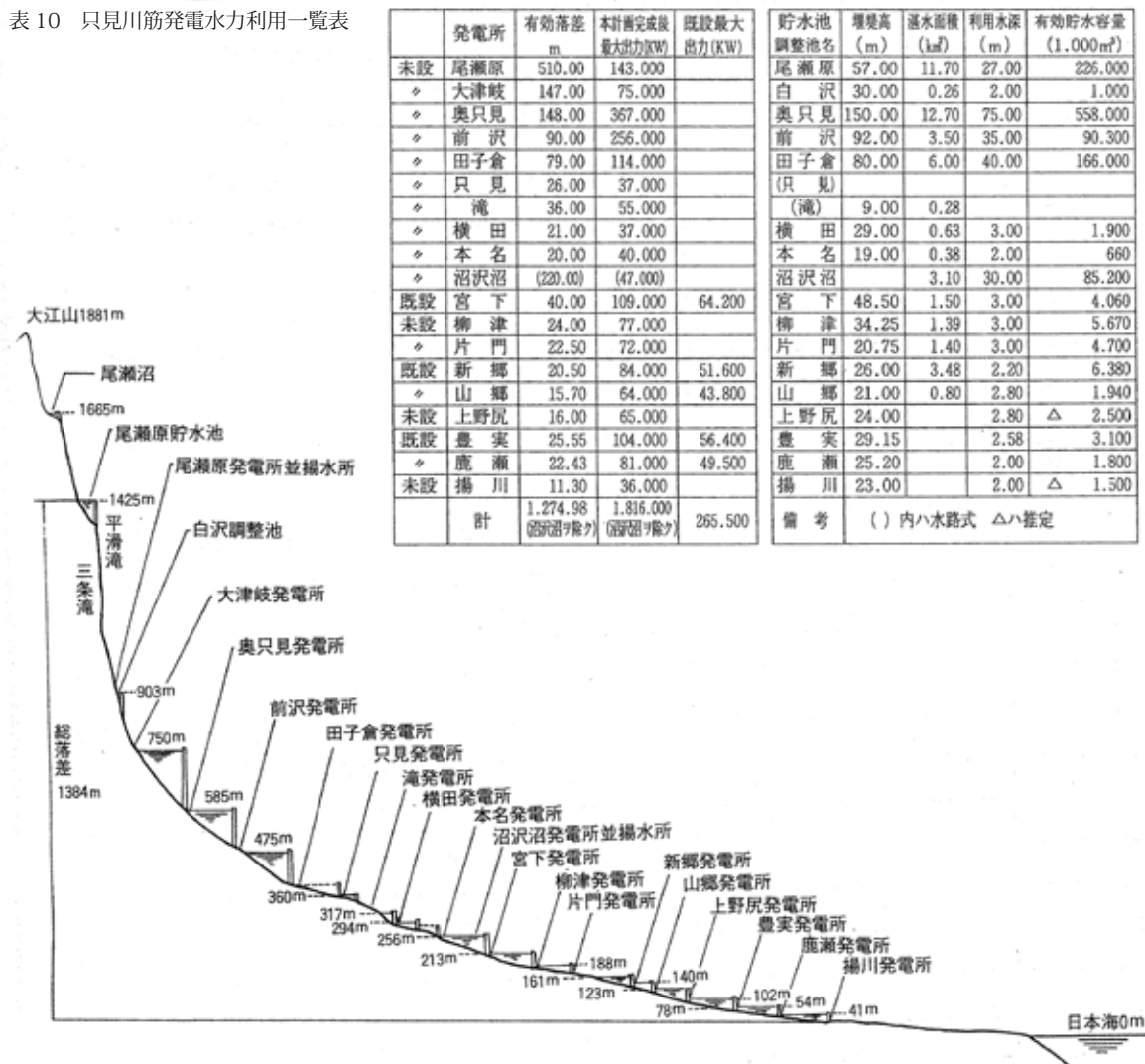
ただし、このような激しい内容の意見書であったにもかかわらず、尾瀬の水利使用は関東水力電気株式会社に許可されるのであるが、当時としては数少ない地理学者や文化人からの尾瀬開発反対署名運動があり、占領国からも保護に向けての意見が寄せられ、この計画は実効を失うことになり、いよいよ只見川が桧舞台に登場するのである。

#### （５） 只見川電源開発構想

只見川電源開発構想というのは実に壮大なもので、昭和 22 年の計画概要によると、尾瀬ヶ原から田子倉までの急峻な河床を最高度に利用し、豊富な融雪水を巨大人造湖に蓄積し、冬の渇水期に利用する「貯水池方式」を採用し、下流の新潟県揚川までの間に河床の落差を階段状に利用して十四の水力発電所を建設し、最大出力 1,863,000kW アワーを発電しようとするものであるが、その後新潟県との分流案や尾瀬保護問題との兼ね合いから再三の計画変更を余儀なくされ、結局、奥只見・大鳥・田子倉・只見・滝・本名・上田・沼沢・宮下・柳津・片門に 11 の発電所が建設され、わが国有数の水力発電地帯になったのである。特に昭

和 35 年完成の奥只見ダムは高さ 157 ㍍、長さ 475 ㍍、有効貯水量 4 億 5,800 立方㍍、発電量は最大出力 38 万 kW アワーというマンモス発電所で、其の前年完成の田子倉発電所とともに観光の新名所として多くの見学者が訪れ、クリーンエネルギーとしての電気を首都圏に送り続けている。

表 10 只見川筋発電水力利用一覧表



## (6) 宮下ダム建設

昭和 13 年 4 月、電力管理法と日本発送電株式会社法が公布され、出力 5,000kW 以上の水力発電設備は国家の管理となり、日本発送電が政府の建設命令を受けて建設施行することとなり、同時に一つの電力会社と全国に九つの配電会社が設置され、我が国の電力事業は全てこの法律下に置かれることになった。すなわち電力は国家の統制下に置かれ、電力は国家権力によって管理されることになった。

そんな中で、水量の豊かな、地形に有利な只見川筋の水力発電事業に向けた調査が本格的に進められた。当時日本発送電東北支店土木部長であった北松友義は、机上で 5 万分の 1 地形図に貯水ダムの位置をなぞらえたといわれ、これが只見川電源開発計画の端緒となり、かつ基礎となった。

只見川筋の電源開発は下流からすすめられ、新潟県の鹿瀬発電所と豊実発電所は昭和 4 年に建設工事が行われ、同じ頃福島県の新郷発電所の建設も進められた。さて、電力管理法が公布された 2 年後の昭和 15 年 8 月 31 日、国は日本発送電株式会社 (日発) に対し、宮下発電所の只見川における水利使用权の許可を与え、いよいよ工事に向けて動き出すことになった。しかし工事が実際に着手されるのは翌 16 年 11 月 15 日のことで、支那事変など多年にわたる軍事的動向の中で、資材と労働力の調達には苦労が多く、着手したもの



の工事の進行は遅延気味であったといわれる。

宮下発電所の工事は日発から株式会社飛島組が指名され、実際の工事は下請会社の前田組があたることになった。前田組の工事事務所は宮下村上の原に開設され、関連する建物も林立し、荒れ放題であった村はずれの松林はまたたく間に工事関連の建物が立ち並び、業者や労務者のひしめく繁華街に変身した。また日発や前田組技術者の居住する社宅街は桑原村中平に建設され、ここは頭脳集団の住む特異な場所として地域民からは別世界のように見られた。

この頃の宮下村の人口は5千人を越える状態で、中でも人口300人足らずの一寒村に過ぎなかった宮下地区は、発電所工事の中心地となったことから、農業からの転身や移住者による商店経営者の多く集まる商店街として形を変え、短日時に村の姿を一変させた。また同時に(昭和16年12月28日)国鉄会津線が宮下まで延伸開通し、宮下村は会津線の終着駅となり、旅館や飲食店が立ち並び、日本通運などの営業所も置かれ、バス輸送や貨物輸送の基地となり、宮下村は名実共に奥会津の玄関口として発展した。

戦時下ということもあり、軍事工場の電力需要が急増し、宮下発電所工事は昼夜を問わず突貫工事ですすめられたが、資材不足から進捗状況は極めて低かった。労務者の多くは地元人であったが、戦争による捕虜などの強制労働も行われた。只見川筋にはコンクリートの素材を輸送する鉄索軌道も稼動し、砂・バラスなどは松原村の馬場平から鉄索で工事現場まで運ばれたが、多くの死傷者やけが人を出したことでよく知られている。

宮下発電所は高さ48.5mの貯水ダムから取水した水を、長大な水圧トンネル内を作って導水させ、発電所の真上に調圧水槽を建設して、ここから一気に落差を利用し導水管の水を落下してタービンを回す方式で、このため工事にも手間取り、完成するまでにおよそ6ヶ年を要し、第1次工事の一部が竣工するのは大東亜戦争終結後の昭和21年12月28日のことで、出力は13,300kWであったといわれる。工事は続いて第1次の残部工事が開始され、昭和24年11月に完成し出力32,100kWの発電機が始動し、電力は全て首都圏に向けて送電された。

戦後の只見川電源開発は急速に進められたが、昭和23年に新潟県から最上流の水利権を理由に、只見川の一部を信濃川に落として発電させる分流案が提出され、福島県の提唱する本流案との政争にまで発展し、開発の困難を極めた時期もある。ただしこの論争の遠因は先に述べた銀山平にまつわる境界裁定の不備にあり、水利の半分が新潟県に帰属することに目をつけた新潟県と県議会は分流案を主張し続けたのであるが、昭和28年、電源開発調整審議会において本流案の正当性・有利性がみとめられ、只見川電源開発は国策にのっとりすすめられることになった。宮下発電所の第二期工事はこのような事情から工事の遅れが目立ったが、4月に入りようやく竣工し、総出力62,200kWの電力を生み出し、わが国経済成長戦略に多大の貢献を果たした。

## (7) 宮下村の大火

電源工事で活みなぎる西川村宮下は、昭和17年4月1日にそれまで組合村であつた西川村外二ヶ村を正式合併し、宮下村と改称し宮下地区に村役場を設置した。初代村長は大谷の二瓶貴一が就任し、新しい村会議員も選出されて意気揚々の船出をなしたが、僅かその10日後に発電所工事現場からの失火により、115戸を全焼する大火に見舞われ、役場庁舎・小学校・社寺のほか民家2、3戸のみが罹災をまぬかれるという大惨事となっ



写真 41 宮下地区の大火後



た。春の乾燥期とあって火はまたたく間に全戸を包み、土蔵は勿論一物も残さずあっという間に燃え尽くしてしまった。

この大火の様子を朝日新聞福島版は「水利不便が主因」の大見出しで次のように報じている。「この4月1日新しい村として発足したばかりの大沼郡宮下村の中心地宮下部落が大火におそわれたことは、山峡の街の防備に大きな考慮を与えたものと見られるが、隣村に優れた消化機関を持っていたとしても交通の不便から思うようにならず、いざ現場に来て機械ポンプの必要とする水量に乏しいこと、その上罹災地の殆どは猛火の前にもろい草ぶき屋根であったことによって手の施しようがなかったといわれ、翌日開かれた急施村会でもこの点が指摘され、再建される新しい宮下村の今後に燃え難い、消火に容易な施設の急務が要望された」

こうした指摘から、村では罹災地の防災都市計画が策定され、本通りの南裏と北裏に二本の幹線道路を引き、宅地の分散化を図る計画を立てたが、罹災者はわれ先に元の敷地に復興住宅の建築を急いだこともあり、新しい都市計画は日の目を見ないでしまったといわれる。ただしこの背景には、火元の前田組から過分ともいわれる見舞金と弁償金が極めて短日のうちに各戸に支払われたことが、再建住宅建築への足並みが早まったとも伝えられている。なお罹災者は次の方々であった。

鈴木秋三郎、栗城五六、同長英、同武次、五十嵐兵郎、伊藤喜一、栗城喜一、同キヨノ、長谷川ツルイ、佐久間孝一、五十嵐明、諏訪広吉、遠藤タイ、柴田ツヤ、目黒一二、飯塚春次、五十嵐主税、佐藤儀作、同重太、志田庸、杉本薫、志田介、布川秀次郎、伊藤定雄、栗城源吾、同嘉作、長谷川七次郎、角田信乃、栗城亀三郎、高橋肅、鈴木金作、齋藤啓一、杉原信喜、齋藤トシイ、馬場賢作、堀内ミヤノ、小柴吉左、齋藤茂雄、江川忠次郎、細堀立男、小林銀二、酒井チカイ、栗城政市、佐藤戸右衛門、角田ハナ、酒井文一、同嘉一、細堀安次、齋藤茂一、目黒政喜、同畦一、西郷右近、菅家重助、角田進、栗城善二、広瀬八郎、細川原次郎、齋藤治左衛門、川俣重太、矢吹義正、天野保寿、目黒熊逸、浅井初四郎、齋藤四郎、青木英司、笠松元次、石川昌一、五十嵐善伸、小堀タマイ、齋藤イツモ、五十嵐英雄、栗城信次、佐藤正、小島正、中村徳一、栗城新松、同弘、佐久間勇、鈴木寅次郎、五十嵐賢、栗城房雄、酒井源左、同貞雄、齋藤テフ、菅家長美、齋藤近衛、金田仁、細堀関蔵、齋藤藤三郎、栗城恒左、酒井久、堀大次、栗城直喜、中川親義、栗城松伊、田中源司、栗城茂、近藤忠一、赤須タイ、石山清吉、栗城唯、同サワ、齋藤タケノ(朝日新聞福島版より)

(文責 角田伊一)

## 第6章 三島町の集落に関する物語

### 第1節 宮下地区

村落は只見川の形成した河岸段丘第2弾目に立地しているが、約5000年前に噴火した沼沢カルデラ火山の噴出物が堆積した地形で、火山灰土に適合した会津桐の良く育つ土地柄として知られており、村には古くから伝えられる幻の桐樹の伝説がある。村の山中に樹齢数百年を数える桐の大木があり、村人が一攫千金を目論んで探索しても、欲深い者には決して探し当てることは出来ず、見事な樹影は無欲の者の目にしか止まらぬという。

村は古くは桑原村と一村を成しており、現在でも両村の境界は不明で、宮下の村中に桑原の端村荒屋敷の集落が嵌合しているなどその一例で、慶長2年(1597)にはこれら入会地をめぐる両村の境界論争が発生し、近隣肝煎連による裁決書が桑原村河越家に現存している。ちなみにこの文書は三島町に現存する最古の古文書である。

村名の由来は定かでないが、昔、米子沢に祭祀された伊勢宮、桑原三島神社の下に開けた集落なので宮ノ下と呼ぶとされているが、別説では中世領主宮下を氏とする大膳にちなむとされている。宮下大膳については「新編会津風土記」宮下村の項に、「館跡 村西三町ニアリ、東西五十間・南北二十九間、山内氏ノ支族大膳俊久ト云者住シ、氏ヲ宮下ト称ス、其子ヲ宮左衛門忠常ト云、其子太郎右衛門俊長天正年中マテ住スト云」とあり、その子孫は会津藩に永代仕官したと記されている。

村は古くから金山谷に属し、中世期は山ノ内氏の支配下におかれ、室町の頃に築かれた上ノ山の柵には、一族の重臣宮下氏が住み村長として統治していた。その後会津領となり蒲生氏、上杉氏、加藤氏の支配下におかれ、寛永20年からは南山御蔵入領となり大谷組に属す。村高は文禄3年の蒲生高目録では104石余、享保17年の大谷組目録では149石余、文化15年の「村日記」と「天保郷長」「旧高旧領」では共に159石余。享保17年の家数46軒、竈55、人数男156人女125人の合計281人（「大谷組目録」）。化政期の家数44軒（「新編会津風土記」）、天保2年の家数46軒、明治8年の家数50軒。

近世から近代にかけての宮下村は、戸数50戸たらずの純農村で、養蚕や紙漉き、青芦や麻織物を副業とし、また漆や蠟ろ生産するごくありふれた村邑であった。しかしこの村が大きく変貌するきっかけを作ったのが、沼田街道の改修であった。それまで若松城下から伊南・伊北を経て、藩の預かり支配地中越地方と往来するには、沼田街道の川井から大登を経由して銀山街道の宿駅大谷に出、そこから野尻・小林・只見・六十里越を経て小出村の小田島陣屋に向かうのが本道で、宮下・沼沢・横田・只見を経由することは稀であった。しかし只見川流域諸村の団結により沼田街道は大改修され、幅員2間巾の馬車道が只見まで開通した後は交通交易の流れが変わり、宮下は人と物の一大集散地となりまたたく間に金山谷郷の中心地となった。さらに昭和16年には鉄道会津線が宮下まで開通し、同時に宮下水力発電所の建設工事が始まり、多くの技術者や労務者が移住し、宮下は奥会津の玄関口として急速に発展した。かつての小村が、町の中心地として大変貌を遂げたのは、村を貫通する沼田街道が近代道路として生まれ変わったことと無関係ではない。

(文責 角田伊一)



写真 42 宮下地区 サイの神



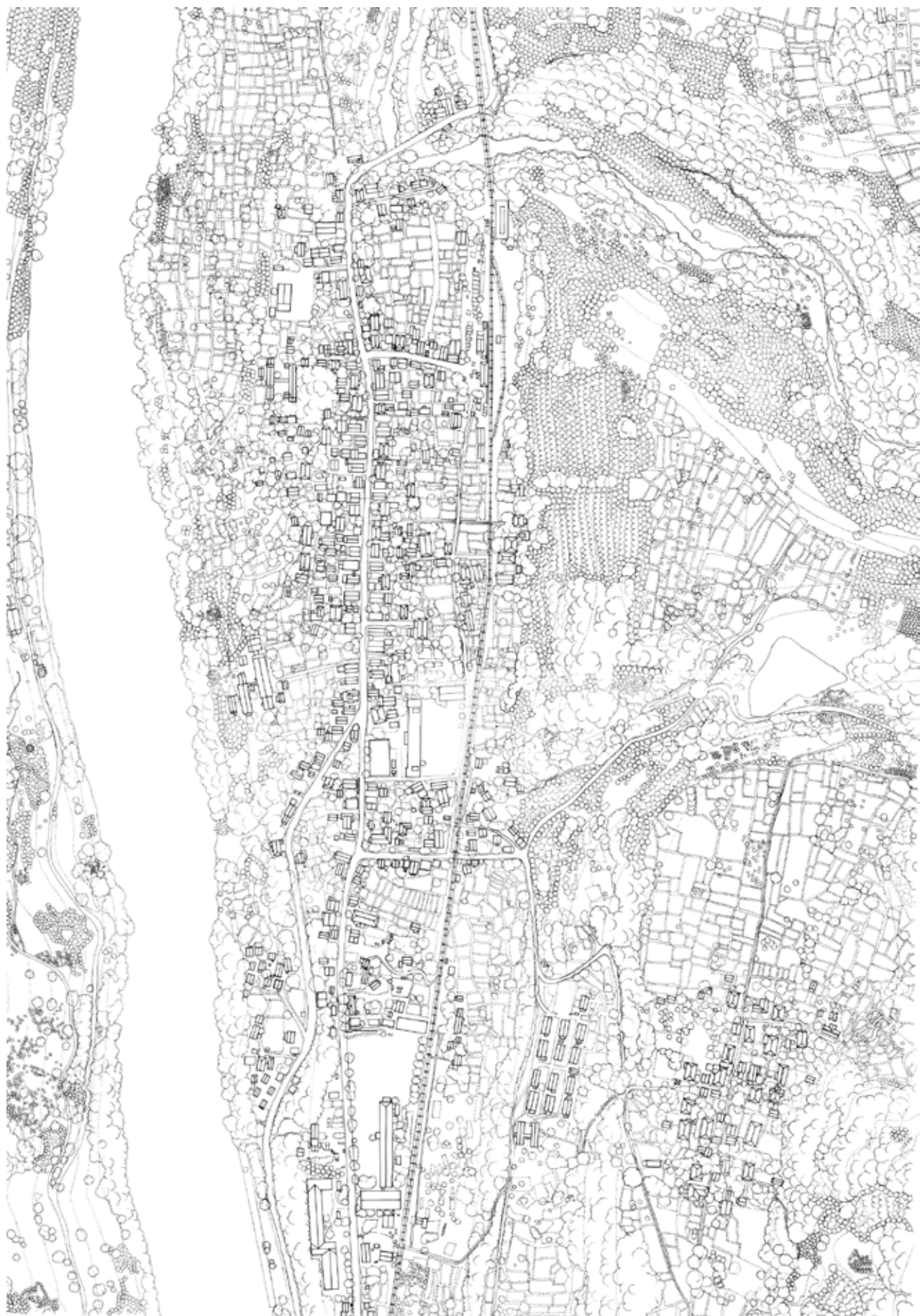


图 16 集落图 宫下地区 1968 年

## 第2節 桑原地区

村名の発祥は明らかでないが、桑ノ原村・桑野原村とも書く。只見川河岸段丘第3段目の平原に開かれた現居住地を中心に、山桑の繁茂が顕著で、古くから有利な交易産業の一つであった養蚕業の行われ易い立地と環境に恵まれた村邑であったと思われ、早くから人が集まり、集落を形成した。古記によれば河岸段丘第2段目に開かれた宮下村とは古くは一村を成していたといわれ、共に鎮守祭神は大山祇神で三島神社を社名とし、文献によると永正10年(1513)の勧請。ちなみに村の伝承では当村の三島神社は宮下村のそのの姉様と伝える。



写真 43 桑原地区 河越文書

村は古くから金山郷に属し、室町の頃には「曾利間」に柵が築かれ、二瓶安左衛門という村長が居て、村を支配したという。その後会津領となり、寛永20年からは南山御蔵入領。大谷組に属す。村高は文禄3年の蒲生高目録では68石余、寛永12年では69石余(桑原村年貢割帳)、文化15年の「村日記」(「福島県史」10巻下)と「天保郷帳」「旧高旧領」ではともに72石余。享保17年の家数25軒、竈28、人数男68女48の合計116人(「大谷組目録」)。化政期の家数は22軒(「新編会津風土記」)と小規模の村で推移した。

村の社会的変遷としては、元和2年(1616)2月9日、年中行事の春木山に、二の沢に向かった薪取りの村の男衆の大半が、大雪崩に遭遇して亡くなるという大事故が発生した。村長の子息も亡くなり、悲嘆した肝煎雅楽介は村を捨て流浪の旅に出た。後名主に大谷村郷頭家から人を呼んで就かせた。現在も2月9日は「ナデつき9日」とよんで百万遍の供養が行われている。村名主の河越家には慶長2年の宮下村との焼畑所有地にまつわる山論調停取扱書が残されている。三島町に現存する最古の文書である。同家には宗門改帳・年貢割付書・土地帳・御用留帳などおよそ4千点にあまる膨大な地方文書が残されており、大谷組は勿論金山谷郷諸村の歴史解明の資料として貴重なものになっている。

村には「愛宕様の火」という珍しい年中行事が残されている。2月24日の愛宕様にまつわる行事で、名主家の当主が村南山頂の愛宕神社に登拝し、一年間の火種となる聖火を火縄に請けて持ち帰り、各戸を廻って灯明に移すという内容の行事である。これと類似の習俗はかつて名主家の先祖の出た大谷村にもある。「サイの神」は江戸後期には実施されなかったようで、名主文書の享和3年「書上帳」には、当村にてはサイの神は焼申さず候とある。現在地区でおこなっているサイの神は「松燃やし」と称し、村人はあくまでもサイの神とは別だとしている。村の伝承・決まり事をかたくなに守り通すあらわれと見て取れる。

戦中・戦後を通じ只見川電源開発が活発化するにつれ、村にはダム工事関連の施設や労務者住宅などが林立し、急速に発展した。もともと農林業の基盤が脆弱であっただけに、村人の殆どが第二次産業関連会社に就労し、村は宮下村同様ベットタウン化した。その宅地街に残存する「荒屋敷遺跡」は我が国有数の縄文晩期の遺跡として知られている。

(文責 角田伊一)



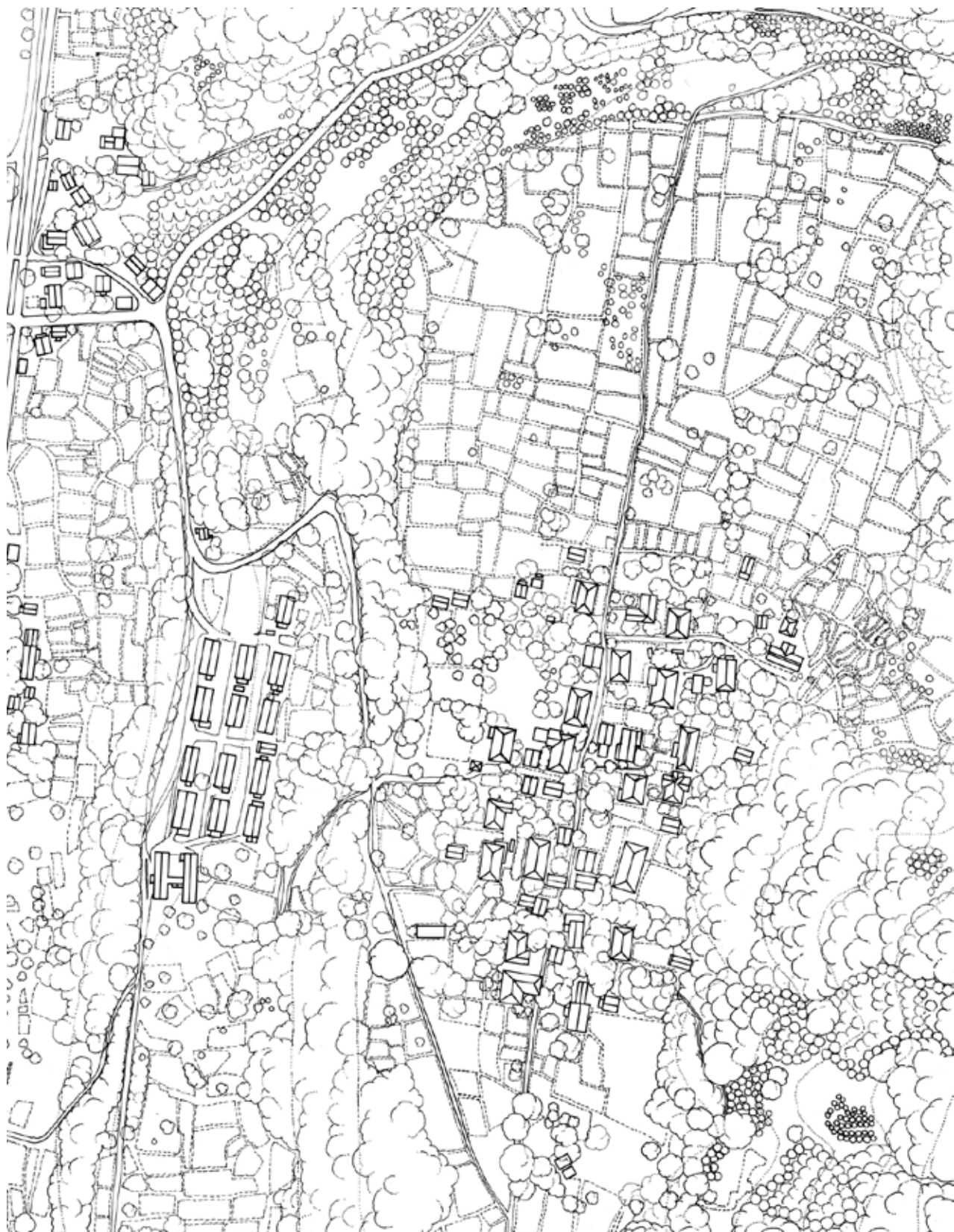


图 17 集落图 桑原地区 1968 年

### 第3節 大登地区

三島町で最も広大な河岸段丘・川井大登原の西端に開かれた集落で、早くから養蚕業を中心とした生業を展開し、戦後は葉煙草の生産に関わった。県会議員・町村長などを勤める家系を輩出し、地方自治の中心的役割をになった村邑としても知られる。

村の来歴は詳らかでないが、過去には隣村の川井村と一村をなしていた可能性がある。その一つに文禄3年(1594)の検地があり、「蒲生領高目録帳」に「河井おのほり 百四十四石三斗七升 小村弥介 河井 式百八石九斗五升 御倉入」と記されている。これは検地を受ける際の立会人(縄親)が川井村の肝煎であったことを示しており、大登村と川井村の縄親を川井村の肝煎が勤めたと解される。このことは文禄検地直前までは両村は一村であり、川井村を称していたが、文禄検地を契機に「おのほり」が独立し大登村が誕生したと考えることが出来る。この両村は同じ河岸段丘原に立地し、耕作地の境界は勿論、現在でも山林原野の分割が定まらず、「大登・川井入会地」として管理している。さらに村の小字に上中川井・下中川井の地名があり、両村とも川井村の松音寺を菩提寺としており、また姻戚関係の多いことなどからも、一村であった可能性は極めて高い。



写真 44 大登地区 サイの神

慶長2年(1597)桑原・宮下山論取扱書の立会人に「大のほり村肝煎 十郎左衛門、河井村肝煎 周防」とあるので、文禄検地後には大登村にも肝煎が置かれたとみることが出来る。以後の石高の変遷は享保17年155石余(「大谷組目録」)、文化15年の村日記(「福島県史10下」)では165石余、「天保郷帳」「旧高旧領」とともに165石余で推移。享保17年の家数33軒、竈41、人数男84女84の合計168人、馬16疋。産業として「楮在之紙少々漉申候、野沢郷より伊南伊北郷へ通塩駄賃取申候、女ハ太布、夏ハこかい少々仕候、其他励も御座候」(「大谷組目録」)とあり、この村は西方村から大谷村に通じる塩街道の宿駅であったことから、駄馬の飼育数も多く、これを利用した駄賃銭稼ぎでも潤った。

「新編会津風土記」には大登の村中に館跡があり、天正年中に横田山之内氏の臣・渡部長門が住んでいて、伊達政宗との攻防で敗走した山之内氏勝とともに漂泊したとある。村長の十郎左衛門はその嫡孫と記されている。この渡部家は維新後に造り酒屋を創業し、屋敷地内より湧出する清水を利用した地酒「大昇」を醸造した。明治43年「大沼郡治統計書」には年間273石を生産し、9,800円の売上げがあり、西川村の主要産業繭・薬用人参・林業に次いで第四位を占めており、大正八年には繭・林業に次いで第三位となり、生産量も463石、23,000円の売上高で名産の桐下駄18,000円を上まっている。しかし終戦後に廃業したが、酒蔵などの遺構は現存している。

村は広大な畑地を利用して、有利な換金作物養蚕業を興し、後葉煙草生産へと交代したが、林業生産や桐栽培にも力を注ぐ純農村としての誉れ高い村邑であった。そのため農耕儀礼・予祝と関わり深い民俗行事を多数残し、現在でも継承される種類は少なくない。特に「大登のサイノカミ」は著名で、伝えによれば四百年間一度も中断なしに続けられているという。またマタタビ細工の盛んなところで、伝統工芸士が居り、技術の伝承を行い、自らも生産に励んでいる。

(文責 角田伊一)





图 18 集落图 大登地区 1968 年

## 第4節 川井地区

只見川の右岸に形成された広大な河岸段丘上に開けた村  
邑で、伝承によれば天正時代の初期までは若松蘆名氏の領  
地で、地頭松本佐渡守の館跡があり、縄文晩期の「佐渡畑  
遺跡」の由来になっていると言う。この遺跡の近傍に馬場・  
的場跡があったが、町道小野川原線開設工事で消滅した。  
村の歴史は古く、古代の公道が村域を通過していた可能性  
が高く、伊佐須美明神の遷宮・四道將軍の通過と関わり  
のある伝説や地名が多く残されている。



写真 45 川井地区 だんごさしと道具の年取り

村名の由来は用水に恵まれていることによると思われるが、湯の岳の伏流水が2筋村域を北流し只見川と合する。この上山沢・下山沢の豊かな流水を利用して水田が開かれ、山間地としては異例の水田面積を持ち、年貢は他の村とは異なって米納が命じられた。天明の大飢饉では納入する米が無く、村人の半数が死亡し、多くが村を捨て他領へ逃散した。このため享保時代60軒もあった大村が三分の一に激減したことが知られている。

古文書には河井・川合ともあるが地形から川井と呼ぶのが正しい。村高は文禄3年208石余(「蒲生家高目録」)、享保17年234石余(「大谷組目録」)、文化15年の村日記(「福島県史10巻下」)では276石に増石している。その後の「天保郷帳」「旧高旧領」も同じ。享保17年の家数49軒、竈58、人数男152女130の合計282人。馬28、牛3疋。産業としては「村三ヶ一は紙漉申候、其の外ハ冬ハ女太布織仕、夏ハこかい少々仕候、其の外駄賃励も御座候」とあり、西方村からの塩荷を大登・滝谷村に輸送する塩街道沿の村でもあった。

村には永享12年(1440)僧鉄山が建立したと伝える曹洞宗松音寺がある。この寺は創建当時は一村同様であった大登地区に所在したと思われる。大登村の小字に寺ノ上・寺沢があるが、川井村の小字に寺の付く地名は残されていない。しかし寛文5年(1665)の寺院書上帳には「川井村松音寺」とあり、寛永の昔から無住寺であったと由来が述べてあるので、近世初期には川井地区に寺があったことは間違いない。ところで「松音寺一件記」(大登村「渡部家文書」)によると、享保17年4月、村の中央部にあった寺が、村を全焼する大火で類焼し、それから30数年後の宝暦11年(1761)に現在の位置に建造されたという。先年現寺の庫裡を修復した際、炉跡の礎石から、享保17年銘の女兒のものと思われる焼け爛れた墓石を掘り出した。現物は境内の多宝塔内に祭祀してある。

川井村は近世・近代を通じ純農村としての使命を遂行した村柄で、生業である農作物の豊穰を予祝するために先祖から伝承・継承された年中行事や講事をかたくなに守り通した唯一の村とも言っている。サイノカミをはじめ初田植、虫送り・刈上げ祭など、すべて四百年以上の伝統に裏打ちされたかけがえのない行事が数多く残されている。また伝説の多い村でもある。今は「ヌケットウ」と称する深い絶壁にえぐられているが、大昔まだ村と愛宕神社の豊かな森が地続きの時代、村に流れ着いた乞食の夫婦が、愛宕下の清水傍に住み着き、赤ん坊を産んだ。その清水は村人が大切にしていたもので、汚物を洗うと水が途切れると伝えられていた。ある日乞食夫婦が村人のいさめに背き、赤子のオシメを洗濯したところ、突如天地雷鳴し地抜けが起き、清水は痕跡も無く崩落してしまったという。昔は村居平と愛宕の森は地続きであったという由来話。

(文責 角田伊一)





图 19 集落图 川井地区 1968 年

## 第5節 桧原地区

村名の由来で「桧がたくさん自生した」というのは当たらない。村は只見川の形成した第2段目の河岸段丘原に営まれ、その一つ上の段丘春日野原は耕作地(畑)となっているが、周辺の山地を含め、桧の林相は確認することが出来ない。むしろこれらの平原を利用するために火を用いて耕地を整備するカノから来た語原も考慮すべきと思われる。



写真 46 桧原地区 鳥追い

村は中世から存続し、天正時代の初期までは若松蘆名氏の領地で、盛氏代に丸山城を築き家臣の内山淡路守を城代として住ませ、伊北郷山之内氏の動向を探らせたという。しかし弘治3年(1557)山之内氏が挙兵し、滝谷岩谷城と桧原丸山城を陥落して支配を広げた。このとき桧原には横田城主の三男山之内俊範を城主として住ませ、「山ノ内事跡考」によると永楽70貫文の地、桧原・川井・郷戸・阿久津などおよそ30数ヶ村が分け与えられたという。山之内氏は天正18年に滅亡したが、係累に会津の碩学横田三友俊益が居る。

村は古くは金山郷に属し、山之内氏亡き後は会津蒲生氏の支配下に置かれ、寛永20年からは南山御蔵入領となった。村高は文禄3年の蒲生高目録では281石余、寛文5年の「滝谷組風土記」では280石余、文化15年の村日記(「福島県史10巻下」)では316石余、「天保郷帳」「旧高旧領」も同じ。延宝9年(1681)の「滝谷組古記」(片山家文書)によると家数26軒、竈34、人数男98、女79の合計177人。寛文5年(1665)の風土記には家数16軒、竈22、人数男75、女71の合計146人と記してある。村の産業として寛文風土記に「楮有紙漉き四両程、漆、木の実多い年は金44両程の余剰代有」と述べてある。

村は明治24年、沼田街道が川井新道の工事を終え全線開通するとともにその様相が一変した。それまでは上峠を通る駒啼瀬街道が本道りであったから、村を通過する人も荷駄も皆無であったが、沼田街道が若松から桧枝岐村まで全線馬車道として開通すると共に、村は多くの人馬や車で活気を呈した。その余勢をかって明治40年に上峠新田を開発したが、用水路の勾配不具合のため失敗した。現在は堤のみが満々たる水を湛えている。

大正9年8月、村中に中ノ川水力発電所の桧原変電所が建設された。その翌月地区の大半の家庭に電気が引かれ通電した。近隣ではまだランプやローソクの時代であったから、「桧原の文明開化」と羨望された。

昭和16年に国鉄会津線が柳津から宮下まで開通した。しかし桧原駅の建設予定はなかった。既に数年前からこの情報をつかんでいた村の有志は、「桧原停車場設置に関する請願」を強力に展開し、当時の運輸省に数回足を運び陳情した。「三島町史」には請願文が所収されているが、当時は冬期間は積雪のため沼田街道は川井新道などで通行止めがおこなわれており、学童の通学や郵便物の通送は混乱をきたしていたことが分かる。学童の通学難解消のためにも、村中に駐車場の設置は不可欠である、と請願の理由が綴られてある。この運動の結果、桧原無人駅が誕生した。

しかし時代は輪廻するもので、高速交通時代を迎えた今、かつて上下二里の峠路を徒歩で越した駒啼瀬峠の真下にトンネルが穿かれ、新国道と換線することにより、天下の交通の難所川井新道は閉鎖され、村は近世期同様人馬・車の通行が途絶えてしまった。

(文責 角田伊一)



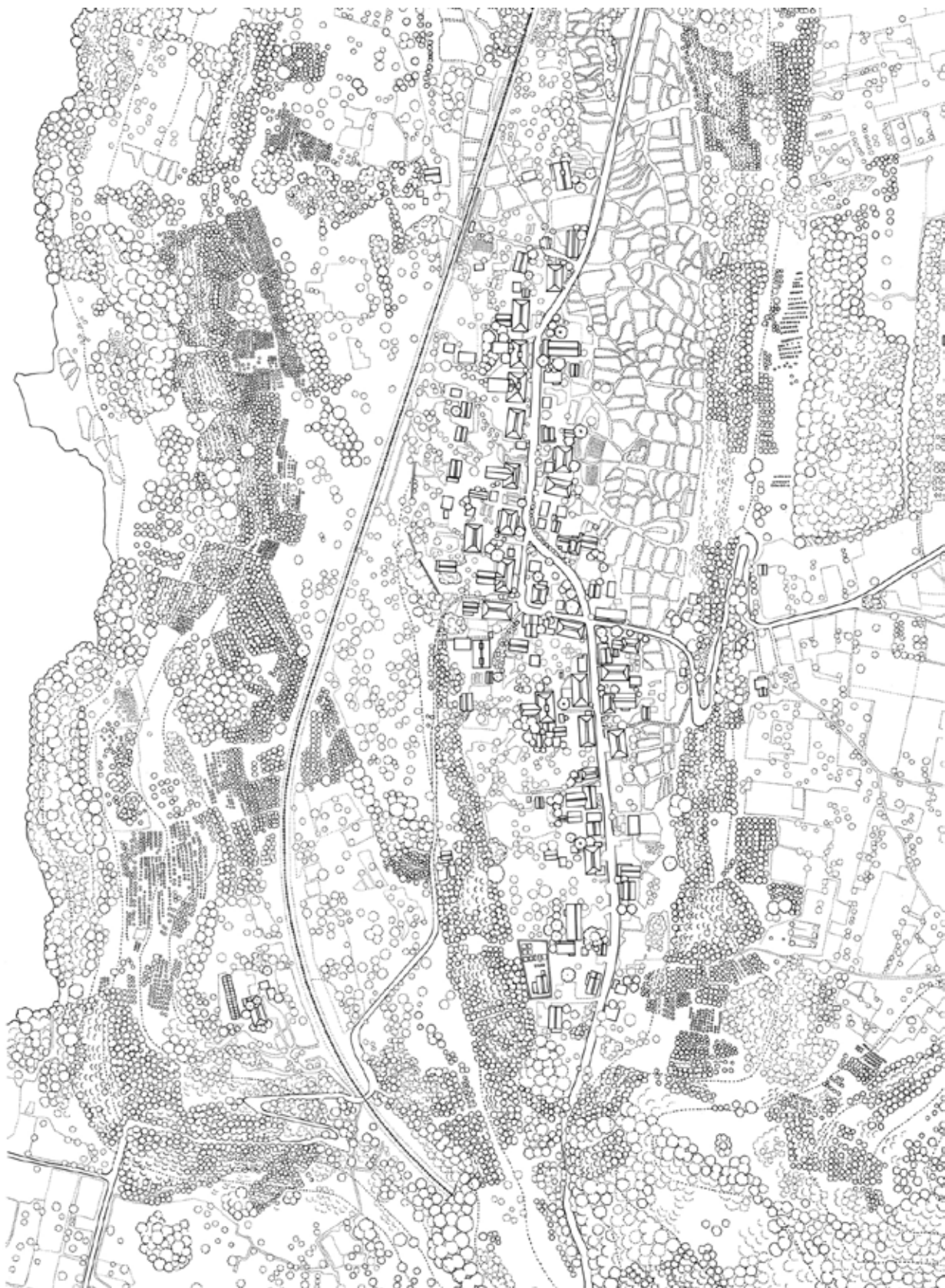


图20 集落图 桧原地区 1968年

## 第6節 滝谷地区

中世期から開けた城下町の滝谷には、村の来歴や歴史を綴った書物が沢山残されており、どれが真実を伝えているのか選定に迷うところである。享保時代滝谷組郷頭を勤中した滝谷岩谷城主末裔・山之内吉右衛門の著した社寺縁起録から、地名の発祥などを探してみたい。只見川水系河岸段丘の最高位部(6段目)に上滝谷原が開け、ここに人家があった。昔聖徳太子像を安置した小堂があり堂岩と呼ばれた。近くの深い谷に高さ三丈余の滝があり、滝谷の地名が生まれた。縁起書にはこうある。「弘治元年(1555)8月18日大風雨大地震ニテ堂岩山3分ノ2崩レテ太子堂坊舎人家一軒モ不残打潰ス、人馬不残死ス。其頃ハ民家処々方々ニ居住ス。或ハ中村・荒町・館ノ下・原・大我野・若林ニ四、五軒ツツ居レリ、此ノ者共ハ無恙今ノ滝谷ニ引移リ一ヶ処ニ集ル」。この当時は豪族を中心とした血縁だけの散居村の営まれる時代であったから、滝谷は弘治の大地震を契機に、現在の居平に集まって集落を形成したと考えられる。



写真 47 滝谷地区 サイの神

また別の資料では、滝谷は若松に拠点を置く蘆名氏の領地で、伊北郷横田に跋扈する山之内氏の動静を探索する最前線基地として屈強な山城が築かれ、蘆名氏四天王の一人松本図書重臣が城代として住んでいたという。岩谷城は明徳元年(1390)の築城とされる。ところが弘治元年の災害で人心が混乱している折、近くの大成沢・沢中に陣を構えていた、横田山之内俊清の二男山之内俊政と三男の俊範が岩谷城を攻略して占拠した。以来滝谷は山之内氏の領地となり、俊政を初代として幕末まで家門は繁栄した。滝谷村はそれ以後山之内氏の城下町として繁栄し、近世期には子孫が土着して大割元や郷頭役を勤中した。

滝谷の村勢は、村高は文禄3年の蒲生高目録に171石余とあり、寛文風土記には158石とある。延宝9年の「滝谷組古記」は140石余、文化15年の「村日記」(「福島県史10巻下」)、「天保郷帳」「旧高旧領」は共に190石余とあり、時代により変化の大きかったことが分かる。「滝谷組古記」の家数は25軒、竈35で人数166人。「滝谷組風土記」(寛文5年)には家数20軒、竈30、人数男99、女69の合計168人、馬10疋とあり、産業としては「楮壺両壺分程、炭ヲ焼金壺両程之売、余蠟代大概十八両程」とあり、他村に比べて少ない数字となっている。しかしこの村には豊富な鉛を産出する大館鉱山があり、村総出で掘削し、産出量の壺割が還元される仕組みになっていて、総元締山之内氏をはじめ村人にとって有利な産業であったことは間違いない。

村には臨済宗岩谷山金竜寺がある。村の領主山之内俊政が永禄10年(1467)に建立。開祖は元堂岩に祀られた法相宗松原坊の僧侶叙法(弘治地震で死亡)の一子叙延で、禅宗に改めたと吉右衛門の縁起録にはある。同年俊政は諏訪大明神を若松より勧請し、鎮守として郷村の守りを固めたとも伝えられている。

滝谷村は若松から伊南・伊北へ通じる沼田街道の宿駅として繁栄した。駅内の構造は外部からの進入を遮断できるつくりで、巡見使や幕府高官の休泊地として多く利用されたが、明治24年以降は、沼田街道開修による路線の換線により交通が遮断され、急速に疲弊した。代わりに国鉄会津線を通す計画を進めたが、駒啼瀬峠がネックで実現出来なかった。

(文責 角田伊一)



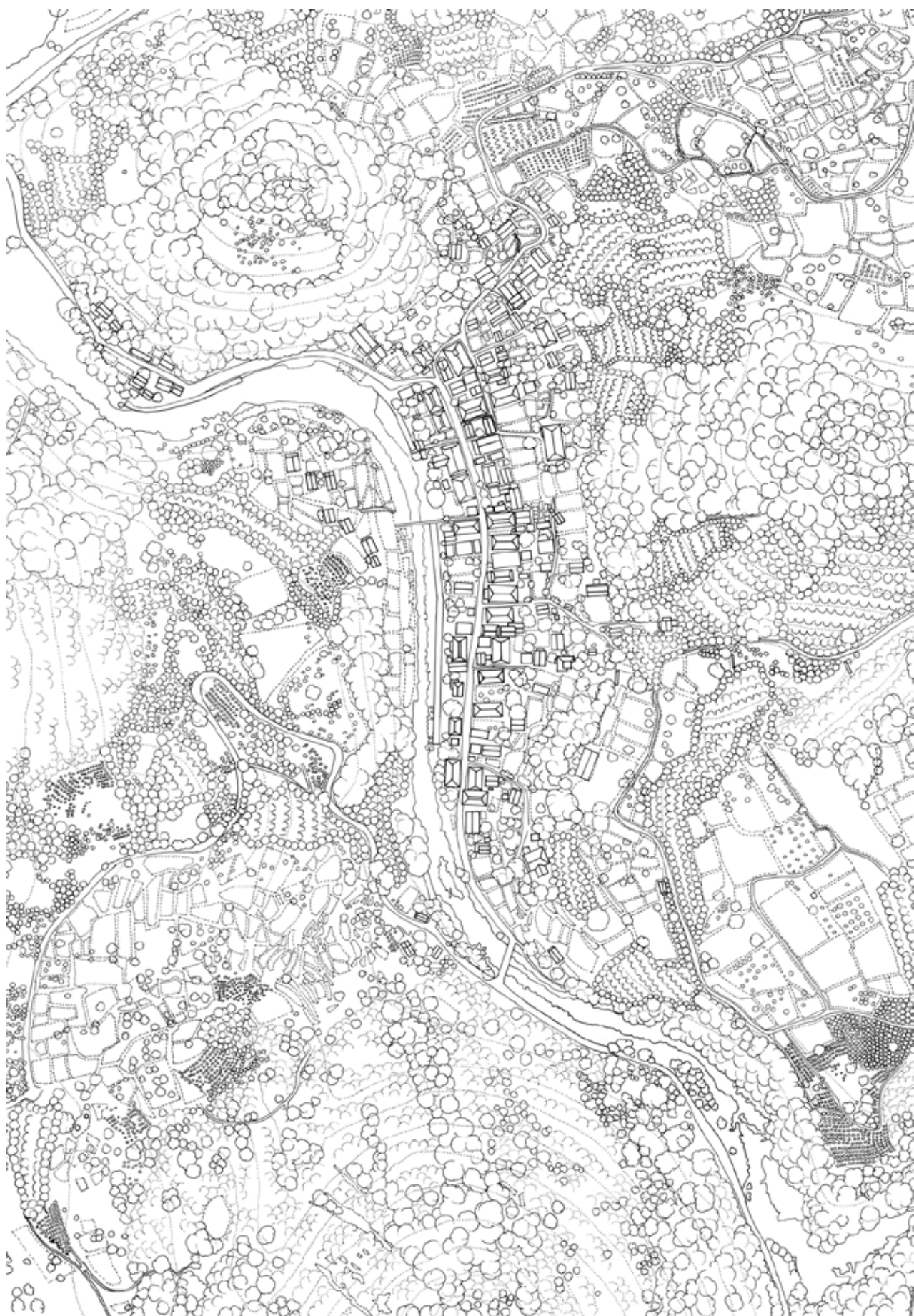


图 21 集落图 滝谷地区 1968 年

## 第7節 大谷地区

近世期一貫して大谷組郷頭の居住したこの村には膨大な地方(じかた)文書が残されている。中でも文化年間に会津藩が編纂した「新編会津風土記」の下調べ用として書上げられた「地誌書上帳」「大谷組風俗帳」「由緒書上帳」「御尋ニ附書上帳」「大谷村旧事雑記」など、組村の来歴、地勢、村勢、産業、生活実態を知る上での第一級の資料が多い。享和3年(1803)村名主二瓶孝次郎の著した「大谷村旧事雑記」には、村名の由来を「往昔纔(わずか)の湖水



写真 48 愛宕様の火

にて其名を鳥海と云、何ツ頃か干潟と成り大イなる谷と成ル故ニ大谷村と号ス」と記してある。また「大谷村元六間半を始りと云は、本村太郎右衛門、太郎兵衛、中居与右衛門、陣内、鳥海平右衛門、治郎左衛門一間前、林崎喜四郎半間前、右七人ヲ大谷村元百姓と云」と述べた貴重な一文がある。大谷村元百姓とは「基百姓」の意で、村の成立に関わった生え抜きの権利者、あるいは一族の代表者、別の言葉で表現すると在地の土豪ということになる。近世期には百姓の生活を維持するため、田畑を割替え配分する「土地分け」が普通に行われたが、大谷村の場合はこの7人で田畑総面積を6間半に分割し、1間前(約7町歩)の配当を受けた基百姓は、高分けした分家の数だけ三分の一、六分の一と順位に従って持分を分割した。このような資料は会津では極めて珍しい。

村は古くは金山郷に属し、室町期まで横田山之内氏の支配を受けたが、寛永20年からは南山御蔵入領。大谷組に属す。村高は文禄3年の蒲生高目録では169石余、享保17年の目録では204石余、文化15年の村日記(「福島県史10巻下」)では237石余、「天保郷帳」「旧高旧領」には238石余とある。「大谷組目録」(1732)には家数62軒、竈77、人数男201、女152、合計353人、馬20疋、牛1疋とあり、産業として「野沢郷より伊南伊北へ商塩通り申候、駄賃少々取申候、雪ノ内女太布仕り楮少々有之紙漉申者少々御座候、夏ハこかい多仕候」とあり、養蚕と宿駅稼ぎの多いことが述べてある。村は近世期の幹線道、銀山街道、別の名伊南伊北街道の駅所に指定されていた。「地誌書上帳」(文化3年)には「一若松御城下より西ニ当坂下通にて道法十里五間。一家数三拾軒、村居東西参拾貳間、南北三町貳拾四間、東西両側に家居仕。一伊南伊北江之通にて馬継ニ御座候、村中に御高札在之、砂子原村より当村迄壺里拾六町四拾六間にて継ぎ、間方村迄壺里参拾貳丁貳間にて継ぎ申候、村より拾五丁寅之方ニ当壺里塚在之、村より南之方中ノ橋ニ壺里塚在之候処先年川欠けニ罷成申候、拾五丁貳拾間在之候」とある。高札については「新編会津風土記」に「村中ニ官ヨリ令セラルル掟条目ノ制札ヲ懸ク」とあり、会津五街道駅所と同様の記載内容である。大谷宿は諸国巡見使の定宿泊地と定まっており、郷頭・名主宅は御本陣として利用された。

村内の古刹円福寺は寛正5年(1464)の創建。伝説では大同2年僧徳一建立の源導寺があったという。村は水難が多く、文政3年(1820)の洪水では大谷川が塞止湖と化し、ほぼ全戸が流失した。十石淵の伝説では、村人と仲たがいした源導寺の和尚が、「邑に水難が絶えぬように」と怨念入水したというものである。他に石上峠の伊佐須美伝説。高倉宮伝説など数多くある。鳥海には遺構の確りした山城が現存する。空堀跡が顕著である。

(文責 角田伊一)





图 22 集落图 大谷地区 1968 年



## 第8節 浅岐地区

村は大谷川の中流域にあり、南東部より流れる入山沢との出会いに形成された小規模の河岸盆地に開かれている。村を取り囲む山域は急峻で、耕地はすべて村の周辺に開発され、水田として利用されるが、常に洪水の危険にさらされている。生業の大半は、かつては林業中心であったが、只見川電源開発が進むにつれ、他産業に就労する傾向が強く、昭和50年代には農業で生計を営むものではなく、町内の職場や町外の企業に就労し、生計を維持する家庭が大半であった。

村の歴史は詳らかでないが、地名から類推すると、古代・中世にかけて在地の豪族を中心に繁栄した村邑ではなかったかと思われる。ちなみに現行の小字名でも、西屋平・庭口・安万沢口・遠瀬戸・出入・間口・秋通口などがあり、地形をつなぐと豪族屋敷、または館跡の存在が髣髴する。

古文書では朝又・浅俣・浅又とも書く。古くは金山郷に属した。室町期までは横田山之内氏の支配下にあり、「会津四家合全」によると、隣村大谷村鳥海に館を持つ五十嵐豊後守の領地に加えられていた。その後は会津領となり、寛永20年からは南山御蔵入領。大谷組に属す。村高は、文禄3年の蒲生高目録では83石余、寛永7年「加藤家分高帳」には80石余とある。また享保17年「大谷組目録」には89石余、天保2年「大谷組御手鑑」には91石余と記されている。人口の変遷は、享保17年大谷組目録に家数38軒、竈40、人数男95・女73、合計168人とあり、天保2年の御手鑑には家数31軒、竈32、人数男75、女72、合計147人とある。

生業・産業は「大谷組目録」に「雪之内ハ女太布仕、夏ハこかい仕候、外ニ励無御座候」とあり、また享和3年「御尋ニ附書上帳」には「当村産物 雪中男ハ薪ヲ取、女ハ太布少々仕候」と記されており、余蠟御買い上げ金の期待出来る漆木の栽培も他村に比べ著しく少なく、文字通り他に励みになる産物の無い村であったと思われる。とくにこの村は近世期の主要街道、銀山街道に沿っていたものの、隣村の大谷村・間方村と異なって駅所ではなかったため、塩荷や商荷の駄賃取りは一切手出しが出来ない決まりになっていた。村域の大清水山に作業場を構える木地師の生産した鍬柄や小羽板などの輸送権利も、間方村の百姓が持っていて、しばしば論争や出入りが行われた。この権利は近代になっても変更されないため、村では明治3年田島民政局に「人馬継立願書」を提出した。願書の趣意は、古来の習慣(制度)により駄賃銭になる商荷や御用向の駅荷は大谷・間方と残らず継ぎ立て、浅岐は無賃荷だけ助郷させられており、1銭の励みにもならず、連々困窮し、つぶれ家になる者も出ているので、駅所に指定してほしいという内容である。当時戸長を勤めた諏訪家の古文書には、この願書が採択されたと伝える内容のものは見当たらない。

このように制度上しいたげられた歴史を持つ村人の結束は固く、村の決まりや伝統を遵守する気風は有数のものがあり、年中行事や民俗行事には独特のものがある。とくに浅岐のサイの神は他村とは似ても似違わぬ内容と形式のものであり、極めて独自性に富むものである。しかし平成15年以降実施されておらず、早期の復活を期待したい。



写真 49 浅岐地区 サイの神

(文責 角田伊一)

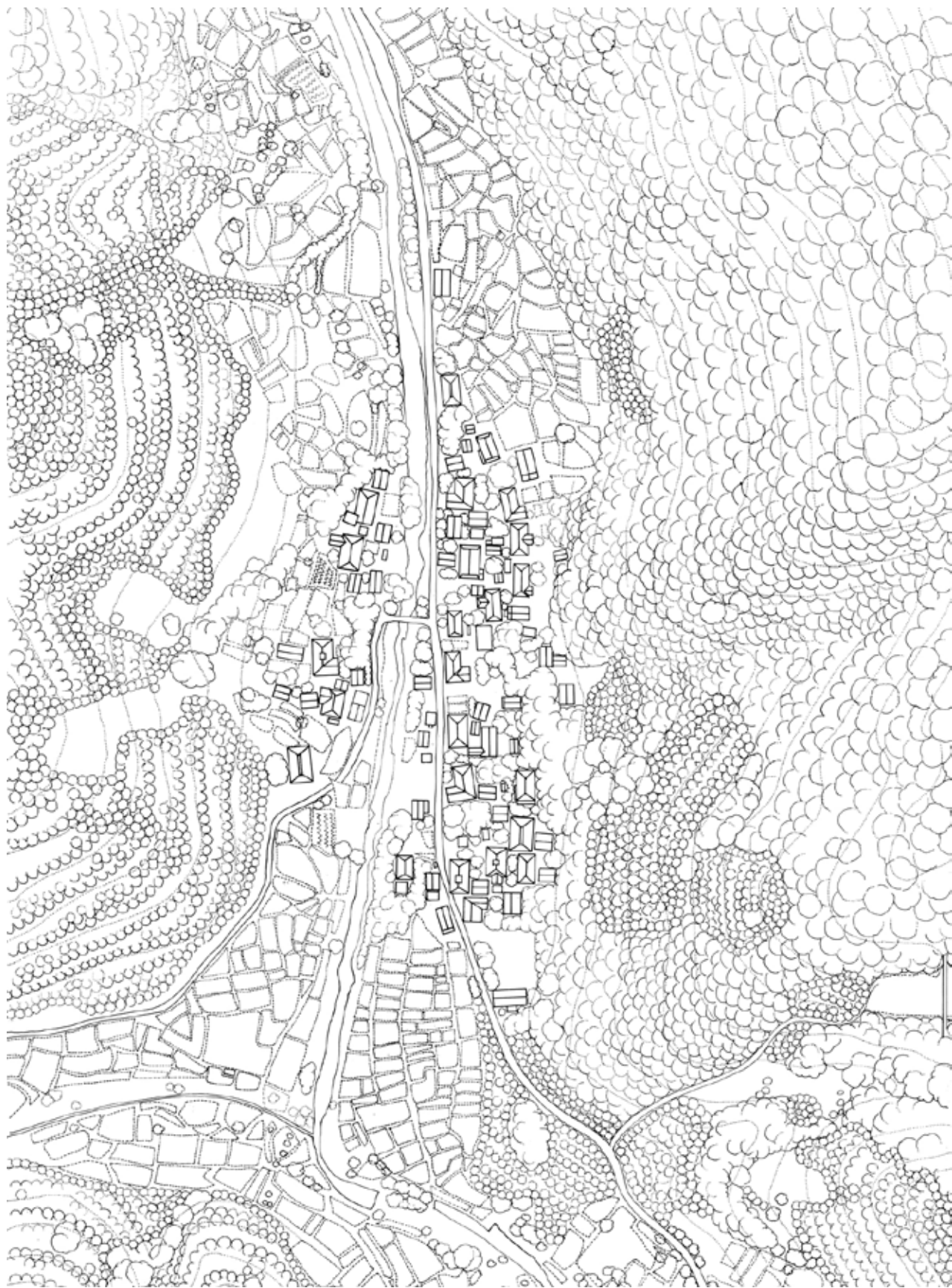


图 23 集落图 浅岐地区 1968 年



## 第9節 間方地区

明治後半、沼田街道全通後に書かれた「村柄書上帳」（「河越家文書」）に、間方村は次のように述べてある。「間方村 四面深山最僻遠之地ニシテ道路高低車馬不便也、南十余丁ヲ隔テ入間方ノ枝郷アリ、地形高山ノ麓ニシテ溪谷之間耕地アリ、東西数里山岳連り南廿余丁ヲ經大沢ヲ以野尻之境界トス、北方山ヲ越谷ヲ隔テ浅岐村ノ界トス」。交通網が整備され、政治経済の中心地が宮下村に移行して以来、現在でも間方地区は僻遠の地と呼ばれている。しかし、野尻村に御用場、田島村に御蔵入代官所の置かれた近世期には、役所とは最短距離の位置にあり、公道でもあった銀山街道の駅所にも指定され、郷頭居村の大谷村に次いで殷賑をきわめた歴史がある。



写真 50 間方地区 志津倉登山道

駅所については文化3年「大谷組地誌書上帳」間方村の項に「伊南伊北へ之通にて馬継に御座候、大谷村より壱里参拾式丁式間にて継、野尻組野尻村迄式里式丁にて継送申候、村より丑之方拾六丁三拾式間に壱里塚有之、又村より申之方拾九丁式拾八間に一里塚有之候」とあり、また天保9年「間方村明細帳」にも「当村駅所に御座候」と記されている。平成初年この村で民俗調査を実施した折り、江戸時代に宿屋をしていたという家の土蔵に、夜着と称する袖付きの綿入れ布団三拾組が保存されているのを確認した。ほかにも屋号や商号の持つ家が多数あり、美女峠麓の宿駅としてそれなりに繁昌したことが知られる。

村の歴史は詳らかでないが、古書類の伝では早期に開かれたことが窺われる。この地方は古くは横深郷と呼び、大同2年（807）、僧徳一が前坪山の麓に横雲山高野寺を建立し、自ら本尊秘仏大日如来像を彫り安置した。寺は仁平元年（1151）の戦乱で焼失したが、秘仏は佐賀瀬川村（現美里町）興隆寺に現存する。寺跡は堂平にあり、等間隔に配置された礎石と思われる巨大な土台石らしきものが残されている。美女峠の悲恋物語やカシャ猫の伝説は高野寺との関わりが大きい。

近世初頭村は木ノ松沢・並木・中山・入間方の四ヶ所に散居村があり、総名間方と号したと「間方村覚書」には記してある。その後街道の整備があり、今の居平に駅所を設置する目的で集村が誕生したものと思われる。銀山街道を挟んで下・上居平に区分けされているのは、新しく屋敷地の街割りが行われたことを示している。

村高の推移には驚くべき内容がある。文禄検地では88石余が蒲生家の高目録に登載してあるが、寛永19年の加藤家分高帳にはほぼ倍増の160石が記されている。これは隠田摘発による過料高72石が加算され、しかも免率も6ツ5分に倍増され、百姓の多くが死亡し、逃散した（「覚書」）。享保17年161石余、文化15年の「村日記」167石余、「天保郷帳」も同じ。つまり過料高は棒引きされなかった。近年村の有志が昔の隠し田と思われる広大な水田跡を発見したという。享保17年の家数30軒、竈38、人数男93・女67、合計160人。馬11疋、牛1疋。近世期の村人の生業・産業は「大谷組目録」に「雪之内ハ男ハくわがら（鍬柄）を取近村へ売申候、女ハ太布仕候、夏ハこかい仕候」とある。ほかに駄馬運送など宿駅業務の利潤もあった。また、村には木地師の住む特区があり、数世帯が志津倉山で生業を続けた。鍬柄や曲げ物、曾木板を製造し若松城下に出荷した。

（文責 角田伊一）



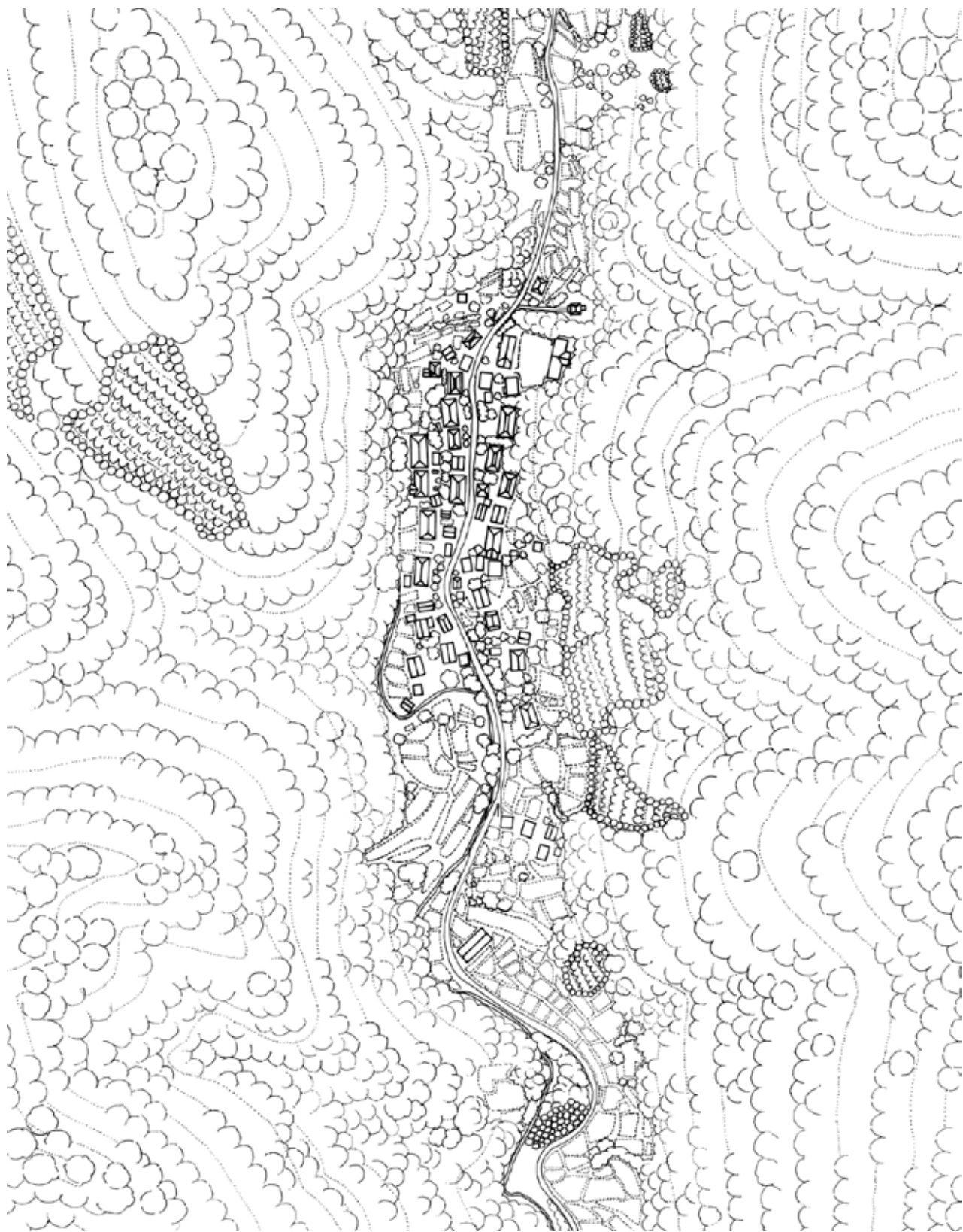


图 24 集落图 間方地区 1968 年



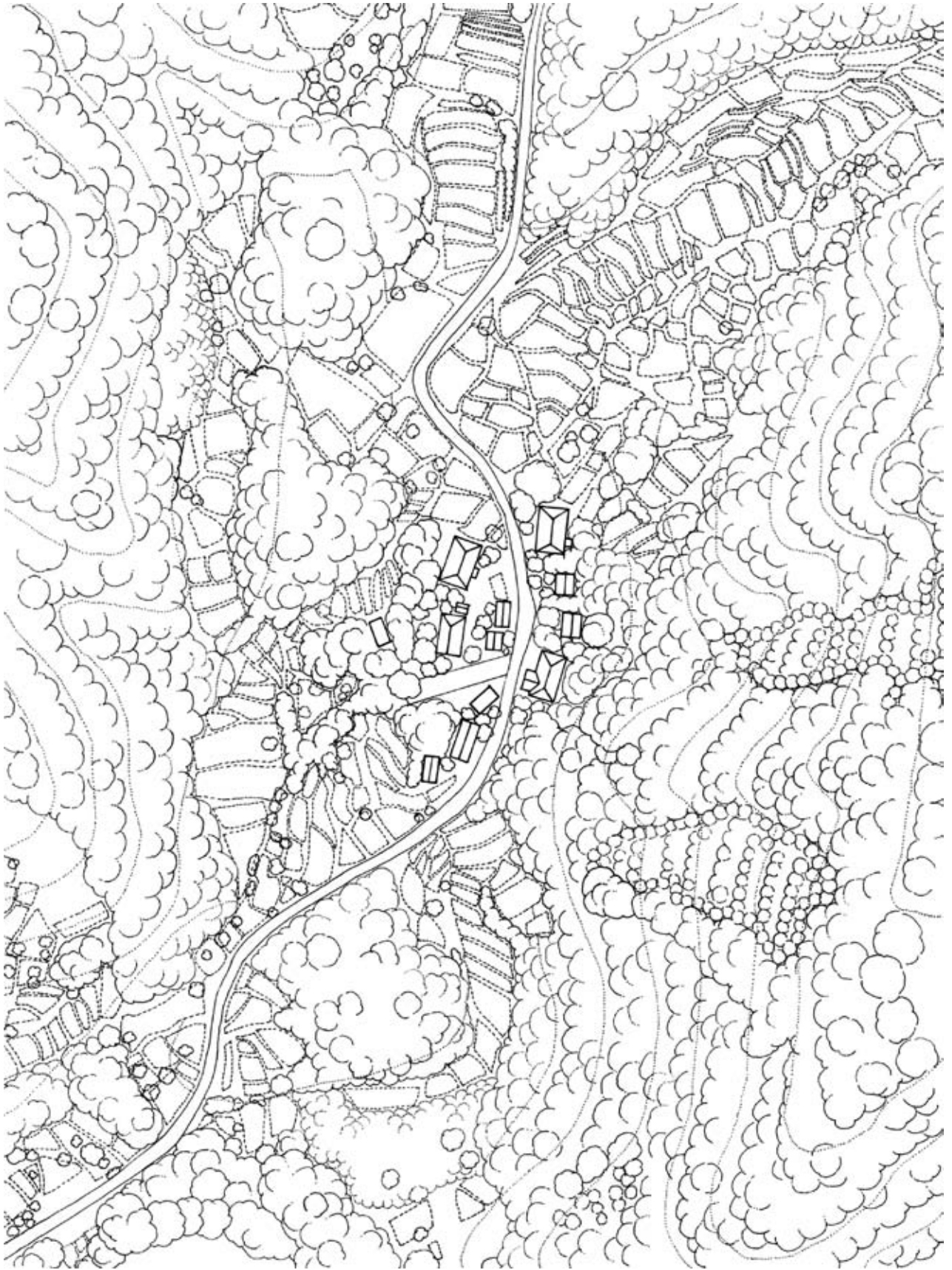


図 25 集落図 入間方地区 1968 年

## 第10節 西方地区

天文22年(1553)山内右エ門氏信は、大高寺領並びに佐藤信重の所領を押領、車峠に城館を構えた。棟上を終えたら何処からか鴨が飛び来たって吉兆を現したので「鴨ヶ城」とよんだ。

館下には山内・小柴・小平・飯塚・小堀・青木・二瓶の七党を配し、横田山内領の東辺を固めていた。居平は只見川の上位河岸段丘上にある砂礫土の堆積大地である。平坦大地としては近隣第一の面積をもっている。しかし透水性が高く水源地から居住地までの300㍍の通水に住民は並々ならぬ知恵と工夫と努力を払いその時代時代の技術を駆使して半農半士の生活を展開していた。小柴は食糧の生産保存に、小平は金属加工特に刀剣鍛錬づくりに、小堀は甲冑の組み立てから衣類の紡織染色まで、氏姓ごとに集結して同姓同職の所謂「氏族社会」を形成していたのである。



写真 51 西方地区 虫送り

○西方で最も古い文化財は西隆寺の弘仁佛で弘仁2年(811)

作と伝えられている。木造の聖徳太子立像である。

○銭盛長者が寺沢に仏教道場松竹庵を建てたのが貞元2年(997)で古代寺社に関わるものと考えられる。

○文治5年(1189)平泉の軍攻によって会津四家が生まれた。

○建久元年(1190)季基は金山谷に三島・伊夜彦・諏訪の各社を建立する。

○延元元年(1336)小川荘から奥山荘へ移入

○正平3年(1348)金山谷山内軍は北軍直義につく。

○応永19年(1412)大飢饉。

○享徳3年(1454)関東管領上杉憲忠謀殺される。此れにより沼田開通はなくなった。(栃木県沼田には室町時代関東管領上杉憲忠の城館がおかれていた。)

○永正元年(1504)佐藤頼信伊豆より流れ御坂山大高寺を再興、山・羽黒・延命地藏を沼田に祀る。居館銭盛にあり、銭盛長者の伝説の人となる。

○天正六年(1578)鴨ヶ城主重勝義父の野沢城主大槻氏と芦名氏との諍いに関与し敗れ城中にて自害する。

○天正11年(1589)仙道から伊達政宗が侵攻西方山内氏は領主・領土を奪われ滅亡して会津に帰属した。

○文禄3年(1594)太閤検地で西方の石高は425・83石、戸数106、人口402人以上のように戦国・武家の時代は領主によって国情は変動し、住民は神仏によって心の安寧を求めている。

○近世になり統治組織が安定し村役や郷村制が確立し、産業交通が発達して金山谷の大部分は天領として田島に代官所を置き、漆、蠟、和紙等の上納地となった。一般にはこのような土地を御蔵またはお蔵入りとよばれた。寛永20年(1643)から断続的に5回行われた。民政は安定し庚申講・観音講・古峰代参等が盛んになり、寺の大修理が施工された。

天保3年には上名主下名主の上に田代から代名主を招き村の統率に当たってもらった。

このような時代的変遷に対応して伝統行事の『年おくり・年迎え』『農作祈願・安全祈願』がまた『神仏崇拜・祖先供養』が慶安のお触書を軸として村定めや家風として、毎年伝承されてきた。一人一人に個々の生活意識があるように集落には集落ごとの志向気質がある。明治初年の若松縣の時代、田島や猪苗代と並んで当集落には出張所が設置された。南山と若松、若松と越後をむすぶ交通の要衝にあり、大村で宿あり店あり、酒あり人あり情けあり、その上正月から稲荷や弥彦の初詣や、初午祭・花祭り等の節々の行事が適当に組み入れられて、訪ねる人々に癒しと安らぎと夢をあたえる村であった。



明治後半から昭和の中ごろは、人口も多く過疎のど真ん中にある現在では想像もできない村の盛況ぶりであった。例えば盆踊りなどは、県道を通行止めにして、しかも二重の輪になって踊っていたし、休憩時間の校庭は学童の嬌声で、畠の人々は会話ができないほどであった。何処の家をたずねても家人の居ない家はなく戸口の開いてない家はなかった。時代的全国的趨勢には抵抗も対抗もしようとは想わないが、今後の集落の課題として、現在ある施設の利活用、手を加えなくてもいい自然の資源を、現代的に蘇生させる。

（文責 小柴七治）



图 26 集落图 西方地区 1968 年

## 第11節 大石田地区

大石田の地名について、集落ではオウシダと呼んでいたが最近では漢字通りにオオイシダと呼ぶ人もある。オウシダとは、半島流の大人（ウシ）の事でお大人陀が原形で、貴人の住まいを表していたという。このことは秦氏の移住と言う伝承と密接な関わりがある。〔続日本紀〕によると百済の大量の難民があった際時の朝廷は、大仏や養老の（五十戸をもって一邑となす）の例にならい一集落を五十戸以内に制限し、必ず日本の神仏も信奉する事を条件として北国に開放した。

この事から考察すると、大石田の高尾神社・弥彦神社・三坂山大高寺・金岩山金秀院等の集落の信奉を集めている諸神仏は移民の条件を満たしたものだっただけかも知れない。

集落の氏姓は、この秦氏と渡部（辺）氏・五十嵐氏が主で次は飯塚氏である。

柳津町の藤・諏訪町や、三島町の名入・高清水など昔只見川の渡しがあった所の両岸には、今でも渡部姓の者が居住している。渡部は渡し部で川の舟運を担当していた。往古当地は蜷川ノ荘あるいは小川ノ荘に属し、府庁は現在の新潟県阿賀野町津川にあった。

ここには〔高倉宮以仁王〕の伝承があり、渡部は宮の従者源渡部唱に所縁があり津川地方には比較的多い姓である。五十嵐もこの地方の五十嵐村・五十嵐川・五十嵐神社に由来した姓と考えられる。飯塚は集落と小川を一つ離れた中野集落に集中し、江戸中期に柳津町や只見地方に移動したと言われている。秦氏の移住は年代も古く虚空蔵様山に近く、渡部氏は小川ノ荘にむいて上の方に、五十嵐氏はその中間と見られる居住空間にある。

新編会津風土記では、次のように誌している。

『大石田村 端村中野

府城の西に当たり行程九里、家数四十軒、東西一町六間、南北二町三十間二散居

—— 共二河沼郡牛沢組麻生村ノ山ニ界フ』

とあり、端村中野家数五軒とある。中野は現在2戸であるが大石田本村は現在数62戸で江戸末期と比較すれば、格段の繁栄ぶりである。

縄文期の遺跡として居平遺跡と高尾原遺跡がある。

最近居平遺跡が発掘され出土土器から縄文中期から後期の遺跡であることが確認された。中期前葉の五領ヶ台式土器と共に、試掘された水田床の中には、縄文後期の石囲炉も見られている。いずれも三島町の貴重な遺跡として特筆すべきものである。

次に神仏の移入は三坂山大高寺は、慧日寺法相宗徳一の開基とされ高寺恵隆寺と同期である。

伝承だけが先行しまだ文書遺物等の発見がないので、今後の調査が待たれている。別院虚空蔵堂は創立年代は不詳であるが、法印信悦の建立と言われている。虚空蔵尊の木造立像と賓頭盧尊者の坐像が安置されている。村では『おびんずるさま』と呼んで崇拜している。他に伊弥彦大明神、諾冊二神、大彦命を祭神とする高尾神社。アガリアゲには地藏堂があり、西に薬師堂中野には毘沙門堂がある。講では山神講、古峯講、庚申講があり、これらは主として男性が、観音講には女性が参加し、地藏講のように子供も参加する講もある。古い交通では越後～野沢～大石田。大石田～高倉～只見の幹線に西方経由の若松路もある。町内最古の遺跡のある当集落は、美坂高原を後背に控え将来の発展が期待されている。（文責 小柴七治）



写真 52 大石田地区 オナカナシ



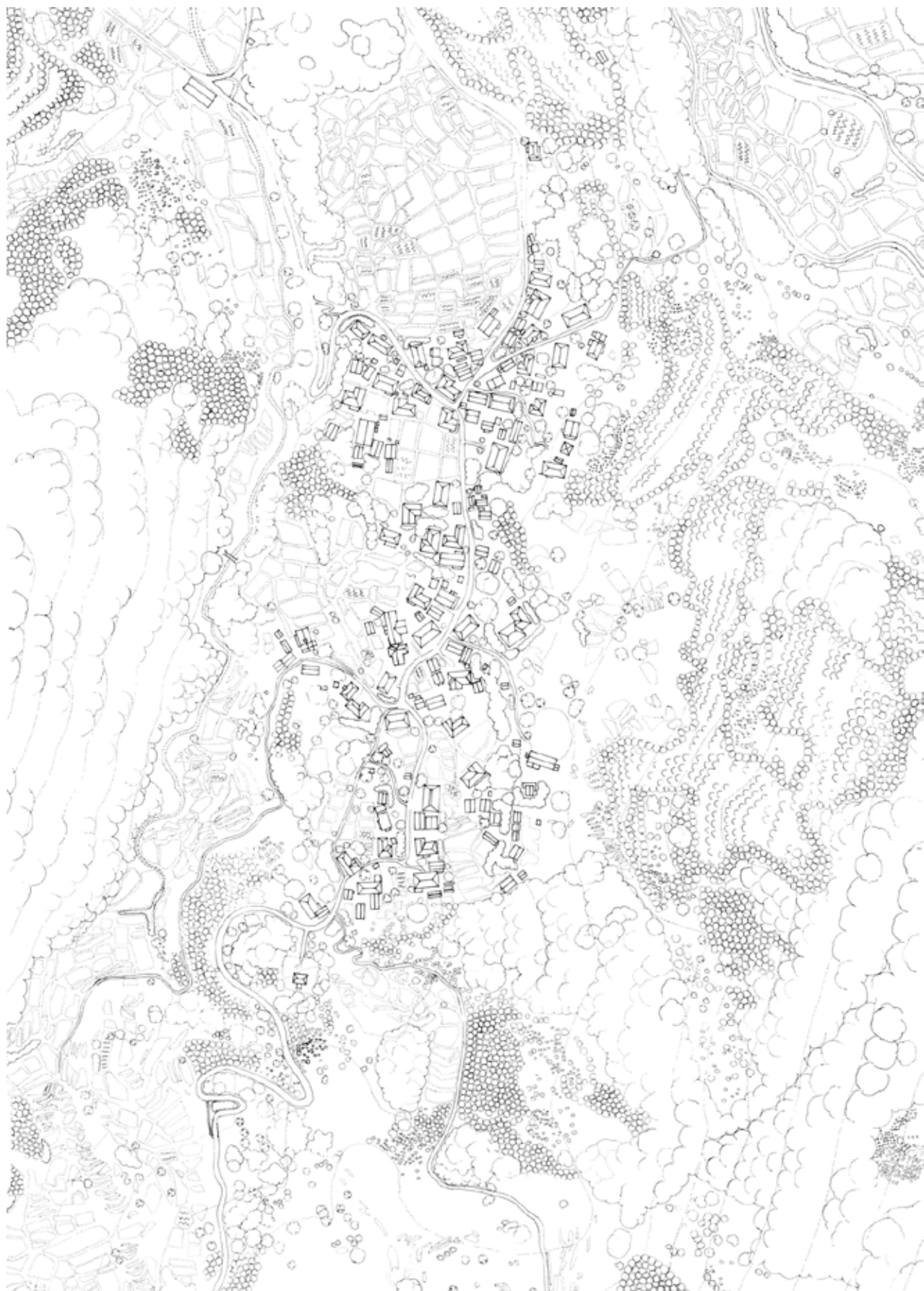


图 27 集落图 大石田地区 1968 年

## 第12節 名入地区

只見川左岸の第二段丘を開析して東流する概河川に沿って東西に展開する地区であって、集落の中心部で凡そ、北緯 37° 28' 48"・東経 139° 39' 47" 標高 241 ㍎を測る。

南に面する地区は、標高の低さと、只見川水面との比高の低さのため、三島町で最も降雪量は少なく、融雪も早く、町内では比較的温暖な地域ではあるが、経営耕地面積は、田畑あわせて 503 ㍎に過ぎず、専業農家はなく、世帯数も昭和 35 年の 56 世帯から平成 12 年までに 16 世帯が減少し、現世帯は 40 世帯、人口もまた 319 人から 104 人と 35.7 ㍎もの人口減少をみせ、さらにその現住人口 104 名の内の、33.4 ㍎に当たる 38 名が 70 歳以上の高齢者である。これは少子高齢化の中の中山間地過疎地区の典型的パターンである。



写真 53 名入地区 サイの神

この地区の成立が確かなものとしてどこまで遡れるかは明らかではないが、文献での初出は、文禄 3 年（1594）会津に移封された蒲生氏卿の作成になる領内高目録（内閣文庫蔵）に、泥利 高二百七石五斗一升、との記載がある。泥利は泥梨とも書き、デイリまたはナイリと読める、泥利の標記は名入（ナイリ）の音写か、名入の音写が泥利なのか定かではない。一説には原始仏教用語のサンスクリットに由来するとも云う。

三島町最古の古文書、慶長 2 年（1597）六月廿一日付の『桑原与宮下田畠出入の儀無事に付いて覚書の事』と表題される文書には、近隣の肝煎十名と藩諸役人二名の連署がみられ、その中に、ないり村肝煎帯刀と、ひら仮名書きの村名を記した署名があり、村名標記文字の混乱がみられる。

その後、寛永 19 年（1642）の大沼郡御蔵入分高目録に、高二百七石五斗一升名入村と現在同様の村名標記で、記載されている。以後村名標記に、泥利、ないりの文字が当てられたことはない。当地区の寺院は、当初地藏菩薩を本尊とする寺院で、地区の地藏平と呼ばれる土地があったと伝承される。曹洞宗靈淵山竜昌寺としての創建は、永享 8 年（1436）、現存の客殿は、寛延年間（1784～1750）の改築、御本尊は、曹洞宗の寺院では稀有の阿弥陀如来坐像（町指定文化財）、御尊像には、二度に及ぶ修理の痕跡が残るが、明らかに仏教美術史上藤末鎌初と言われる時期の造像で、寺伝を遥かに遡る古様の御本尊である。

さらに、当寺の所管する観音堂の木造持国天立像（町指定文化財）は元慶 8 年（884）御坂山大高寺の僧佑覚の造像と伝承される櫓の一木造りで、その彫像の技法は、会津勝常寺四天王の流れを汲むもので、当町最古の仏像である。

地区の氏神諏訪神社もまたその創建は古く、天正元年（1573）二瓶帯刀が奉祭したと伝承される。帯刀は前出慶長文書にあるないり村肝煎帯刀のことである。

寛永 8 年（1631）から慶安年中（1648～1652）にかけて、飯岡地域に散居していた堀内十兵衛・五十嵐貞政・坂内信吉・二瓶帯刀・小柴喜會右門等が相次いで現在の名入地区に居所を移した。この頃に名入地区の集落形成の基礎が定まった。現在 40 世帯、104 名の地区住民の姓もこの堀内・五十嵐・坂内・二瓶・小柴の姓が大半を占める、これは 360 年に永い間、営々として築き上げてきた地区の歴史の確かな現実である。

この永い歴史の中で、培ってきた地区の人達の神々への祈り、祖霊への祈り、それは季節の巡りによって祈り続けられた生活の祭事で、地域の人達の聖なるものへの、畏怖と、期待と、願望の世界であった。

それらは激動する歴史の渦に呑みこまれ、消え去ったものようだった。戦時中の軍事一色の世界、戦後の新生活運動等は、さらにそれらを加速させた。しかし消滅したかに見えたそれらは、消滅したのではなかつ

た、息を潜めて耐えていたのであった。地区の民俗行事のサイの神（国指定無形民俗文化財）・虫送り（県指定無形民俗文化財）はまさに消えようとしていた民俗行事が不死鳥のように甦った金色の羽ばたきであろう。

灌仏会（花祭り）・涅槃会（団子まき）・大般若・地藏講・上村観音講・下村観音講等も羽ばたきを持つ民俗行事の一であろう。

家数40戸、人口104名、小さな、小さな、少子高齢化が進む中山間地過疎の名入地区には1100年の歴史と、神々と祖霊への敬虔な祈りの世界を今に伝える数少ない地域である。

（文責 小柴吉男）





图 28 集落图 名入地区 1968 年

### 第13節 小山地区

新編会津風土記によれば、小山集落は名入村の端村と位置付けられ『家数八軒北は山に寄り南は只見川に傍ふ』と記されている。飯岡河岸段丘の辺縁部の傾斜面に、上の方から佐久間、小柴、坂内、鈴木を名乗る諸氏が居住している。内坂内は四軒あり密集して集落の中心をなしている。

集落名の小山というのは、高倉宮以仁王の従者小山某がこの地で亡くなったからという、もっともらしい口碑もあるが、高倉宮の東国潜行その事が史実として実証されたものではないので信ずるには至っていない。かといって只見

川右岸の河岸段丘崖の斜面であるから小山と呼べるような自然も景観も見当たらない。近くの飯岡平地は大高寺所縁の僧坊があった所といわれておりあるいはそれらに関わるものなのかも知れない。

越後街道に面して立派なお堂がある。十王堂である。古びた板の額がかなりの年代を物語る。しかし壇の中央に閻魔らしき木像があるが、十王の脇侍らしきものではなく、薬師如来の眷属らしき粗像が並べられている。発足は飯岡坊僧らによって修行堂として建立されたが、時代の推移によって薬師信仰の場としても利用されていったと推察されている。

また集落の成立についても、多くの問題があり、三坂山大高寺の隆衰や山岳仏教と修験宗の活動または領主の治世の態様などと相まって一様には容認されないが、大高寺領民としての出沒雇用と寺領の保安・信仰活動の拠点としての存在価値は十分認められている。

一般に佐久間や板橋・矢沢らの氏族が中世後期から近世にかけて越後より会津に移住した事実は認められているから、小山の佐久間が首長であれば集落の成立は中世以降と考えられる。前述したように、その存在価値については、宗教的環境理由と中世の戦略的通路の維持保安であった。

近世後半から川魚の捕獲利用が許され、漆役と共に藩に貢献することもあった。特に川魚漁に至っては明治以降梁を設置して他集落に売り出すほどの盛況ぶりであった。

昭和に入っては佐久間家で乳牛を飼い近隣に販売し、30年に入っては鈴木氏が建築ブームにのって製材業を興し集落に活力をもたらした。



写真 54 小山地区 サイの神

(文責 小柴七治)





图 29 集落图 小山地区 1968 年



## 第14節 高清水地区

小山集落と同じく名入村の端村として次のように新編会津風土記に記されている。

小山の西八町十間余にあり家数十軒東西二町南北三十四間、北は山により南は只見川に傍ふ

小山より西へ約1kmの下から二段目の河岸段丘上にあり、現在戸数も16戸程度の小集落である。小柴が6戸で一番多く上の小川の沢添えに集結し、矢沢が4戸、横田と菅家が2戸ずつ、他は渡部と五十嵐である。ここでも小柴は食糧担当の氏族と謂われそうである。矢沢は慧日寺七十七世雄仁法印の出生した所で修験に関わり、横田は中世の領主山内氏の一族で菅家は春日神社・山祇神社の神道系の祭祀に関わる氏族と診られている。

渡部は現在も（ふなば）と呼ばれているがこの氏族は小川荘以来のワタリベ即ち船場守なのである。五十嵐は只見川上流の越後よりの移住とみられ近辺の町村にはふだんに見られる氏姓である。

三坂山の麓に河岸段丘最上位の飯岡平地がある。大高寺の僧坊があった所と想定されている。

高清水と小山はこの段丘の周辺部にあたり当然大高寺の影響下にあった。慧日寺の座主となった雄仁の背後には九世紀のこのような歴史があった。十九世紀初めは天候不順で作調悪く、全国的に食糧不足特に天保3年（1832）は歴史的な大飢饉の年であった。そんな時雄仁は会津若松の真言宗弥勒寺に勤行、天性の才能を発揮して忽ち近隣に名声を博していた。そのような社会状況の中で慧日寺僧徒は年々数を減らしついに座主一人となり後任を求める有様となっていた。しかし雄仁には才はあっても格が無かった。そこで一旦中納言葉室顕孝公と養子縁組をして慧日寺に入山し七十七世の座主となった。いかに雄仁才ありと言えど世の貧困には抗する術もなく僅かの喜捨と絵画や書軸の謝礼が日々の糧であった。現在慧日寺資料館に展示されている書〔松竹梅〕の額は三島町高清水の矢沢家の所有のもので雄渾と筆力に溢れたのも雄仁一代の傑作である。

また当集落には古くからお正月に鳥追いのしきたりがある。その時歌われる童べ歌に「今日はどうこの鳥追いだ。〇〇さまの鳥追いだ。」というのがあり〇〇のところが集落によって異なり「天神様の鳥追いだ」となったり「大神様の鳥追いだ」と歌ったりする、高清水では「法印様の鳥追いだ」とうたわれている。雛流しの風習も昔から行われ近隣の話題になっている。雛流しと言えば和歌山市の淡島神社や鳥取県用瀬町の千代川が全国に知られている。このような風習も恐らくは修験僧の除災仕儀として伝承されて今日に至ったものであろう。和歌山県と言えはかなりの遠隔地で徒歩を主とした時代では理解しにくい面もあるが西方の小松氏は豊前からの移住である事実からみれば納得できる事実である。

（文責 小柴七治）



写真 55 高清水地区 雛流し



图 30 集落图 高清水地区 1968 年

## 第15節 滝原地区

名入・小山・高清水と三坂山大光寺周辺の集落は大高寺の宗教的動静特に修験僧の活動と深く関わり集落を形成してきた。しかしここ滝原は様相を一変する。第一に（一村一姓）で板橋を名乗っている。これはむしろお隣の早戸集落に関係ふかく早戸では圧倒的に佐久間姓が多い。この両姓は新潟県東蒲原郡に局在する村名で江戸末期の政変に伴う当地への移住とも考えられる。

新編会津風土記では早戸・滝原は現金山町に属する大石組に入り、滝原は早戸村の端村となっている。

○滝原 本村の東十二町にあり、家数二十三軒東西一町南北一丁二十間、西北は山を負、東南は菜圃にて只見川に近し。

○山川 只見川 村南六町にあり、水沼村の境内より来たり、東に流るる事三十三町、名入村の界に入る。  
と記されている。

名入村高清水から南に向かうと石英安山岩の硬い岩山に突き当たり、目の下は川で交通の難所である。住民はここを天狗岩と呼んでいる。岩の表面にやや白っぽい礫のような物がついて、これを天狗が敵と争ったときの石礫とみなしての小話である。しかし只見川から切り立ったこの岩は谷道をふさぎ徒歩交通の当時としては大変な難所で住民はこの岩を登り降りして隣村へ向かっていた。

平地が少なく水田面積がとれないために、住民は山辺の流水を堤に溜め岩石をくだき水田を開拓し、永年米作に専念してきた。

三坂山麓のカササギ大明神は伊佐須美神社の前身であるとの口承もある。古記に「人皇十代崇神天皇ノ御宇ヨリ大同元年マデ凡ソ千有余年管領地也。 南山板下ニ宮司阿部宿祢維治ト云ウ人居住郡貢受納」とある。また田割に土器片を発見しているが、まだ発掘調査はされていない。会津古叢記には、滝原ノ柵 東西三十間、南北二十九間、佐久間備中、文治年間から天正年間、とある。

（文責 小柴七治）



写真 56 滝原地区 イタヤカエデ





图 31 集落图 滝原地区 1968 年

## 第16節 早戸地区

佐久間、五十嵐、目黒、角田と多彩ではあるが、滝原の板橋のように特有の姓は、(佐久間)である。新編会津風土記の頃の戸数は22戸であったが現在は27戸である。

現在は湯ノ里祈りの里とよばれているが、江戸末期は石工の里として近隣に名をなしていた。

小津巻(サユウ)から縄文後期の堀ノ内式土器が発見されているが、未だ精査はされていない。



写真 57 早戸地区 虫供養

湯ノ里について新編会津風土記では「村より末の方六町只見川の岸上にあり、味臙渋にして積気・金瘦・癖痛を癒す、山間僻遠の地なれども、遠近より来たり浴する者少なからず、湯守家一軒を構いて浴客を待つ、如何なる故にか土人宝亀湯と称す」とあるが、一説では昔傷ついた鶴が飛来し湯につかり傷を癒して立ち去ったとのお話もあり、それからは(鶴の湯)と呼んだともいう。

近年只見川に観光遊覧の小舟を浮かべ湯屋周辺の道路も整備され飛躍的に浴客をふやしている。本来この集落は奥会津への交通に面し、縄文遺跡や中世の柵遺跡などからみても、集落の古さがうかがわれる。端村滝原へは西へ十二町、隣村高倉へは十六町、村上の比叡は昔の寺屋敷とよばれ高林寺という真言宗の寺の跡地であった。

温泉源の近くの安山岩の亀裂から硫黄の露出があり昭和の中頃まで重要な生活用品であった。

早戸柵

東西二十八間南北二十七間、天正の頃。佐久間新蔵人。(会津封内古叢記)

江戸時代末期から早戸石〔凝灰質砂岩〕の需要が多く墓石・倉の土台石等に、また橋などの建地石等に利用された。これにより石工も多くなり、幕末の東京湾の防備に会津藩では防塁建築を仰せつかり、早戸の石工達も数多く徴用された。

(文責 小柴七治)





图 32 集落图 早戸地区 1968 年





## 第7章 大きな物語

三島町の歴史文化の土台を形作る概況（第5章）、集落ごと多様性（第6章）を基礎として、現在進められている各地区の「暮らしと文化を話し合う会」や町全体で地域の記憶を語り合う場である「三島学フォーラム」等で浮かび上がってきた素材をつなぎ合わせて、第7章では「大きな物語」を描き出す。

この「大きな物語」は、三島町民の地域に対する愛着や誇り（アイデンティティ）を表現するものであり、今後10年間かけて三島町が取り組む「歴史まちづくりのテーマ」の骨格を示すものでもある。下記に示す3つの物語は、地区毎に続けられる「歴史文化の学習と伝承の場」と連動しつつ肉付けされ実行されるとともに、三島町の範囲を超えて、奥会津全体へと広がる歴史まちづくりの物語となることが期待されるものである。さらにこれらの物語のほかにも新しい物語を綴り続けていくことで深みのあるまちづくりが進められる。

第7章で描くのは、「大きな物語」への導入部であり、第8章「文化財の保存・活用の方針」で具体的な方針や展開やへと引き継がれる。さらに、別に定める「保存活用計画」において、重点的に取り組むプロジェクトが施策の計画を示していく。

### 大きな物語

- 第1節 荒屋敷遺跡から続く編み組・漆文化
- 第2節 道の物語（野仏・巡見使・川の道など）
- 第3節 サイの神など彩り豊かな祈りのある暮らし

## 第1節 テーマ1 荒屋敷遺跡から続く編み組・漆文化

### (1) ものがたり

#### 1) 「荒屋敷遺跡」

縄文時代晩期（約 2,400 年前）～弥生時代初期にかけての遺跡である荒屋敷遺跡は木製品、繊維製品及び漆製品が多量に出土し、縄文時代と弥生時代の転換期を示す全国的にも極めて重要な遺跡と位置づけられる。

この遺跡からは、三島町が続けている生活工芸運動へのつながりを感じさせる編組製品が多数出土している。それは、今の時代に手技をする人たちが、2400 年前の縄文人達がしていた仕事を受け継いでるともいえる。

#### 2) 「漆文化」

日本の漆文化は 9,000 年の歴史をもつ。縄文時代に漆の技術は確立され、荒屋敷遺跡ではそのほとんどが出揃っているといえる。塗料の中で「漆文化」というように文化をつけるのは世界中で日本の漆だけである。また漆を英語で「Japan」と言い、私たち日本人の身の回りのありとあらゆるものに塗られてきた。

#### 3) 「漆と精神文化」

漆は日本人の精神文化の成り立ちに非常に大きな役割を果たしてきた。特に縄文時代の信仰では祭具に塗られている。その色は「赤」。赤は火の色、血の色、循環して蘇る太陽の色、として復活・再生のシンボルという意味を持つ。また、縄文人はかぶれを引き起こす漆を恐れ、破邪あるいは魔除けとしての意味を待たせていた。

### (2) 関連する歴史・文化

編み組技術、漆の生産、出荷、地師の関連遺跡、森遺跡、小和瀬遺跡

### (3) 関連する文化財

県指定 荒屋敷遺跡出土品

その他 国指定伝統的工芸品「奥会津編み組細工」

### (4) 関連する地域・集落・施設

町 内 荒屋敷遺跡、荒屋敷遺跡出土品保管施設、交流センター山びこ、生活工芸館

県 内 昭和村（カラムシ）、県立博物館

### (5) 展開イメージ

#### 1) 調査・研究 荒屋敷遺跡出土品再調査

①漆の断面の調査（珪藻土を混ぜた可能性についての再検証）

②塗りの構造の分析（塗装工程の特色をつかむ。弥生系と縄文系の違い）

③繊維素材の再調査（編組品の素材の再調査）

縄文のデザイン研究

古くもあり新しくもあるデザインを活かす→文様、形、編み方、素材



## 2) 政 策

「遺跡が包含する歴史的価値と現代的価値を真に取り戻すために」

- ・日本の基層文化の9000年を考える漆サミットを開催
- ・身近に手に触れ、見ることの出来る環境を取り戻すために、「山びこ」を収蔵・展示施設として活用する。
- ・発掘直後の感動を共有し伝えるために、残っている荒屋敷遺跡の一部を発掘。動画で記録しつつ全工程をマスコミに開放する。

## (6) その他関連事項

ふるさと会津工人まつり、会津漆の芸術祭

## (7) 関連資料

三島町文化財調査報告書「荒屋敷遺跡Ⅱ」「荒屋敷遺跡Ⅲ」 三島町教育委員会  
企画展図録「縄文の四季」「漆のチカラ」「樹と竹」「ふくしまうるし物語」福島県立博物館  
交流センター山びこ荒屋敷遺跡展図録

## 第2節 テーマ2 道の物語（みしま野仏巡礼）

### (1) ものがたり

かつては、縄文の住まいの跡がでてきた場所であったり、命をつなぐための出づくり小屋であったり、交通の安全を守る野仏であったり、只見川を渡る船着き場であったり、村を守るための天然の要害であったり・・・

普段は何気なく通り過ぎてしまう道や、見過ごしてしまいそうな野仏、今では全く人の立ち入らないような山奥でさえも、語り手たちと一緒に歩くことで全く違った風景が浮かび上がってくる。それは、この地域で生計を立て、むらと家を守り、子孫を繋ぎ、昔から語り継いできたものを伝えてきた、まさにここで生きてきた証なのである。

きっとそれは、そこに住む人達のアイデンティティとなり、自分たちの祖先とのつながりを感じることが出来る忘れることのできない道となり、記憶となるであろう。

#### 1) みしま野仏巡礼四十八ヶ所めぐり（信仰の道）

道の傍らでひっそりと佇む野仏や神々の宿る祠にはこの地で自然と共に生き続けていくために捧げた人々の祈りがこめられている。

#### 2) 山ノ内氏の中世城館跡を訪ねる（歴史の道）

中世の城館跡は宮下、大登、川井、西方、大石田、名入、早戸にあり、そのいくつかは発掘調査報告書も刊行されている。早戸の城館跡が絶好のビューポイントにも成り得る。丸山城跡も少し手をかければ、ビューポイントになる可能性を秘めている。また滝谷の岩谷城跡も特徴ある地形である。これらをつなぐ道は旧街道沿いにある場合もあり（茶屋などが近代くらいまであったという場所もある）、近世の巡見使の道や近世の遺跡として登録されている一里塚や宿場町などもあり、「中世の山城と近世の街道」がセットとなり浮かび上がってくる。かつての街道に関しては、馬車追いやかつての運搬方法（牛・馬の使用、人の荷背負い）

も多彩。近代では只見川鉄道の歴史（完成による流通の変化など、桧原に駅ができたエピソードなど）もおもしろい。

### 3) 川の道

かつて、筏流しの難所であった早戸のダイゴオロシ、安全祈願のために建立された早戸本村の金毘羅様の石碑、かつて宮下をはじめいくつかの集落にあったといわれる船宿（早戸、高清水、宮下など）。時代は移り変わり、戦中に只見川電源流域の開発が始まり、完成する宮下発電所、（宮下ダム）また只見川の北側、南側は「川こっち」、「川向こう」などと呼ばれ、川を横断するには「船渡し」が必要だった。また、橋ができるまでは鉄道の鉄橋を渡る時代もあった。

只見川に流し、栗島様へと流れつくという高清水の雛流し、かつてはバツケ（崖）から沢に落とし、虫を境界の外に送った虫送りなどもあった。

生業面では只見川（及び、その支流沿い）にバツタリ小屋があり、米や雑穀の精白がおこなわれていた。只見川沿いにある川井集落には多くの水車小屋があった。

## （2）関連する歴史・文化

### みしま野仏巡礼

中世の城館跡 城館跡（宮下、大登、川井、西方、大石田、名入、早戸）、旧街道、一里塚、宿場町、馬追

川の道 筏流し、金毘羅様（早戸）、船宿（早戸、高清水、宮下、西方）、電源開発、船渡し、ひな流し

## （3）関連する文化財

地区プライド指定 駒啼瀬峠から丸山城間の古道（檜原）、松音寺と子安観音（川井）、上ノ山と石仏群（滝谷）、伊豆神社と境内（浅岐）、地藏堂と吉野桜（小山）、居平と湯の平間の古道・供養塔群（早戸）

## （4）関連する地域・集落・施設

町 内 全集落

## （5）展開イメージ

### 1) 調査・研究 ①基礎調査（聞き書き）

みしま野仏巡礼・・・

中世の城館跡・・・歴史的資料の整理

川の道・・・聞き書き 筏流し、船宿、船渡し など

### 2) 政策 ①ビューポイントの整備

②ルートづくり

## （6）関連資料 歴史の道調査報告書・沼田街道

福島県の城館跡報告書

西方下館遺跡報告書、上ノ山遺跡報告書、元屋敷遺跡報告書

みしまの野仏、みしまの石祠と供養塔

### 第3節 テーマ3 サイの神など彩り豊かな祈りのある暮らし

#### (1) ものがたり

##### 1) 年中行事と暮らしの物語

鳥追い、虫送り、虫供養、豊年踊り、初田植え、若木迎えなど、年中行事はただ独立してあるのではなく、その背景に人々の（かつての）日常生活との関わりがあるものが多い。年中行事をおこなう意味、その背景にある人々の暮らしを識ることにより、年中行事の意味を再確認し、「いのり、くらし、なりわい」をあらためて浮かび上がらせる。

各集落の年中行事をはじめ、かつての生活をしのばせる農具の活用、例えば西方のヒンムキ出作り小屋の暮らしといった聞き書きなどによるかつての暮らしのエピソード、および早戸の金毘羅様やヒンムキの山の神のように建立目的が生活に密着していることが伝承されている石碑などを結び付ける。

##### 2) 神仏への信仰

神社、寺、石碑・石仏といったものと、その背景（各々の由来など）に加え、参宮道中記や早戸のお札を絡めて近世の人々の信仰を明かし、三島の人々がどのようにいのりを捧げていたのか（いるのか）を結び付ける。

#### (2) 関連する歴史・文化

近 世 『会津風土記・風俗帳』（「大谷組風俗帳」）『新編会津風土記』に描かれた年中行事と暮らし

#### (3) 関連する文化財

国指定 三島町のサイノカミ

県指定 若水汲み、若木迎え、鳥追い、団子さし、初田植え、さいの神、松もやし、愛宕様参り、大谷愛宕様の火、豆まき、初午、初午（火伏せの行事）、三月節供と雛流し、虫送り、虫供養

地区プライド指定 愛宕様の山

その他 鼠供養塔をはじめ、路傍の石碑・石仏

#### (4) 関連する地域・集落・施設

町 内 桑原・早戸・小山・滝原・桧原・滝谷・西方・大登・川井・宮下・浅岐・大谷・大石田・高清水

#### (5) 展開イメージ

1) 調査・研究 三島町の既存の民俗調査研究は信仰と年中行事を中心であり、その成果として、サイノカミや諸行事が国指定、県指定の無形民俗文化財に指定されている。一方、上記の「くらし」「なりわい」となる生業や衣食住などの生活面については明らかにされていない面も多い。民俗に関して総合的な調査が必要となる。

2) 展 開 「いのり」「くらし」「なりわい」をキーワードに、これまでの暮らしの意味、その価値を確認するため、調査・研究の成果を、地域住民むけに小冊子の刊行や講演、さまざまな体験などを通して発表、活用する。地域住民とともに、保存・継承の気運を醸成していく。

3) 政 策 町史の民俗編、集落誌の編さんの予算の確保が望まれる。また、保存・継承の気運を醸成していくためにも、三島学フォーラムや三島を学ぶ、歩くといった既存の活動の



継続的な運営に加え、資料台帳の作成などの展開が求められる。

(6) 関連資料

三島のサイの神調査報告書

## 第8章 文化財の保存・継承・活用の方針

### 第1節 文化財保存・継承・活用の担い手

三島町が誇るべき文化財や暮らしの文化を伝え支えてきたのは、小さな集落を単位とした住民の日々の営みである。本構想が目標とする「文化財とその周辺環境を含めた総合的な保存・継承・活用の方策」も、主人公としての住民の理解と実行なしには成り立たない。年中行事のある暮らし、ものづくりのある暮らし、昔語りのある暮らし、地域とのつながりのある暮らし、農のある暮らし、自然と共生した暮らしなど、地域住民が守り継いできた多様性のある暮らしを土台とした「地に足のついた生き方の哲学」を再確認し、日々の暮らしの中で保存していくことが必要である。

しかし、地区で行われている年中行事などを見ると、主たる担い手となる地区住民は減少し、地区の少子高齢化が進んでいるためその形や意味も変わりつつあるのも現実である。例えば、大石田の虫送りのように、子どもたちが運営をしてきた年中行事に大人たちが積極的に関わり、他地区の子どもたちが応援に加わり、地縁血縁の非定住者が参加する場面も見られるようになっている。住民はこうした変化を受け入れつつ年中行事の精神を守り継承しようとしてきた。こうした変化は、年中行事に限らず、社寺仏閣や里山の維持管理などの面でも多く見受けられる。

近い将来、集落機能の維持管理が困難となる事態に至ることも想定し、主人公としての地域住民の主体性とその精神性を守りながら、地域住民を支える町民全体の理解と支援、町外に住む地縁血縁の人々や町外から足を運ぶ交流者も含めた関心と参加の仕組みづくりが必要である。その設計と運営のためには、文化財への専門知識を有し・住民の学習活動を支援し・多様な手法で文化財の価値を伝え・町内外の交流事業を企画運営できる「地域学芸員」が不可欠である。町行政は県や国と連携しながら、地域学芸員の人材確保と育成のための制度設計と財源確保に取り組むことが求められている。

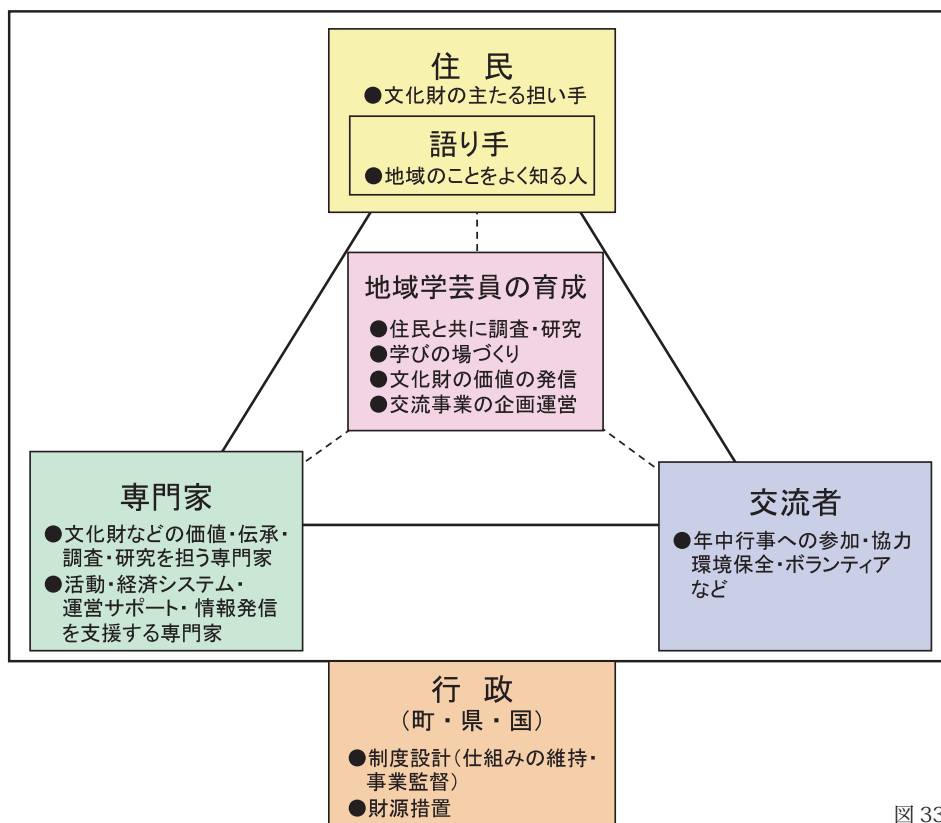


図33 文化財の担い手

### （１）主たる担い手となる地域住民

三島町の文化財は地区の住民が暮らしの中で伝え残して来たものであるといえる。しかし、それらの現状も課題が多い。特に年中行事を見てみると、文化財指定を受けた年中行事やそれ以外の年中行事も現在まで継承されてはいるが、若木迎えや若水汲みなど暮らしの中に溶け込めずに後継者がいなくなってしまうたり、大谷愛宕様の火のように全く継承されなくなってしまう場合もある。一方でサイの神や虫送りなどは形を変え、非定住者がその日にのみ手伝いに加わるということも見られる。やはり伝えていく意義や思いを持つそこに住む住民が主たる担い手となり、準備や段取りをしてこそ継承されていくものであるといえる。

### （２）専門家の役割

地域住民とともに文化財とその周辺環境の保存・継承をサポートする専門家との連携・協力が必要となる。専門家も町文化財専門委員や博物館学芸員のように文化財を学術的に調査・研究を進めていく専門家と、文化財の活用の仕組みや周辺環境を活かした経済の仕組みづくり、内外への情報発信など運営をサポートする専門家の二種類が考えられる。

前者の専門家は文化財の調査・研究を行い、新しい文化財の掘り起こしと価値付けを行い、主たる担い手たる地域住民への保存・継承する意味合いとその方法を研究していくことが役割となる。特に町文化財専門委員を含め町内在住の専門家は、地域住民として文化財を保存・継承し、自ら研究してきた方々であるため町の歴史や文化を広く普及していく上で極めて重要な役割を担う。

後者の専門家は、現在、各集落で交流者の受け入れ事業を始めようとしているが、実際に運営していく場合のアドバイスなどのサポートを行う役割を担う。

### （３）役割を担う交流者の受け入れ

人口減少と少子高齢化が進み、休止している年中行事や、全く保全されていない里山や田畑など多くの問題を抱えている。一方で、サイの神や虫送りなど地区の年中行事などによっては、地域住民が準備段取りをして近隣市町村に住む地縁者、血縁者などが参加協力する仕組みができあがっているものがある。また、本町のような中山間地域へ魅力を感じ、行事に参加見学する交流者が増えつつある。これら外部からの交流者を文化財の担い手の一部と位置付け、年中行事や集落の周辺環境の保全などをボランティアなどで受け入れしていく。

### （４）地域学芸員の育成

地域住民や専門家、交流者の役割を有機的に結びつけ活動を継続させていく地域学芸員の育成が必要である。住民と共に調査研究を行いながら学習と伝承の場をつくり、文化財の価値を明らかにしていく役割を担う。また、文化財専門委員がもつ知識と情報を将来にわたりつないでいく必要があるが、文化財を専門的に学びながら情報と知識を継承するには数年の養成期間が必要とされるため、地域学芸員の育成は将来の文化財専門委員の育成へとつながる。

### （５）担い手の仕組みを支える行政の役割

上記の担い手の役割を確かなものにしていくためには、行政においてその仕組みを作り、政策としての制度設計及び実行を可能にする財源措置を行うことが必要である。これらは町とともに、県や国との連携が必要となる。



## 第2節 文化財を核とした学習と伝承の場づくりの方策

暮らしの中で生きる文化財は、住民の「語り」の中で意味を持ち、その形を長らえる。

文化財を支える暮らしの作法や自然との付き合い方を含めた「地域の記憶」を、住民相互が学び合い・伝承していくための「場づくり」と、その内容を「蓄積・発信」する仕掛けづくりが基本的に重要である。

西方地区で始まった住民主体の聞き取りの方法論はきわめて示唆的である。「地域の記憶」を有する高齢者から聞き書きを行い、集落地図の上にモノやコトに関わる記憶を書き留め、さらに古写真や一次資料の発掘収集につなげる「3点セット方式」は、子ども世代やその親世代、外部の専門家、交流支援者も巻き込みながら継続的に行われることにより、地区コミュニティの活性化と新たな「物語」を生み出す母体となることが期待される。今後、その手法や展開を工夫しつつ、地域学芸員の働きかけによって町全地区へ広がることが期待される。

また、地区毎に実践される「学習と伝承の場づくり」は、三島町の歴史まちづくりの土台となる活動と位置付けられる。これからの行政の進めていく施策の中では、住民自治のペースを尊重し、多様な価値観や方向性を認め、「語り合い」の中で文化財をめぐる新しい価値観や活用策が生まれ育つことを見守る姿勢が必要である。それは子育てや木を育てることに似て、生き物が育つために必要な時間とも言える。

このような土台の育っていない地区へ性急に行政施策を持ち込んで展開することは、施設整備先行型のまちづくりであり、地域経営が持続しないまちづくりに陥る危険性がある。

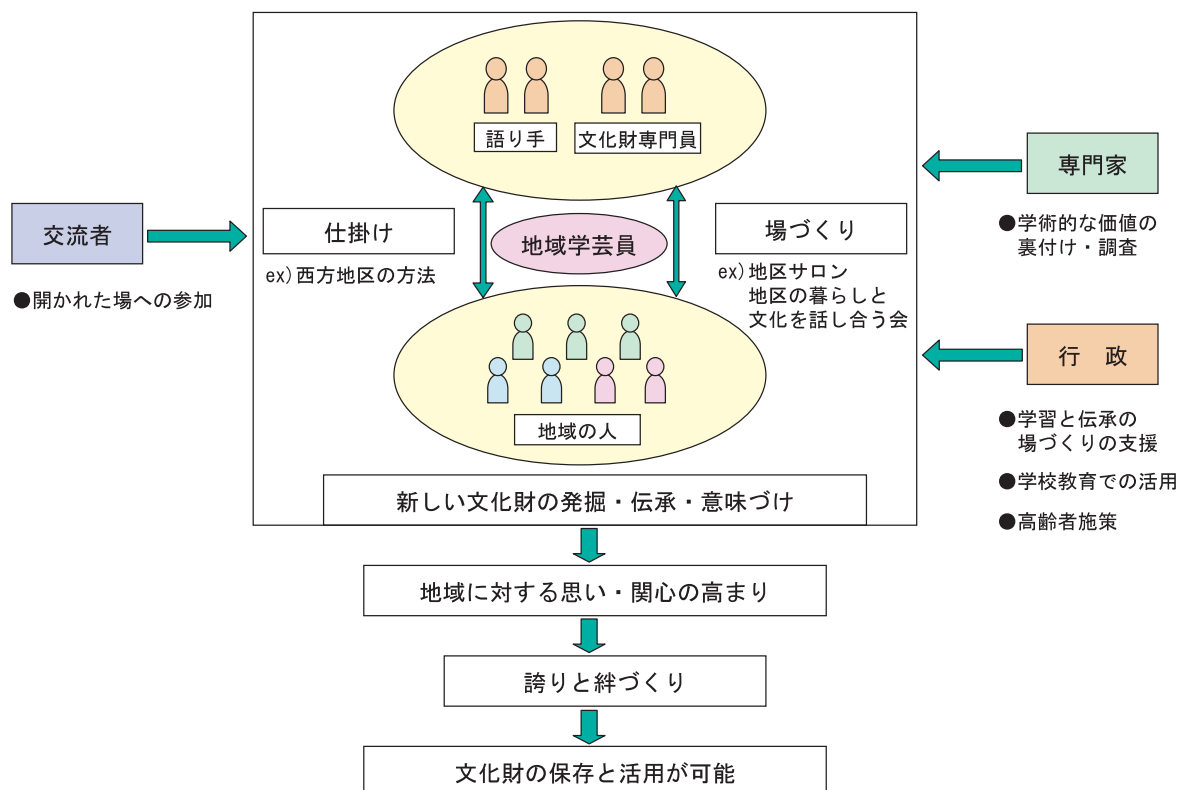


図34 学習と伝承の場づくり

### （１）学習と伝承の場

自らが住む地域で経済活動を行い、隅々まで歩き、四季を通じてそこに暮らし、地域のことを良く知る人々が消えつつある。経済活動の変化とともにライフスタイルも変わり、この地域ならではの自然との共生する生き方や知恵、技、そして、場所や地名のおこりなどの記憶そのものが薄らいでおり、伝わらなくなっている。

学習と伝承の場は、そのような地域の記憶を掘り起し、集落を単位として住民自らが地域の文化を守っていくために作っていく場である。特に子どもたちや若者、他地域から嫁いできた女性など文化財への関心が薄い人たちにとっても、それが自分にとって意味を持つようになり、生活への潤いをもたらしたり、誇りを持つことができたりなど、新しい意味付けの場となることが望まれる。直線的に文化財の保存・保護の価値観だけでなく、いろいろな人にとっての文化財の意味合いを作り出すことを目指していく。

### （２）学習と伝承の場づくりと仕掛け

学習と伝承の場では、住民の「語り」こそが意味を持ち、その語りから文化財の価値や守っていく意味合いを住民自らが見出していく。それらを引き出す仕掛けは西方地区が行う聞き書きや集落地図づくり、古写真集めなどがあり、集落の状況に応じた方法により組み立てていくことが必要となる。

これらの場づくりの主体は住民であり、サポートないしは企画運営を地域学芸員や行政などが行い、必要に応じて専門家に文化財の学術的な見地からの指導・助言や、その地域の活性化へ向けた運営のアドバイスを受けながら進める。

また、住民の中に文化財そのものの地域の記憶の掘り起こしや、記録編集作業のノウハウをもつ人材が必要不可欠であり、その育成も進めていく。

#### 例）西方地区の住民主体の聞き取り

西方地区では福島県地域づくり総合支援事業の中で平成21年度から3ヵ年事業で実施している。その中で西方に住んでいる人々の記憶を西方住民が聞き書きにより集約し、記録・伝承していくものである。手法として①集落地図、②住民の記憶、③古写真の3点から地域の物語を残し、集落記録誌をまとめるという活動である。

#### 例）地区の暮らしと文化を話し合う会

文化財総合的把握モデル事業の中で各地区の協力の下、老人クラブや地区のサロン事業などの人が集まる場に地区担当職員と文化財部局が参加して、簡単なお茶のみ話の中で集落地図を基に地域の文化財に関する聞き取りを行ってきた。

### （３）他事業との連携

生涯学習施策として「三島学フォーラム」や「三島を学ぶ」など、集落単体よりも大きく町全体に関する学びの場の提供も重要であり、集落の学びの場との連携が必要である。また、地域のことをよく知る人たちは主として高齢者であるため、その方々からの聞き取りを行うことは、大きな意味での関係性づくりにもつながるといえる。

### 第3節 文化財と周辺環境の保全方策

文化財と周辺環境を住民が使いながら守ってきた三島町の集落は、「いのり - 暮らし - なりわい」が連関した一つの小宇宙であった。この集落景観を広い意味の「文化的景観」と捉えて、個々に特色ある美しい集落景観に磨きをかけていく。

三島町の周辺地区においては、人々の暮らしを支えてきた森林・農地・水系など文化財の周辺環境の荒廃が進みつつあり、将来的な悪影響が心配される。山間地の小規模集落で著しい過疎高齢化によって、こうした環境整備に人の手が入らなくなり、集落景観が崩壊していく現状に対して、農林施策や、環境施策などと連携しながら、文化財行政として出来ることを考えていく必要がある。

宮下地区、西方地区、早戸地区などで始まっている「地区コミュニティ再生計画」の取り組みでは、地区毎に特色ある有形文化財・建造物・街並み景観を活かして、地区活性化のための将来計画が構想されている。文化財を「使いながら守っていく」という基本姿勢の下、地区住民の合意・専門家の知見・行政施策の支援を関係させながら、「住んでよし／訪れてよし／世間よし」の元気な集落づくりを進めていく。

早戸地区や間方地区などは、山間部に位置する小規模で高齢化の進んだ集落であるが、地区住民のリーダーが中心となり、「小さな神々の道」を中心とした祈りの文化や、「マタギや手仕事のワザが生きる村」として外部の支援者や研究者の関心を集めている。こうした活動の芽を応援し、外部とつなげていく支援策が行政に求められている。

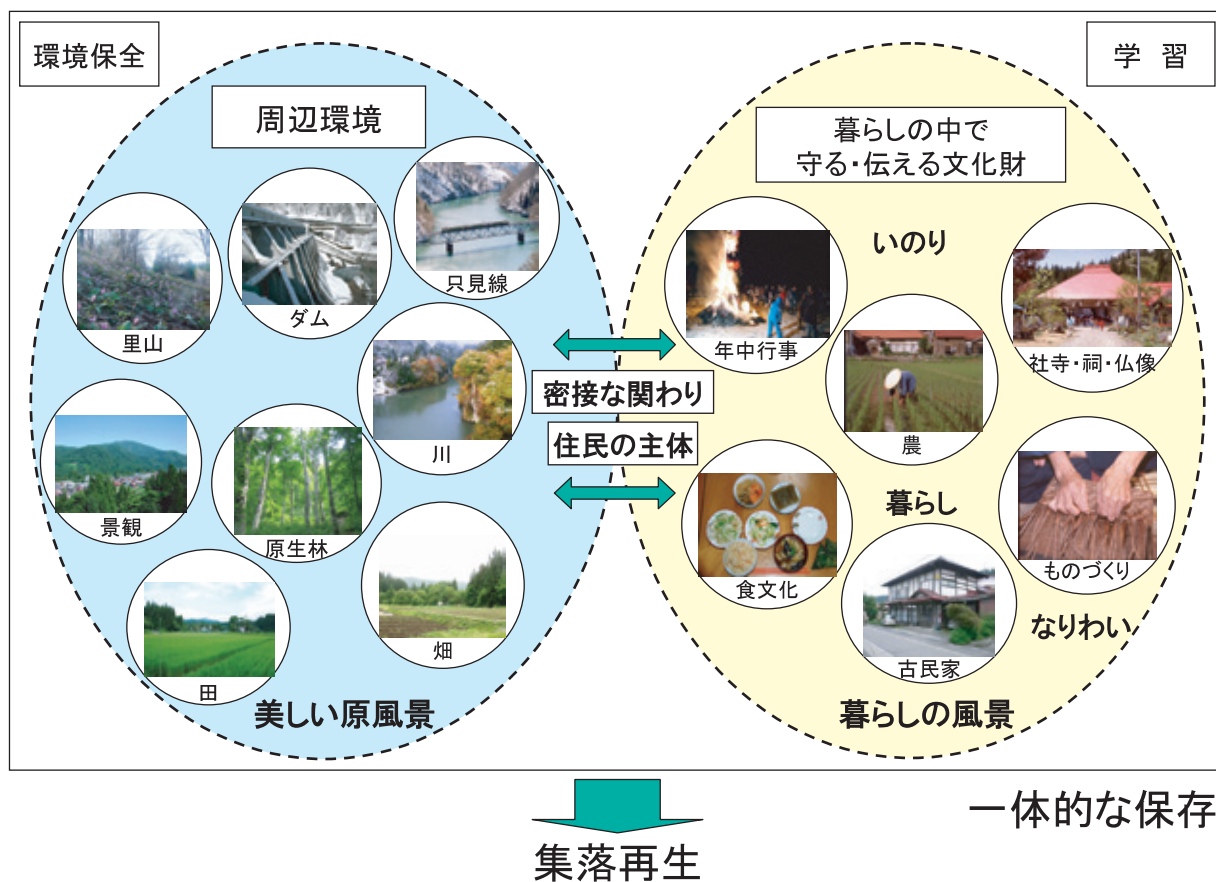


図 35 集落再生



## （１）文化財と周辺環境の密接な関わり

三島町の集落は只見川や三坂山、ブナの原生林などの自然、田、畑などの里山の景観、そして、只見線や宮下ダムといった近代化遺産など、様々な周辺環境が幾重にも折り重なって形成されている。それらは人々の暮らしと密接に関わり、生業としてと同時に、それら周辺環境が文化財をより惹きたてる美しい原風景をもたらし、地域の人々の心の拠り所となり、来訪者の心の癒しと安らぎとなっている。

## （２）文化財の保全方策

文化財保護法に規定する文化財は集落に属している。その文化財と関連を持った暮らしがあれば、その暮らしを学び、守っていくことが可能となる。文化財保護法に基づく文化財を保存・継承していく上での方針を定めていく。また、これらの保護施策にあたっては、国や県の文化財指定のレベルにはなくとも連携していく。

### １）有形文化財

仏像・社寺・仏閣といった有形文化財についても檀家や氏子など住民が守ってきている文化財ではあるが、それらの修繕・修復などの専門的な保存方法が必要になると考えられる。

また、県指定文化財の荒屋敷遺跡に関しては、現有の町内施設では保管状態が好ましくない状態なので県立博物館に寄託し保存している。荒屋敷遺跡を含め町内での収蔵、展示ができる状態を目指していく。

### ２）無形文化財

生活工芸運動により着目されている奥会津編み組細工などの工芸技術や三島神楽保存会の神楽や地区で行われている盆踊りなどの芸能といった無形文化財は、映像による記録保存を行いながら、人々の暮らしの中であるいは地区の中で継承していく。

### ３）民俗文化財

民俗文化財は三島スタイルを構築していく上での土台となる部分であり、特に力点を置いていく。また、住民の学びと伝承の場づくりとも連動させていく。

### ４）記念物

町で指定している天然記念物は川井のオオケヤキ、大石田のオナカナシ、そしてキマダラルリツバメである。

### ５）文化的景観

地区プライド運動に指定している自然・景観部門などを改めてその価値を見直しながら、寺や神社を中心とした周辺環境などの集落の景観を大切にしていく。

### ６）伝統的建造物群

宮下地区の宮下方式の軸組み工法の町並みや、西方地区の宿場町の名残を残す家屋群、各集落に残る養蚕を行っていた古民家群は指定を受けてはいないが貴重な文化財と言える。すぐに文化庁指定を目指すものではなくとも、住民とその価値についての調査や研究を進めていくことは必要と考える。

### ７）埋蔵文化財

町の代表的な遺跡である荒屋敷遺跡をはじめ、町内の遺跡には埋蔵文化財が眠っている。包蔵地として指定されている遺跡についての告知を継続していく。一方、特に三島町の古代から平安時代にかけての遺跡に関する発掘調査がされていないので、三島町の歴史全体を把握するためにも調査することが必要である。

## 第4節 文化財を核とした情報発信の仕組みづくり

デジタルミュージアムは、町が蓄積してきた文化財調査資料、地域の記憶、住民活動の成果、まちづくり活動の記録などを台帳に記録・保存していき、インターネット上で発信する仕組みである。いわば、台帳は収蔵庫であり、インターネット上での発信は展示・交流である。既存の実物展示を行う博物館に比べて、展示内容の更新が容易にでき、閲覧者層（来館者層）がはるかに広いことが大きな利点である。

この仕組みが魅力的な内容を発信し続け、住民活動にも意味あるものとするためには、地区の「学習と伝承の場」で生み出される情報や、小中学校の地域学習の成果、歴史まちづくりイベントの予告や報告など、地域の実際の活動と連動していることが鍵となる。

こうした実際の活動から得られる情報を現地に関わって収集し、インターネット上への掲載に適した形に編集し、展示・交流の場として情報発信していく仕組みを構築していく。また、それらの情報を集約し、町内外からの問合せなどを受ける交流窓口を設置するなど、多面的なつながり方が必要となってくる。

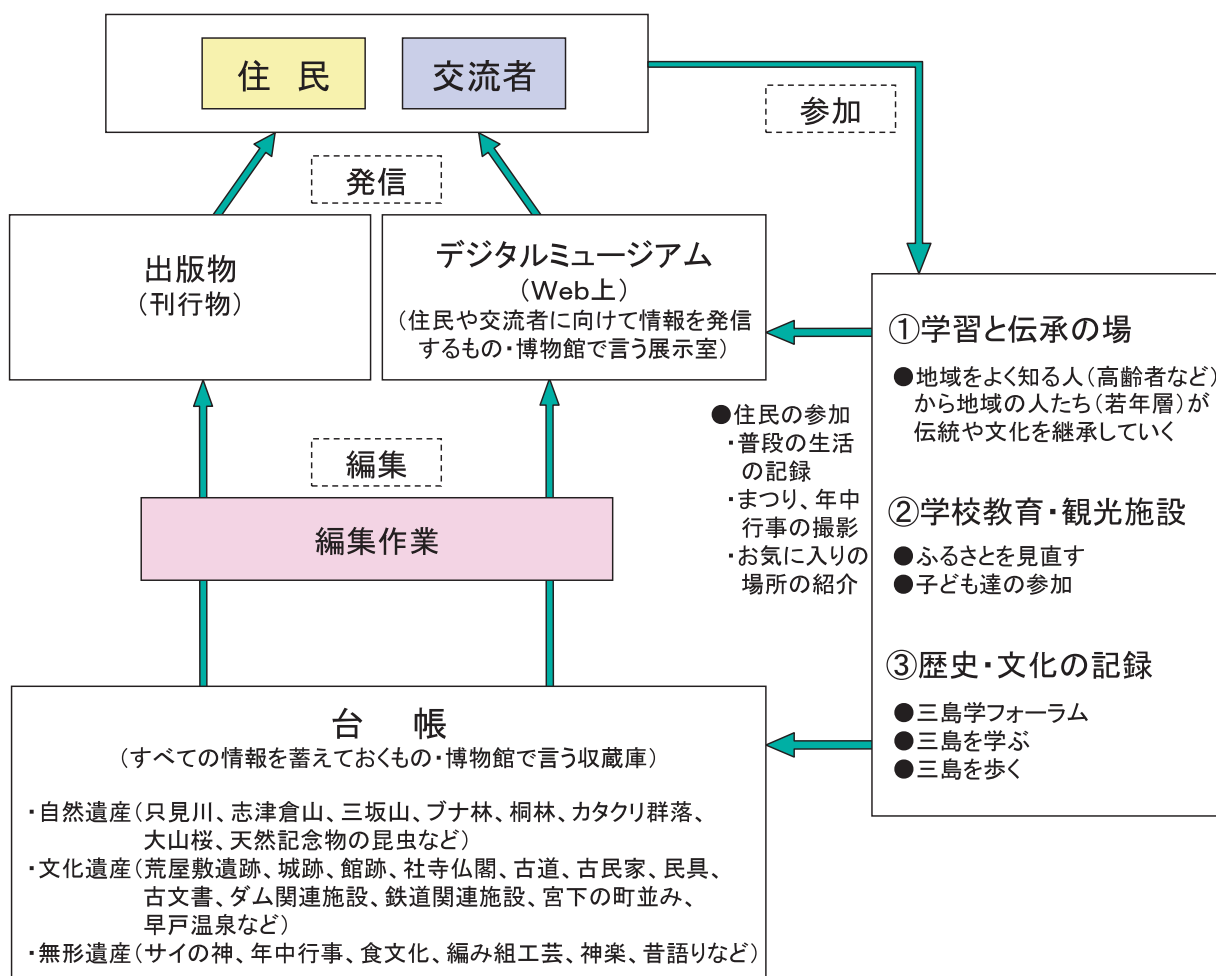


図 36 情報発信

### （１）デジタル化することの意義

地域の高齢者が個人的に残しているコンテンツ（写真や思い出の品や生活史の記憶）を、子どもや孫の世代に残すべき「地域の記憶」として、住民自らが発見、再認識し、共有していくためのものにする。

- １）劣化が激しい貴重な資料でも、デジタル化することにより利活用が容易になる。
- ２）それらのメタデータ（背景情報や記録様式）を付加すれば研究・教育の資源として活用できる。
- ３）アクセス方法に配慮をすれば、障害者や高齢者などの利用にも開かれたメディアとなることができる。
- ４）限られた地域や市民の財産から、広く社会に向けた発信や連携が可能となる「開かれたメディア」になる。

### （２）デジタルコンテンツについて

コンテンツの中心に住民の年中行事、農林業・工芸・食文化の技、集落景観、出来事の記憶などを記録した映像と文字とする。サイの神の取材や思い出づくり、思い出記録のようなものを思いついた時に書き込めるものを作っていくと、逆に広く言えばそれに参加してくれた人たちがいる意味では学芸員となる。そういうものがあるとデジタルアーカイブも成長していけるのではないかと考えられる。

### （３）デジタルコンテンツの更新方法について

個人や市民グループが中心となって、「まち歩き」をしながら地域の再発見をしたり、個々人の資料や記憶を持ち寄って「資料を作り」、さらに「デジタル技術による処理」（データベース化とホームページ公開など）をするなど住民が更新していく仕組みをつくる。

### （４）web 配信の方法

住民が参加しやすい、更新作業に手をつけやすい方法にする。

### （５）地域での活動の情報発信

- １）第２節で出てくるような地域の学びや伝承の場という地区毎のいろいろな人が集まる場がある。そこにはいろいろな集落地図や聞き書きや古写真など、具体的なツールを収集していく、作っていくというアナログな作業をデジタル化していくといういわば更新の手法がある。
- ２）学校教育など様々な社会教育や観光施設などの日常的に人が関わっている施設群がある。小中学校での聞き書きなど社会教育の施設や集まりなどでもその子ども達も関わっている。社会教育施設や観光施設群にもその端末による情報発信、収集が可能な状態を作る。
- ３）「三島学フォーラム」「三島を歩く」「三島を学ぶ」や、その他の歴史文化に関わるような行事などで外部の専門家や内部の専門家が様々な発表・講演を行う。その記録をデータ化して専門家の知識も含めて更新して追加していく。

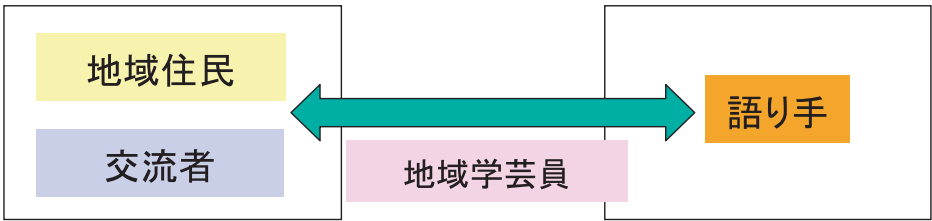


## 第5節 文化財を核とした交流観光の仕組みづくり

三島町が30年来展開してきた「ふるさと運動」の5つの運動の成果を引き継ぎ、文化財を核としたまちづくりを推進するために、学習型・環境保全型・民間主導型を原則とした「交流観光」の仕組みづくりを進める。交流観光とは三島町の歴史や文化に学びながら、住民や地域団体と直接関わって交流・対話・体験をする観光とする。

文化財の保存・継承・活用の視点から交流観光の仕組みに貢献できることは、三島町の歴史文化資源の価値を明らかにすること（調査研究）、その価値を住民学習の場で展開すること（学習と伝承）、それらの情報を編集加工して広く発信すること（デジタルミュージアム）、住民活動と交流観光をつなぐ拠点施設の企画運営（コア施設の再生）、これら一連の活動の中核を担うコーディネーター集団を育成すること（専門的人材の育成）であろう。

こうした取り組みが、集落の文化財や周辺環境を地域資源として「小さな仕事づくり」の支援策や、体験学習と交流観光の推進機関としての「奥会津自然学校（仮称）」設立準備委員会の活動や、只見川流域の広域観光の再構築に向けた「奥会津振興センター」と連携する時、より大きな効果をあげるものと期待される。



	語り手	コーディネーター
意 義	集落の昔からのことをよく知っている人。	町全体の文化・観光に関することを広く知り、地域での学習会やグリーンツーリズムなどの事業を企てる人。
役 割	地域住民や交流者に集落のことや自分の暮らしについて、地域で語る。必ずしも言葉による語りでなくとも、ものを作る、農業をするなど手で伝えることもあり得る。	農山村体験やグリーンツーリズム、エコツーリズムなどの事業を企画運営し、交流事業を展開するためのエンジン役となる人。 講座や研修などを行い、町全体の自然地理・縄文・中世近代などの重要なポイントを学び、語り手と交流者をつなぐ。各集落で産まれる新しい物語ルートをつないで案内する人。 (専門的な学芸員)
担い手の 発掘・育成	地域の話し合いから見つけ出していく。	育成していく。

図 37 交流観光の仕組み①

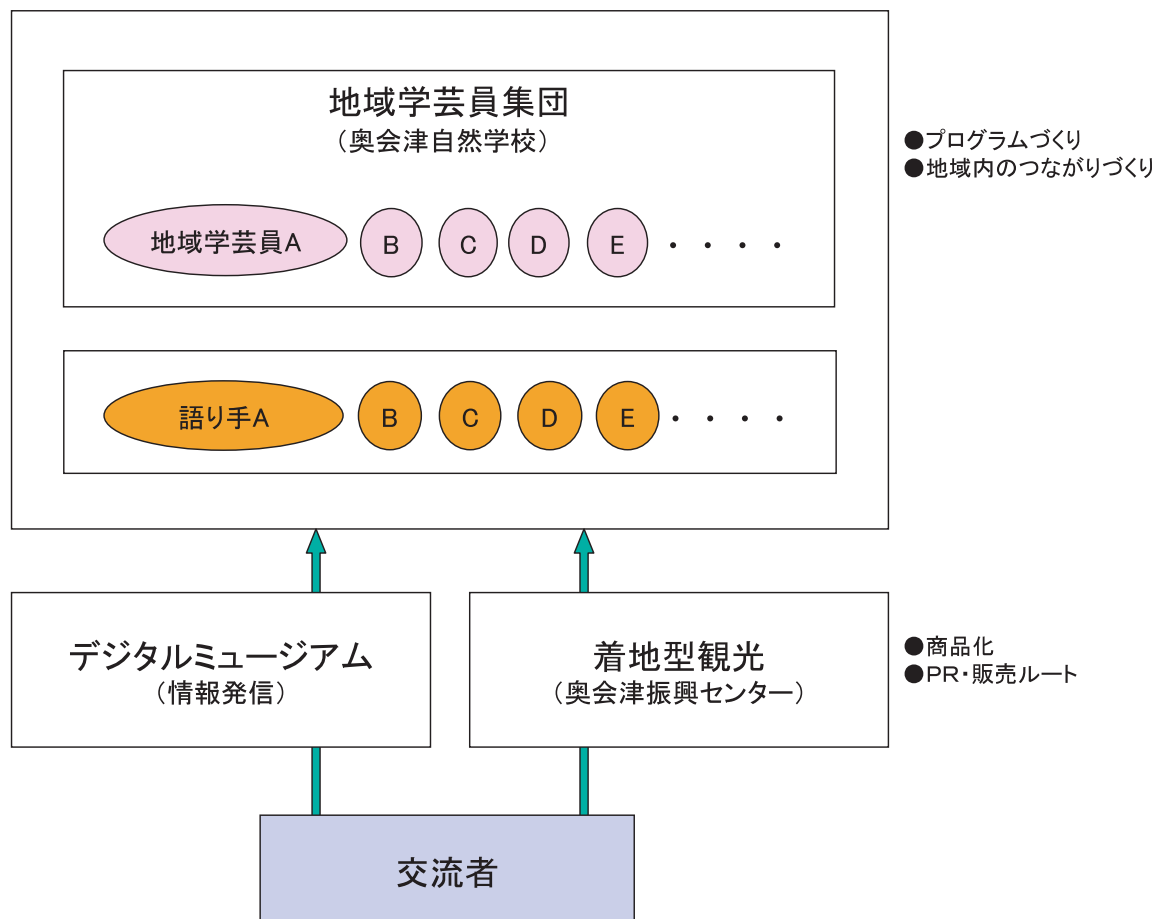


図 38 交流観光の仕組み②

### (1) 交流観光

ふるさと運動の理念として、町にある資源を住民自らが掘り起こして価値を高めてきた 30 年間の積み重ねにより、地区プライド運動や生活工芸運動など暮らしの中にある文化が着目され、交流の資源としても活用されてきた。今後も基本的な理念を引き継ぎながら、住民主体の集落再生への取り組みを活性化させ、交流をより一層促進していく。

※交流観光・・・三島町の歴史や文化から学びながら、住民や地域団体と直接関わって、交流・対話・体験をする観光。

### (2) コーディネーターの育成

交流をより一層促進していく中で、町全体で文化財と暮らしの文化を大切に残そうとしていることを発信し、それらを学習、見学、体験できることが必要となる。

そこで、学習と伝承の場などから掘り起こされた集落の物語を基礎として、地域にある文化財や人々の暮らしぶりを案内する案内人の仕組みを構築していく。案内人は地域住民の学習と伝承の場での活躍や町全体で進めていく文化観光の担い手として期待される。

また、コミュニティビジネスや文化の情報発信などを行い地域の活性化に取り組む民間組織・団体などとの連携を図っていく。

例) 奥会津自然学校

例) 奥会津振興センター

表 11

## ①国指定・選定・登録文化財

指定等分類	名 称	所 在 地
重要無形民俗文化財	1 三島町のサイノカミ	福島県大沼郡三島町

## ②福島県指定文化財

指定等分類	名 称	所 在 地（大沼郡三島町大字）
有形文化財・考古資料	1 荒屋敷遺跡出土品 一括 （280点）	福島県会津若松市城東町 福島県立博物館
民俗文化財・無形	1 若水汲み	桑原
	2 若水汲み	早戸
	3 若木迎え（山参）	名入字小山
	4 若木迎え	早戸字滝原居平
	5 若木迎え	早戸
	6 鳥追い	桧原
	7 鳥追い	滝谷
	8 鳥追い	西方
	9 だんごさし	大登
	10 だんごさし	川井
	11 初田植え	川井
	12 さいの神	宮下
	13 松もやし（さいの神）	桑原
	14 さいの神	大登
指定等分類	名 称	所 在 地（大沼郡三島町大字）
民俗文化財・無形	15 さいの神	川井
	16 さいの神	桧原
	17 さいの神	滝谷
	18 さいの神	浅岐
	19 さいの神	西方
	20 さいの神	名入
	21 さいの神	早戸字滝原
	22 愛宕様参り	桑原
	23 大谷愛宕様の火	大谷
	24 豆まき	大石田
	25 初午	桑原
	26 初午	大谷
	27 初午（火伏せの行事）	西方
	28 三月節句と雛流し	高清水



	29 虫送り	西方
	30 虫送り	名入
	31 虫送り	大谷
	32 虫送り	大石田
	33 虫供養	早戸

③三島町指定文化財

指定等分類	名 称	所 在 地（大沼郡三島町大字）
有形文化財・美術工芸	1 木像持国天立像	名入字下居平平良761番地1 龍昌寺
	2 木像阿弥陀如来座像	名入字根岸居平1358番地 龍昌寺
	3 木像聖徳太子立像	西方字巢郷4684番地 西隆寺
	4 木像薬師如来座像	川井字居平236番地 松音寺
	5 木像聖観音菩薩座像	大石田字下居平589番地 延命寺
有形文化財・建造物	6 伊夜彦神社本殿	西方字上原3456番地 稻荷神社
有形文化財・古文書	7 河越文書	桑原字居平1 河越家
有形文化財・考古資料	8 土笛	大谷中際遺跡出土 三島町教育委員会
	9 荒屋敷遺跡出土品 一括 (234点)	西方字上原3580番地 三島町生涯学習センター 会津若松市城東町1番25号 福島県立博物館
天然記念物・植物	10 大石田のおなかナシ	大石田字櫛尾居平 大石田部落
	11 川井の大ケヤキ	川井字居平87番地 森田弥七
天然記念物・動物	12 キマダラルリツバメ	三島町全域

表 12

		第一次指定	第二次指定
①	宮下地区	さいの神 秋祭り	宮昌寺・三島神社の境内と大杉
②	桑原地区	愛宕様参り 百萬遍	愛宕様の山
③	大登	さいの神	多賀神社と境内
④	川井	刈り上げ さいの神	松音寺と子安観音
⑤	桧原	鳥追い	駒啼瀬峠から丸山城間の古道
⑥	滝谷	さいの神	上ノ山と石仏群
⑦	大谷	愛宕様の火	大谷川の清流と河川敷公園
⑧	浅岐	さいの神	伊豆神社と境内
⑨	間方	盆踊り	志津倉登山道、雨乞岩とブナ林
⑩	虫送り	虫送り 鳥追い	岩倉山鬼子母神堂とふるさとの山
⑪	大石田	虫送り 庚申講	虚空蔵堂と参道・祈りの道
⑫	名入	虫送り	諏訪神社と雪見のイチョウ
⑬	小山	地藏様の祭	地藏堂と吉野桜
⑭	高清水	山の神祭 ひな流し	大山祇神社と境内・上の清水
⑮	滝原	土用の宮籠り	駒形神社と境内・イタヤカエデ
⑯	早戸	虫供養 山の神講	居平と湯の平間の古道・供養塔群

表 13

西暦	年号	歴史事項	参考記事
四〇〇		四道将軍大彦命越後国より銀山峠を通して会津盆地に入る この頃伊佐須美明神、御神楽嶽より博士山に遷宮すると云う	大塚山古墳築く 大和朝廷の開設
七七〇	宝亀 元	早戸の只見川端より温泉湧出、宝亀湯と呼ばれ、後ツルの湯と呼ばれる	平安遷都
八〇六	大同 元	僧徳一、磐梯山麓に恵日寺を建立する	
八〇七	大同 二	僧徳一、柳津に円蔵寺、入間方に高野寺、三坂山に大高寺を建立 すと云う	
八〇九	大同 四	徳一の弟子源道、筑波山より来て大谷鳥海に大同山源道寺を建立 すと云う	
九三五	承平 五	「和名抄」に会津の郡名出る、大沼・河沼の郡名出る	平将門の乱
一一五一	仁平 元	入間方横雲山高野寺平氏一族により焼亡されたと云う	
一一八九	文治 五	源頼朝が山ノ内・佐原・長沼・河原田四氏に会津の地を分け与えた のち輩名氏が佐原氏に代わって全会津を支配する	鎌倉幕府の開設
一一九〇	建久 元	山ノ内季基伊北横田に中丸城を築くと云う	
一二七〇	文永 七	宮下に道作り始まり、今年成就して左うつぼと云う	
一三七九	天授 五	輩名氏の祖会津に来る、黒川（若松）に城を築く	
一三九〇	明德 元	輩名氏滝谷に岩谷城を築き、重臣松本源兵衛を住ませたのち松 本氏の家臣井上河内介を城代として常住させた 若松輩名氏と伊北山ノ内氏の国土境界は大谷川を境とした	南北朝の乱世
一四四〇	永享一二	川井村に松風山松音寺を僧鉄山建立	
一四六四	寛正 五	大谷村に大溪山円福寺を僧春海建立	応仁の乱
一四七〇	文明 二	横田城主山ノ内俊光西方稲荷神社を修復	
一四九二	明応 元	銭守長者藤原保佑、松竹庵を西方に移し宝沢山西隆寺と改め正元 を住ませた この年八月十九日会津大地震、大暴風が発生	山城国一揆
一四九六	明応 五	大谷春日大明神を源道寺の麓に祀る	
一五〇三	文亀 三	猪苗代兼載、大谷円福寺に僧春海を訪ねた	
一五一三	永正一〇	桑原・宮下・浅岐に三島神社、間方に伊豆神社、入間方に箱根神 社建立	
一五二一	大永 元	桧原に内山淡路守神明神社を建立、桧原丸山城築城	
一五二九	享禄 二	大石田高尾神社建立する	
一五三二	天文 元	桧原に薬師堂建立す	
一五三四	天文 三	三月二十一日入間方高野寺本尊、大日如来立像逆瀬川村黒岩山奥 隆寺に移る	



西暦	年号	歴史事項	参考記事
一五三六	天文 五	蘆名盛氏が横田中丸城を攻める	
一五四一	天文一〇	佐久間久兵衛高清水に春日神社を建立する	
一五四三	天文一二	白髭水と呼ばれる大洪水が只見川流域を襲う	ポルトガルより鉄砲
一五四五	天文一四	沼沢丸山城主山ノ内俊興の二男山ノ内氏信西方に來たり、八幡森を切り開き車峠に鳴ヶ城を築く、この冬会津雪降らず	キリスト教伝来
一五五三	天文二一	五月十一日夜半鳴ヶ城主山ノ内氏信、三坂山大高寺を夜襲焼亡さす	
一五五五	弘治 元	八月十九日大地震、堂岩山崩れ、上滝谷壊滅し、今の居平に移住すと云う	
一五五八	永禄 元	四月、横田山ノ内俊清の二男山ノ内俊政、伊北小川より兵を挙げ、河内介を滅ぼして岩谷城を奪う 俊政の弟俊範・松原丸山城主内山淡路守平俊景の婿養子となる 岩谷城主俊政は殿平に、二の平・三の平には家臣が住み、居平を城下町として整備す	戦国時代
一五六七	永禄一〇	僧・延滝谷に岩谷山金瀧寺を建立 山ノ内俊政・滝谷に諏訪神社、稲荷神社を建立	
一五六九	永禄一二	松原丸山城主山ノ内俊政春日神社・観音堂を建立	
一五七八	天正 六	西方鳴ヶ城主山ノ内重勝、葦名盛氏と戦い、敗れて自害す	足利幕府亡ぶ
一五八九	天正一七	葦名義広、伊達政宗と戦い大敗す 滝谷城主山ノ内俊基参戦し摺上原にて戦死	秀吉全国統一
一五九〇	天正一八	豊臣秀吉若松に來て奥羽仕置断行。葦名・山ノ内・長沼・河原田の会津四家の領地を没収し蒲生氏郷に与える	安土桃山時代
一五九四	文禄 三	文禄の総検地始まる、各村邑の長が検地縄親を勤め、年貢を徴収して納む	
一五九八	慶長 三	上杉景勝会津百二十万石の大名となり、越後春日山城より若松に家臣団をつれて移動、その折野沢村・西方村に宿駅を整備す	関が原の合戦
一五九九	慶長 四	滝谷山ノ内治部少輔大割元に任ぜられ百八十六ヶ村を支配す	
一六〇一	慶長 六	山ノ内治部少輔大嶽山より鉛の鉱脈発見、十%の歩合で採掘する	家康征夷大將軍
一六一一	慶長一六	八月二十四日会津大地震、長床倒壊、会津で三千七百人余死す	大阪城落城
一六二七	寛永 四	加藤嘉明が会津四十万石の大名となる	
一六三三	寛永一〇	諸国巡見使制度始まる。古町村・布沢村・野尻村・大谷村定宿泊地と定む	
一六四一	寛永一八	只見川上流より越後領百姓源蔵が有力な銀山を発見	
一六四二	寛永一九	銀山平の所有をめぐり会越国境論争が始まる この年会津大飢饉、百姓多く餓死し、伊北の百姓三百人が越後国へ散逃する	金山谷大凶作

西暦	年号	歴史事項	参考記事
一六四三	寛永二〇	保科正之会津二十三万石の大名となる 御蔵入領五万五千石は幕府天領となるも会津藩の預り支配を受ける	鎖国はじむ
一六四五	正保 二	この年割元制度廃され郷頭制度となる、山ノ内治部少輔が滝谷組 十五ヶ村の郷頭に、二瓶三右衛門が大谷組の郷頭に任命される	慶安の御触書出 る
一六六七	寛文 七	第二回目の諸国巡見使発遣、これに伴い会津藩では領内の主要街 道に一里塚を建立、伊北街道・銀山街道・金山郷街道・沼田街道 にも築立された	分地制限令出る
一六六九	寛文 九	滝谷・桧原に横田三友俊益が来村し、先祖山ノ内氏の霊を弔う	
一六八一	天和 元	山ノ内吉右衛門滝谷に生まれる、後の筆頭郷頭	
一六八七	貞享 四	「捨馬制度」により南山御蔵入領内に宿駅を設置	「奥の細道」な る
一六九六	元禄 九	滝谷村が滝谷川漁獲権争議で会津藩より幕府に訴えられるが山ノ 内吉右衛門の活躍で勝訴	「農業全書」なる
一七一〇	宝永 七	諸国巡見使が銀山街道経由で若松に向かう	
一七一七	享保 二	山ノ内吉右衛門幕府巡見使有馬内膳に、南山領の会津藩預り支配 を願い、死罪覚悟で一人直訴をする	享保の改革はじ む
一七二一	享保 六	南山御蔵入領百姓一揆勃発、百姓・名主訴願十三ヶ条を幕府に直 訴する 山ノ内吉右衛門郷頭答弁書十三ヶ条を執筆し提出、賞与を受ける	
一七八三	天明 三	天明の大飢饉、多くの人が餓死し、村を離散し耕地が大いに荒廃 した	
一七八八	天明 八	五月諸国巡見使南山に入る、古川古松軒「東遊雑記」に沿道の見 聞記詳述す	寛政の改革はじ む
一八二〇	文政 三	六月会津豪雨、大谷川大洪水、山抜けにより大谷村湖底に沈む	伊能忠敬日本地 図完成
一八二一	文政 四	十一月十九日会津大地震、震源地沼沢湖付近、人家多く潰れ死亡 者多し	
一八三三	天保 四	天保の大飢饉、九年まで続き村々大いに疲弊す	
一八六三	文久 三	南山御蔵入領五万五千石が会津藩に編入される	
一八六八	明治 元	戊辰戦争勃発、九月二十三日会津藩降伏す 十月一日若松に民政局設置、西方村に民政局の出張所置かれる 同日大谷組にヤーヤー一揆勃発し、全会津に拡大する	大政奉還
一八六九	明治 二	民政局を廃止、若松県を設置	版籍奉還
一八七二	明治 五	学制発布、西方、南大谷小学校が開学した	
一八七六	明治 九	若松県を廃止、磐前県と共に福島県に統合	廃藩設置
一八八一	明治一四	沼田街道仮定県道三等に昇格	

西暦	年号	歴史事項	参考記事
一八八八	明治二一	町村制公布、旧村名が大字となり、村町合併進む	大日本帝国憲法 発布
一八九一	明治二四	十一月沼田街道全線開通し、若松から只見間を馬車が運行	
一八九三	明治二六	三谷街道改修工事完成	
一九四一	昭和一六	十月二十八日国鉄会津線が宮下まで開通し、国鉄会津宮下線と改称	太平洋戦争始まる
一九四二	昭和一七	宮下村大火、一一五戸全焼、寺社、役場、学校民家三戸のみ残る	
一九四五	昭和二〇	太平洋戦争終わる	広島・長崎に原爆投下
一九四六	昭和二一	只見川電源開発第一号となる宮下発電所が水力発電を開始	新憲法発布
一九五五	昭和三〇	七月二十日宮下村と西方村が合併して三島村となる	
一九五六	昭和三一	九月二十日国鉄会津宮下線が宮下より川口まで延伸し開通した	テレビ放送開始
一九六一	昭和三六	四月一日町制の施行により三島町が発足した	



本報告書は、文化庁の委託業務として、三島町及び三島町教育委員会が実施した文化財総合的把握モデル事業の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等には文化庁の承認手続きが必要です。

## 三島町歴史文化基本構想

■発行日 平成23年3月

■発行 三島町

■編集 三島町教育委員会

〒969-7511 福島県大沼郡三島町大字宮下字宮下350

TEL0241-48-5599 FAX0241-48-5544

■印刷 三洋印刷株式会社